
リリカルなのはThe origin 永遠の名を使う者

黒のカリスマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはThe origin 永遠の名を使う者

【Nコード】

N5068X

【作者名】

黒のカリスマ

【あらすじ】

君死んじやったから転生してよ……

んな適当な……

能力は何にする？

じゃあ俺が考えたAtoz

主人公転生ものです

リリカルなのはの世界に転生した大道連夜

彼の目的はその世界のすべてを覆すこと

「俺は破壊者にでもなんでもなつてやる！
この世界は俺がぶつ壊す！」

自分の中でさまざまな解釈で進めて行きます

少々どころかかなりの矛盾点あるかもしれませんが、皆様どうぞ暖かく見守ってやってください

ちなみに主人公はチート野郎です

プロローグ（前書き）

頑張ります

プロローグ

目を開けると、そこは真っ暗だった

？『嘘はいけません・・・真っ暗だったら何も見えなんでしょう？』

確かに・・・訂正

目を開けると、そこには何もない空間が広がっていた

？『よろしい・・・では行きますよ？』

その声が聞こえるや否や、俺の目の前に白装束の女性が現れた

俺「あんた誰？ここは何処？俺の記憶が確かなら、ベットで寝てた筈なんだけどな？」

俺は非常に気分が悪い

なぜか？答えは簡単である

人が気持ちよく寝ていたのに起きたら意味のわからない場所に連れられている

俺はこういうドッキリ系は大嫌いな部類である

？「あの・・・喋って良いですか？」

白装束の女は若干冷や汗を流しながらそういった

俺「どうぞ？ただし、用件は明確に、ハッキリと、わかりやすくでお願いするよ？」

おれがそう言つと、女性はさらに冷や汗を流していたが、構うものか早く家に返してほしかった

？「あの・・・私の名前はアテネと言います

これでも神の端くれでして、今回貴方をこの場にお連れしたのは、貴方が現世で予定していなかった死者になったからです。」

俺「え？俺死んだの？」

何の冗談かと思つたが、直後に俺の真下に移された映像には、確かに天井に潰されて肉塊になった俺だったものが合つた

俺「あらら、これはえげつない・・・なんでこんなことに？」

俺がアテネに説明を求めると、おろおろとしながら答えた

アテネ「あの・・・実は、貴方の住んでいたマンションの屋上で、自爆テロがあつたんです。

しかし、貴方は奇跡的にも生還する筈だつたんです。
ですが・・・」

俺「ですが？」

アテネ「あう・・・その、間違つて私が貴方をそのテロで死亡する死亡者リストに入れちゃつたんです！ごめんあんさい！！」

アテネはそう言って頭を下げた

俺「なるほどね．．．つまり死んだのはあんたのせいってわけだ」

アテネ「すいません！あの．．．よろしかったら転生システムをご提供できますが．．．」

アテネは涙を目にためながらそういった

何？転生システム？

あの二次元小説でよくやってるアレ？

なに？チートな能力とかもらえちゃったりできるわけ？

アテネ「できますよ．．．」

俺「人の心を読むなアテネ．．．そか．．．なら転生してくれほれ、ここに能力とか纏めた紙あるから」

そういつて俺は突然現れた一枚の紙をアテネに渡した

アテネ「何処に持ってたんですか？」

俺「いやな、やっぱそう言う転生とか憧れるじゃんだからさ、能力とか考えてたのさ．．．まあ本当に使うときがくるなんて思いたくなかったけどな」

アテネ「なるほど．．．へえ」分かりました

ではこれらの能力 + α を付けて、貴方をリリカルなのはの世界に転生させます」

アテネがそう言った瞬間、彼女の腕から光があふれ、俺の中に吸い込まれた

瞬間、俺の体は光り輝いた

俺「おお・・・こいつは・・・」

アテネ「じゃ、じゃあ・・・頑張ってください」

俺が沸きあがる力に感動していると、アテネがそう言って俺の足元に穴を開けた

俺「ん？ああああああああああ！！！」

俺はそのまま穴に落下して行き、意識を失った

プロローグ（後書き）

はいどうも

黒のカリスマです（笑）

これから頑張りますんでよろしく願いしますOTL

主人公設定（前書き）

大体の設定です

主人公設定

主人公

名前 大道連夜

年齢 19 ↓ 7 歳

身長 130 cm

体重 27 kg

性格 自堕落で無気力、だが芯は一本通っているようで、時々確信をつく言動をする

一様7歳という年齢なのだから言葉遣いは自重しようと思っているらしいのだが、結局自重できない結果になっている
約束は守るほうで、一度結んだ約束には律儀に従う

生前の記憶があるので、原作ブレイクをしようと奔走はする

能力 A t o z

某半分こライダーに登場したガイアメモリのA〜Zまで全26種類のメモリを使うことができる

実際に主で使うのは「E」のエターナルメモリ、ロストドライバーを使って仮面ライダーエターナルに変身する

しかし、本人がまだエターナルに認められていないため、変身できるのはレッドフレアのみとなっている

魔力量ランク EX

デバイスは持っていないが、防壁程度は発動させることができる

エターナル レッドフレア

身長 180cm

体重 70kg

連夜が永遠の記憶を持つ「E」の記号が記されたエターナルメモリを、自身の腰に装着したロストドライバーを使って変身した姿
レッドフレアはエターナルの基本形態であり、両手には真つ赤な炎を思わせる模様が入っている

しかし、この状態ではエターナルのすべての力をすべて使えるわけではない

連夜の能力であるAtrozはエターナルの真の姿であるブルーフレアでなければ使えないため、この姿はある意味不完全体であるといえる

マキシマムドライブは「エターナルレクイエム」ではなく、紅蓮の炎を拳に纏い相手に攻撃する「永久の終焉を告げる炎（エターナル・エンド・フレア）」である

主人公設定（後書き）

ふう・・・とりあえずしばらくはレイトフレアで戦わせます

というより、なのはの暗黒時代から始める予定です

でわでわ

第一話（前書き）

さあ 始めました第一話

連夜の活躍にごきたいください

第一話

目を開けると、辺りには見たことのない町並みが広がっていた

ふと道路の標識を見ると、「海鳴市」と書かれていた

連夜「まじでリリカルなのはの世界に来ちまったわけか……しかしこの体、えらくちんまりしちまったなあ」

そういつて俺は自分の体を見た

19歳だった俺の体今7歳くらいの体になっていた

着ている格好はなんというかいたって普通の格好と言ったところである

今気づいたが、俺は覚えのないカバンを背負っている

連夜「あのアテネって女、ちゃんと俺の紙に書いてあったとおりにしたんだろなあ……」

？「ちゃんとやったわよ……ちゃんと」

俺がそう言つと、何処からか声が聞こえた

連夜「ん？うお！」

見ると、俺の肩に大人の手のひらサイズくらいの人形が乗っていた

連夜「ん？リインフォースか？」

ふとかなり先にでるであろうリインフォースに似ていたのでその人形にそんなことを言うとは

アテネ「違います！アテネですよ・・・もう！貴方を転生させた後に他の神様達に貴方を観察しなさいって言われたからこの姿で来たんですよ

人形みたいなサイズなら何も問題ないでしょう？」

そういつてアテネは頬を膨らませた

連夜「そうだな・・・これくらいのサイズなら可愛いな」

俺はそう言つてアテネの頭を撫でた

アテネ「ん／＼か、可愛いなんて／＼」

アテネがなぜか顔を赤くした

と言つかこいつキャラ変わりすぎだろ（笑）

連夜「で？今この世界はどういう状況なわけ？」

俺が説明を求めると、アテネは答えてくれた

アテネ「今は原作開始から2年前ですね
なのはちゃんのお暗黒時代じゃないですか？」

連夜「そうかい、つかなんでリリカルなのはの世界に転生させたん

だよ？」

歩きながら俺は肩に乗っているアテネに聞いた

アテネ「私達神も人間界のアニメなんかはよく見るんですよ
このリリカルの世界はなんか悲しいお話がいっぱい合ったので、
できれば方向修正できたらなあと思ってたんですよねえ」

そういつてアテネはこの世界を転生先に選んだ理由を話した

まあ確かに、リリカルなのはは悲しい話が多いよな

だから二次元小説とかで原作ブレイクしてる話を見るとすげえよかつたなあって思えたんだよなあ

と、そんなことを思っている・・・

？「はぁ・・・」

ふと近くで女の子のため息が聞こえてきた

と言っかため息が聞こえるってどんだけでかいたため息だよ・・・

アテネ「さっそく会っちゃいましたね連夜さん」

アテネがそう言っている場所を指差した

そこに居たのは・・・

なのは「はぁ・・・」

そう、未来の魔王、白い悪魔、未来のエースオブエース高町なのは
が一人さびしくブランコに乗っていた
なのはside

なのは「はぁ・・・」

私はもう何度目かも分からないため息を吐いた

寂しい

そんな感情が私の中にいつぱいあった

事故でお父さんが入院し、そのお父さんの看病とお店の手伝いで、
お兄ちゃんもお姉ちゃんもお母さんも、誰も私に構ってくれる余裕
なんてない

私はそんなみんなに迷惑をかけちゃいけないから、いい子にしないとダメなの

わがまま言っちゃいけないの

だからこうして1人公園に居る

寂しい

そんなときだった

？「君、こんな所で1人で居て、寂しくないのかい？」

そう言つて来た人が居た

私が顔を上げると、其処には私と同じ年くらいの、肩に可愛い人形を乗せた男の子が居ました

side out

連夜「君、こんな所で一人で居て、寂しくないのかい？」

なのは「ふえ？」

そう言つて顔を上げた女の子、それはやはり高町なのはだった

連夜「寂しくないのかい？こんな所に一人で」

俺がそう言つと、なのはは一瞬考えたような表情になったが、すぐに返答した

なのは「寂しくなんか・・・ないもん」

その顔は思いつきり嘘を言っているのが丸分かりの顔だったが、まあ敢えて今此処ではふれないでいた

連夜「へえ、もう一度聞くけど、寂しくないのかい？」

俺がもう一度同じ質問をした

すると、今度は俯きながら、小さく言つた

なのは「寂しくなんか・・・ないもん」

平気だもん・・・」

連夜「へえ、そうなんだ・・・」

俺はそう言って少し間を置いて、なのはのほっぺを思いっきり引っ張った

なのは「ふえ！？」

なのはは非常に驚いた様子だった

連夜「私寂しいですって顔してるくせに寂しくないなんて嘘つくのはこの口か？」

ああ？この口か？」

俺はそう言いながらなのはのほっぺを左右に伸び縮みさせた

なのは「ふええ！ふあなしてよお」

なのはは手を上下に振りながら必死に抗議していた

連夜「今お前の口はぱっくり開いちまって
今なら本音が出ちまってもしょうがねえ」

なのは「ふおんね？」

なのはが聞き返した

連夜「正直に言え、お前は寂しくないのか？」

俺の言葉に、なのはは少し考えたような表情になった

そして、抵抗を止め、ゆっくりと話した

なのは「ふぁびしいよ・・・」

その言葉を聞いて、俺は引つ張っていたなのはのほっぺを離した

なのは「あう・・・んにゃ」

なのはは真っ赤になったほっぺをさすっていた

なのは「寂しくないわけないよ・・・寂しいよ

でも、そんなわがまま言っちゃいけないの

私はいいい子じゃなきゃダメなの
だから・・・」

連夜「馬鹿やろう」

俺はそう言っただのはに手刀を繰り出し、言葉を止めた

連夜「それはわがままじゃねえ・・・当たり前的事だ

その当たり前の事を言わないほうがどうかしてる

お前ほどの年齢の女の子が、なにいつちよまえに遠慮してんだ
そんなのはな、もっと大人になってからするもんだ」

なのは「そんなこと無理だもん！

私には友達だっていないもん！

こんな私と、誰も友達になつてくれないもん・・・」

なのは目に涙を溜めてそう言った

連夜「なら俺がお前の友達になってやる！

これからはお前の側に俺が居てやる

わがままだって極力聞いてやるよ」

俺はそう言ってなのは目を見つめた

なのは「ふええ／＼そっそんな／＼友達って・・・どうやってな
ったら／＼」

なのははそう言って顔を真っ赤にしておろおろしていた

連夜「名前を呼べ・・・俺がお前の名前を呼ぶ

そしたらお前も俺の名前を呼んでくれ

お互いが返事をしたら、その時点で俺達は友達だ」

俺は笑顔でそう言った

連夜「俺の名前は連夜、大道連夜だ

お前の名前は？」

そう言って俺は問い掛ける

分かっているとは言ってもあちらは初対面

聞くだけ聞いとかないな

なのは「なのは・・・高町なのは・・・」

連夜「よろしくな、高町なのは」

俺がそう言ってなのはの名前を呼んだ

すると、なのはの表情が途端に明るくなった

なのは「うん！よろしくね、大道連夜君」

こうして、俺となのはは友達になった

第二話（前書き）

更新です

こんなペースが続けばいいのに・・・

第二話

なのはside

連夜君と友達になった私はそこからいろいろな話をしました

お互いの家族のこと、自分のこと、連夜君は両親が小さなころに他界して、今は独り暮らしだそうです

なのは「連夜君は寂しくないの？」

私はふとそんなことを聞きました

連夜「寂しいさ。でもな、今はお前って言う友達ができたし寂しくなんかないよ」

そういつて連夜君は私の頭を撫でてきました

なのは「ん／＼／」

ふええ、そんな事言われたら顔がどんどん赤くなっちゃうよぉ

連夜君は私と同年らしいのですが、なぜか年上のお兄さんのような感覚がしています

大人って感じです

だから余計に照れちゃうんだよ／＼／

連夜「まあしかし、なのはの親父さんも大変だな
事故とはいえかなりの怪我だったんだろう？」

翠屋だっけか？そりゃ一家の大黒柱が入院しちまったら、経営も厳
しくなるわなあ」

私の頭を撫でながら、連夜君はそんなことを言っていました

連夜「安心しろよ？これからは俺がいてやる
だから高町、お前は一人じゃないぞ」

そういつて連夜君は私に笑いかけてくれました

そしたらなぜか、嬉しい筈なのに涙がこぼれてきたのです

なのは「あれ？おかしいな？なんで・・・うれしいのに涙が
あれ、もう止まんないよ・・・ごめんね連夜君・・・私、わたし・・・」

私がそういつて連夜君を見つめたときでした

連夜君が私を抱きしめたのです

なのは「ふえ／＼／＼れ、連夜君？」

連夜「まったく、ずっと我慢してたんだな

我慢の糸が切れちまったんだよ・・・高町、お前は今泣いていい
泣いて良いんだぞ」

そういつて連夜君は私をやさしく抱きしめてくれました

その瞬間、私の中で何かが切れたのか、目からは滝のように涙があふれました

なのは「うっ・うええええええええええええええええええええん」

私は、連夜君の胸に顔をこすり付けて、泣いていました

Side out

連夜「落ち着いたか？」

なのは「うん・・・ありがとう」

連夜の胸の中でそう頷いたなのは、ゆっくりと顔を上げた

目が涙で充血し、酷い顔になっていたが、それでもその表情は先ほどのようなくらい表情ではなかった

連夜「すっかり遅くなっちまったな

翠屋だっけ？お前んち、そこまで送るよ」

なのは「ええ、良いよ・・・もう暗くなっちゃったし、危ないよ」

なのははそう言って断ろうとしたが、連夜が「気にすんな、これも友達の仕事ってやつだよ」

と言って、なのはの手を握り、すたすたと歩いていった

なのは「ねえ連夜君

どうして私のことなのはって呼んでくれないの？」

帰り道、なのははそう言って連夜の顔を覗き込んだ

連夜「俺は女性の名前を呼ぶのは結婚する人だけって決めてんだよ
だから高町としかよばねえの」

なのは「そっそうなんだ／＼結婚／＼／」

なのはの頬が赤くなっているが、今は触れないでおこう

連夜「翠屋、此处か？」

そう言って連夜達の前にあったのは、翠屋と書かれた看板が掛けられて
いる喫茶店だった

なのは「うん、此处だよ

ありがとう連夜君」

そういつてなのはが礼を言った

連夜「気にすんな、じゃ俺は帰るからよ
また明日な」

そう言って連夜は帰ろうとしたが

なのは「あ、待ってよ連夜君
上がってって、何かお礼がしたいから」

そう言ってなのはに無理やり家に入れられてしまった

なのは「ただいま」

そう言っただのはが玄関を開けた、すると

恭也「なのは！？こんな時間までどこに行ってたんだ！」

彼女の兄である高町恭也が待っていた

なのは「お兄ちゃん・・・その・・・ごめんな・・・」

連夜「謝る必要なんてねえよなのは・・・」

謝ろうとしたなのはを連夜がとめた

恭也「ん？誰だ君は？これは家の問題だ！口を出さないでもらおうか！？」

連夜「よく言うぜ・・・自分のことに必死でこいつの事なんかまるで見てなかったくせに・・・自分のことは棚に上げて、なのはには説教か？」

恭也「な！君には関係ないだろう！」

連夜「いやあるね・・・俺は今日こいつの友達になった大道連夜だ俺がこいつに会ったとき、こいつは何をしてたか分かるか？必死に孤独に耐えながら独りブランコに乗っていたんだぞ？そうさせたのは誰でもない・・・あんた達家族だ！」

連夜は声を荒げて言った

恭也はその言葉を返すことができなかった

恭也「くっ！君には！」

桃子「そこまでしなさい恭也・・・」

そう言つて恭也を一声で止めた人がいた

落ち着いた風格で連夜達の前に現れたのは、なのはの母高町桃子であつた

恭也「母さん・・・」

桃子「その子が言っていることは正論よ

私もあなたも決して言い訳することはできないわ」

そう言つて、桃子はなのはの前で膝を折り、屈んだ

なのは「！-！」

なのははまた怒られると思つたのか、目をつぶつた

だが、なのはが次に感じたのは痛みではなかつた

『ギュッ』

なのは「え？」

なのは驚いて目を開けると、桃子がなのはを抱きしめていた

桃子「ごめんなさいなのは……お母さん達、あなたに甘えて一向に構ってあげられなくて……ごめんね」

そう言った桃子は肩が振るえ、泣いているようだった

なのは「お母さん……ふわあああああん」

なのはも一緒になった泣き出してしまった

それを見ていた連夜は、ゆっくりと玄関から出て行った

連夜「やれやれ、とりあえずファーストコンタクトは成功か」

そう言って連夜は肩に乗っているアテネに話しかけた

アテネ「そうですねって言うか！今まで私のこと忘れてたでしょう！寂しかったんですから」

そう言って目に涙を溜めながら、アテネはそう言った

連夜「悪かったよアテネ

ほら、よしよし」

そう言って連夜はアテネの頭を撫でた

アテネ「むう……まあ良いです

さ、早く家に帰りましょう

あなたが背負ってるかばんの中に地図とかお金と入ってますから」

連夜「おお、このかばんそんなもんが入ってたのか・・・道理で重
いと思っただぜ」

アテネ「早く帰りましょう」

連夜「へいへい」

駄々をこねるアテネをなだめながら、連夜はこの世界での帰路につ
くのだった・・・

第三話（前書き）

連夜、ついに変身です

第三話

あの後、俺は地図を広げながらゆっくりと帰路に着いていた

連夜「なあ、こん中金も入ってるって言ったが、まさか開けたらガツツリ札束が入ってるとかじゃないよな？」

アテネ「違います。

ちゃんとキャッシュカードと通帳だけです」

アテネはそう言って膨れっ面になった

可愛いなあおい（笑）

和やかに帰路についていた……と言うのに……

『ブウウウン！』

騒がしいエンジンの音を響かせて、俺達の目の前を一台の車が通り過ぎた

アテネ「連夜さん……今のって……」

見てしまったからにはしょうがない

車には明らかに怪しい男組と小さな女の子二人が乗っていた

その二人が問題だった

連夜「なんでアリサとすずかが乗ってんだよ・・・
てかこの時の二人って其処まで仲良くなかったはずだよね？」

俺は気だるそうにアテネに聞いた

アテネ「ですねえゝ誘拐犯の気持ちは分からんですねえ」

だからキャラがぶれすぎだアテネ・・・

連夜「しゃあないな

アテネ、追跡できんだろ？神だし
追跡しといて、後追うわ」

アテネ「あれ？助けるんですか？」

アテネは少し驚いたようにそう言った

連夜「俺の力の性能も見ときたいしな
見ちまったら助けるのがこの世界の俺のやり方だ」

アテネ「分かりました

そこをまっすぐ言って二番目の曲がり角を右です」

そう言っアテネはナビゲートを始めてくれた

連夜「あいよ」

そう言っ俺もナビに従い、走り出した

アリサ side

もう！本当に信じらんない！

習い事から帰ってる途中に連れ去られるなんて

しかもよりによってこいつと一緒にるのがねえ

すずか「うう・・・」

涙目で私を見るこの子は月村・・・何だっけ？

まあともかく、私と同じお金持ちのお嬢様らしい

興味ないけどね

男「ガハハハ、お前らの親父さん達からがっばり金を貰ったら家に返してやるよ

それまで俺達と楽しいことしようぜえ」

そう言っただけで私達を連れ去った誘拐犯の男達は気味の悪い笑みを浮かべて私達に近寄ってきた

はつきり言って私だって怖い

横の月村さんは既に泣き出している

両手足を縛られて身動きできない

アリサ「はあ……普通の子に生まれたかった

普通の子なら……こんな事なくて済むのに……」

私は思わず弱音を吐いた

男「ハハハ、てめえらは普通じゃないのさ！
恨むんなら自分達を恨め！」

そう言って男達が私達に襲いかかろうとしたときだった

『バン！』

もの凄い音と共に、倉庫の入り口の扉が吹き飛んだ

？「いやいや、恨むことはない

普通だったらこんな貴重な経験は出来ないぞ？

身の代金目当ての誘拐なんてな

お前らが大きくなって自叙伝なんて書いたらしっかりと書けるぞ？

私は小さい頃に身の代金目当てで誘拐されましたってな」

そう言って現れたのは、私達と同年くらいの子だった

side out

俺が長々と話しながら倉庫に入ると、其処には男達が六名程

そしてこの倉庫の真ん中に、縄で縛られたアリサとすずかが居た

男「ああ！なんだガキが！

調子のもてんじゃねえぞ」

にしても一撃で鉄の扉蹴破れるって、明らかに七歳の肉体レベルじゃねえだろ・・・

アテネ「そりゃ＋αで肉体レベルはチートなんですから
あれくらいは当然ですよ」

連夜「成る程ねえ」

男「無視してんじゃねえ！」

そう言つて男の一人が俺達を怒鳴りつけた

連夜「あ、悪い悪い

喋つてんのが聞こえなくてさ

其処にいるアリサとすずかだっけ？

今助けてやるからな」

俺はニコリと笑つてヒラヒラと手を振つた

男「ふざけんじゃねえ！

ガキが！この場所突き止めるたあいつたいなにもんだ！？」

いやぁ待つてましたよその言葉

連夜「俺か？俺はなあ・・・」

そう言っただ俺は気付いた

あれ？メモリは？

アテネ「ズボンの後ろポケットの中です」

アテネがそう言っただ教えてくれた

カッコわる（笑）

連夜「よつと・・・」

そう言っただ俺は後ろポケットからUSBメモリーのような長方形の物を出した

違いがあるとすれば、先端が青い金属で塗装されているのと白い外装で真ん中に「E」と言う記号が刻印されていたくらいだった

アテネ「それってかなりの違いじゃないですか？」

連夜「自分で思ったよ・・・」

アテネにそう返した俺は、そのまままっすぐ男達を睨み付けた

連夜「話が逸れたな・・・俺は、正義の味方だ」

そう言っただ俺は、自分の手に持った力、ガイアメモリの起動スイッチ

チを押した

『E t e r n a l!』

起動音声が発せられると同時に、俺の腰にこのガイアメモリの力を解放するベルト「ロストドライバー」が巻かれた

連夜「行くぞ・・・」

そう言つて勢いよく、ロストドライバーのメモリスロットにガイアメモリを差し込む

『バシユイン!』

メモリを確認したドライバーが、待機音を発している

連夜「変身!」

そう言つてロストドライバーを右に展開した

『E t e r n a l!』

機械音声が流れると同時に、変身音も流れ、俺の体を白色の粒子が覆った

『バシユン!』

変身音が終わると共に、俺の体は変貌していた

身長は180cmまで伸び、真っ白な鎧に包まれた体、頭部から伸

びた三本の角、∞の記号を連想させる黄色い目、真っ赤な炎が刻まれた腕

俺の体は完全に、仮面ライダーエターナル レッドフレアに変身していた

連夜「はは・・・力がみなぎってくる」

俺は変身した自分の声を聞いて感激した

変身した時の俺は大人になった時の俺なのだ

今の声はあの大道克己の声になっている

つまり、俺の設定した通り俺体は大人になればまんま大道克己になるのだ

連夜「素晴らしい・・・礼を言うぞアテネ」

そう言っただけ俺は変身の瞬間俺の肩から飛び降りたアテネを見た

アテネ「喜んでもらってこっちも嬉しいです

早く助けてあげてくださいね」

連夜「了解した」

俺はそう言っただけ男達に向き直った

男達を含め、アリサやすずかも目を点にしていた

男「なっ！なんだお前は！」

誘拐犯の1人の男がそう言って俺に拳銃を向けた

連夜「俺か？俺の名は大道連夜・・・この姿の名は、エターナルだ！」

そう言って、二つの拳を握り締めた俺は、誘拐犯達に向かって襲い掛かった

男「く、来るな！」

『バン！バン！』

誘拐犯の一人が拳銃を発砲した

だが、俺には傷一つつかなかった

連夜「こんな物で俺を殺せると思っな！」

俺は目の前の男に拳を直撃させた

殴られた男は吹き飛ばされ、泡を吹いて倒れていた

連夜「殺しやしない・・・ただ、二度とこんな気が起きないように徹底的に叩き潰してやる」

そう言った俺は、次の瞬間には別の男を蹴り飛ばし、それが終わったらまた別の男と、ほぼ無双状態で誘拐犯を撃退していった

男「うつ動くな！」

ほぼ完全に鎮圧したところで、誘拐犯の生き残りが叫んだ

連夜「・・・・・・」

俺がその男のほうを見ると、アリサとすずかの二人に拳銃を向けていた

男「動くなよ・・・・動けばわかってるよな」

そう言つて男は二人に更に拳銃を突きつけた

連夜「直に警察も来るだろう。

そんなくだらないことをしないで、二人を解放しろ
そうすればお前だけは見逃してやる」

俺の提案には、男ではなくアリサ達が驚いていた

男「な！そ、それは本当なのか？」

男の顔に希望の光がともる

連夜「ああ・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・冗談だ」

男「へっ？」

次の瞬間、男の頭に俺の回し蹴りが炸裂し、体を何回も地上に擦り
付けながら男は吹っ飛んだ

連夜「拳銃持ってるなら一瞬でも気を抜いたら終わりだ・・・さて、大丈夫か？」

俺はそう言っただけでアリサとすずかを縛っている縄を引きちぎった

すずか「あ・・・ありがとうございます」

アリサ「礼は言っておくわ・・・ありがと・・・」

二人はそう言いながら立ち上がった

『ファンファンファンファン』

近くでサイレンが聞こえた

連夜「警察が来たか・・・なら、俺はここで失礼するよ」

そう言っただけで俺がその場を去ろうとすると

アリサ「ま、待ちなさいよあんた！名前・・・もっかい教えなさいよ！」

アリサがそう言って呼び止めた

俺は展開したロストドライバーを元に戻し、メモリを抜いた

すると、まるで風に舞う木の葉のように俺の体を覆っていた粒子は消え、体も元の体格に戻っていた

連夜「俺の名は大道連夜・・・またどこかで会おう・・・アテネ」

俺がそう言ってアテネを呼ぶとアテネは「はいはい」と言っ
て俺の肩に乗った

すずか「人形が・・・動いてる」

連夜「この世界にはお前たちの知らない世界がたくさんあるって
事さ。じゃあな」

俺はそのまま倉庫の裏口から、外に出た

第四話

連夜「こいつあまたでかいなあ」

俺は今、自分の部屋に来ている

アリサ達を助けて後、地図を見ながら何とかたどり着いたのは超高層マンションだった

金持ちしか入れないような場所のなんと15階（最上階）の1530番の部屋が俺の部屋となっていた

んで、今中に入って、あまりの広さに呆然としていたのだ

アテネ「凄い広いでしょ？」

やっぱり何でもデカイ方がインパクトあるもの」

そう言つて「エッヘン」と胸を張るアテネ

連夜「いやでかすぎだろ？」

隣の部屋まで浸食してんじゃね？とか思うくらい広いんだけど？」

俺が言うのも最もだと思う

玄関入って直ぐのリビングは人が10人強入ってもまだ余裕なくらいの広さだし、寝室もなかなか普通の広さだ

いくら金持ちマンションでもこの広さは以上だと思った

アテネ「だって、此処はディラックの海を使ってますから無限空間なんで指定すればもっと広くなりますよ」

そう言っアテネは俺の肩から飛び降りた

て言っかディラックの海!?

あの。号機飲み込んだ?

なんてもん部屋に適合させてんだよあの神は(泣)

あいつ多分俺よりチートだと思うのは内緒にしておこうと思った

アテネ「さて、此処でなら元に戻れますね」

その瞬間、アテネの体が光り輝いた

そして、光が消えると、其処には金色の髪を腰まで伸ばした絶世の美女が居た

連夜「・・・アテネか?」

アテネ「はい、そうですよ」

そう言っアテネの声は、人形モード(勝手に命名)の時のような子供のような声とは違い、大人の女性のような澄んだ声だった

連夜「変わりすぎだろ・・・」

俺は大人アテネ(これも勝手に命名)を上から下まで見た

服は白いドレスの用な物を着ていた

と言つかめちゃくちや可愛いじゃねえかあああああ！

アテネ「あ・・・あの〜」

そう言ったアテネが何かもじもじしていた

何故か顔まで赤い

アテネ「そんなに見ないでください・・・その／＼恥ずかしいので
／／／」

連夜「／＼わ、悪い・・・」

そう言っただけはアテネから視線を逸らした

なんだ今の感覚

キュンとなったこの感じ

まさか、これが萌えと言う奴なのか！？

アテネ「あの、大丈夫ですか？」

アテネがそう言っただけで心配そうに俺を見ている

連夜「ん？ああ大丈夫だ」

そう言つて俺は玄関で靴を脱ぎ、リビングに向かった

連夜「さてと……」

俺はズボンの後ろポケットに手を入れ、其処からエターナルメモリを出した

アテネ「また変身するんですか？」

アテネが不思議そうな顔で此方を見ていた

連夜「ああ……少し確かめたい事もあつてな」

そう言つて俺は、エターナルメモリの起動スイッチを押した

『カチッ』

『E t e r n a l』

エターナルメモリが起動すると、腰に再びロストドライバーが現れた

連夜「変身！」

そう言つてメモリをドライバーに差した俺は、ドライバーを展開し、再び仮面ライダーエターナルに変身した

だが

連夜「ふむ……やはりレッドフレアか」

大道克己ボイスになった俺はそう言いながら自分の体を見た

確かに完全体であるブルーフレアではない

だが、俺が考えた能力はブルーフレアでなければ使えない

連夜「アテネ、これはどういう事だ？」

俺がアテネの方を見ると、アテネは言い難そうにしながら口を開いた

アテネ「力の暴走を抑えるためです・・・」

連夜「力の暴走？」

俺は聞き慣れない言葉に思わず聞き返した

アテネ「はい・・・まったく力を持っていなかった人が、突然強大な力を持つと、その力を制御しきれずに、最悪力に吞まれてしまう場合があるんです

あなたの能力はその・・・その暴走が起これるとこの世界その物が破壊されてしまうので、こう言った処置を取らせてもらいました」

アテネは気まずい空気を醸し出しながらそう言った

それにしても力の暴走か・・・なるほど

確かに転生してその力を善にしか使っていないのなんて二次元の人達だけだもんな

実際の人間は確かにそんな利口な人達ばかりじゃねえな

連夜「理解した・・・それで、具体的に処置とはどのような物を施したのだ？」

因みに、まさかこれの完全体には絶対なれないなんて言うんじゃないだろうな？」

アテネ「それは大丈夫です

条件を満たせばなれます・・・

処置とは、そのエターナルメモリ事態に意志を持たせたんです
自分の意志を」

連夜「意志？つまり、メモリが人を選ぶと言うことか？」

アテネ「はい・・・エターナルメモリがあなたを真の主人として認めれば、真の姿に変身出来るようになっていきます」

連夜「つまり、俺はまだこいつに認められていないって事か・・・」

メモリを抜き、変身を解除しながら俺はそう言った

アテネ「はい・・・そうなります」

アテネはしょぼんとした表情になっていた

連夜「そう落ち込むなよ

お前さんは神様だからな、そう言った対処もしなければいけない
当然の理由だ」

俺は笑顔でそう言った

連夜「俺がこいつに認めてもらえば良いだけだ
これからよろしく頼むぞ？エターナル」

俺は自身の相棒になる存在を見つめながらそう言った

連夜「アテネ、お前もこれからよろしく頼むぞ？」

俺がアテネにそう言つと、アテネは顔を真っ赤にしながら言った

アテネ「ふ／＼不束者ですが／＼よ／＼よろしくお願いします」

頭を下げたアテネを見て、俺は思わず笑った

連夜「ハハハ、何も嫁に来たわけじゃないんだから……まあよろしく」

アテネ「あう……お嫁だなんて／＼よろしくです」

ますます顔を赤らめたアテネに、俺は首を傾げるしかなかった

連夜「で？今思ったけどなんで寝室が一部屋しかないの？」

俺は寝巻きに着替えて寝室に入ったとき、そのことに気づいた

アテネ「いけませんでしたか？」

そう言つて後ろから現れたのは、花柄の可愛いプリントがされた寝巻を着たアテネだった

連夜「いや、お前なんで俺に寝室来てんの？なんでパジャマなの？今気づいたけど何でダブルベットなの？なんで寝る気！？」

俺は立て続けに突っ込みを浴びせた

アテネ「いえその・・・一緒に寝たいなあ・・・と／＼」

赤らめたそう言つたアテネ

めちやくちや可愛いじゃねえかちくしょおおおお！！

その後？いや勝てるわけないでしょ？

ガッツリ一緒に寝ましたよ

ガッツリ抱き枕にされましたよ

だつてしゃあないじゃないですか！

俺だつて男っすよ？

身長親子並みに離れてるからもうアテネの胸が……

連夜「耐えろ……俺……」

俺はそう言つて自分と戦いながら眠りについた

第四話（後書き）

はいどうも

黒のカリスマです

こちらでアテネについても説明しておきます

アテネ「よ／＼よろしくお願いします」

名前 アテネ

身長 20cm（人形モード）
180cm（大人モード）

体格 出るところはしっかり出て、引っ込む所はしっかり引っ込んで
いる
とりあえず胸はかなりある

アテネ「／／」

年齢 神なので年齢はない

体重 自由自在に設定できるため不明

魔力量 EX

連夜を誤って死なせてしまい

転生システムを使ってリリカルなのはの世界に転生させた

ところが、周りの神達から転生させた連夜の動向調査をしろと命じられた為、連夜と行動を共にすることに

何故か連夜に恋い焦がれている

転生前から連夜を知っているようである

常時は人形モードで連夜の肩に乗っている

自室でのみ大人モードに戻り、連夜の世話を焼いている（誘惑している）

ドジ&天然と言う見る人が見ればハイスペックなスキルを持っている

第五話

あれから、俺はなのはと一緒に遊ぶことが多かった

父親である土郎さんがまだ退院出来ない為、あれからも翠屋は大忙しだそうで、なのはの面倒はまだちゃんと見れていなかった

だがそれでも、あの時俺が恭也さんに唸ったのがきっかけで、手が開けば恭也さんはなのはを気にかけるようになったらしい

この前なのはに連れられて家まで行ったら

「君のおかげで色々考える事が出来た
ありがとう」

と言って頭を下げられた

さすがにこれには面食らった

「いえ、ただの子供が出過ぎた真似をしたと思ってます
頭をあげて下さい」

俺は慌てて恭也さんにそう言っていた

「ねえ連夜君？連夜君は何処に住んでるの？」

ある日なのはと遊んでいると、そんな事を言われた

「そう遠くはないよ

と言って近いわけでもないけどな」

俺がそう言つと、なのはは頬を膨らませた

「むうゝ連夜君の話し方難しいの
分かり易くいつてなの」

「こつ言つ喋り方なんだよ
簡単に治せない

お前もその語尾に時々なのとか付けるだろ？
それを治せって言われて治せるか？」

なのはは困つた顔で「うゝ」と言っていた

まあ中身も七歳と中身が十九歳じゃそりゃ勝てないって

「が、頑張つてなおすの……あ！」

「治つてねえじゃん」

俺がニヤリと笑つと、なのはまた頬を膨らまして「うゝ」と言っていた

「平和ですね」

俺の肩に乗り認識阻害魔法を使って周りから見えないようにしている
アテネがそう言った

「そうだな……」

小さく言ったつもりなのだが、どうやらなのはに聞こえたらしい

「どうしたの？」と聞いてきた

「独り言だよ……気にするな」

そう言っただけなのはの頭を撫でた

「ふわわわ……」

などと言っただけなのは戸惑いながらも頭を撫でられていた

だが、徐々にその表情に影が差してきた

「どうした？高町」

「お父さん……いつになったら退院出来るのかな……」

ぼそりとなのはは呟いた

「高町……」

「お父さん……怪我酷いらしいの

まだ退院は難しいって……」

私許せないの……お父さんを事故にあわせた人が……」

そう言やなのはには士郎さんは事故にあって大怪我したって話して
たんだな、桃子さん達

実際は海外でボディーガードをしての負傷だったか？

何にしても、そりゃ不安になるわな

こんな年頃の子供には、友達よりも、家族の愛が必要なんだよきつと…………

「明日会いに行けば良いじゃないか
高町のお父さんに…………」

「ふえ？」

なのはは目をパチクリさせていた

「お見舞いだよお見舞い
お父さんだって、高町に会いたがってると思うぞ？
会いに行つてあげたら？」

俺の言葉に、なのはは少し考えていたが、やはり自分も会いたいと思っていたのか、「分かった」と言った

俺は少し安心した

しかし、その次の言葉がいただけなかった

「明日連夜君も一緒にお見舞い行くの」

「は？」

思わず目が点になった

「ダメ……………なの？」

涙目&上目遣いを決められた

連夜はライフが0になった

「わあっ たよ」

そう言うしかなかった

涙は女の武器とはよく言った物だと、この時改めて痛感した

しかし、これがまさかあんな事態を招くとは、俺も、なのはも、誰も思っていなかった

『て言うか私空気ですね』

なのはと分かれて家に帰ると、何故かアテネがふてくされていた

夜抱き枕にされながら一緒に寝たら、機嫌が治っていた

「ここなの」

次の日、俺はなのはと一緒に土郎さんのお見舞いに来ていた

『コンコン』

「はい……」

扉の奥から土郎さんの声が聞こえたのを確認して、なのはは病室の扉を開けた

「お父さ〜ん

なのはなの〜お見舞いに来たの」

そうやってなのはは病室に入っていた

俺はその後をついて行った

「なのは……久しぶりだね
元気にしてたかい」

そうやってなのはに笑いかけた土郎さんはそのままなのはの頭を撫でた

「ふにゃ〜」

なのは頭を撫でられて気持ちよさそうだった

小さなツインテールがピョコピョコと揺れていた

「生きてるんですか？あの髪」

アテネがそう言っ て俺に囁く

「多分…」

俺は苦笑いしながらそう答えた

その時、士郎さんと目があつた

「なのは……………其処にいる子は誰だい？」

「あ、この人は……………」

なのはが俺のことを説明しようとしたが、俺がなのはの横に行つて自分から話した

「俺は大道連夜つて言います

……………なのはさんの友達ですよ
高町士郎さん」

そう言つて俺は目の前にいる士郎さんに笑いかけた

「そうか……………君が……………桃子から聞いているよ

君のおかげでなのはが元気になった
本当にありがとう」

士郎さんはそう言っ て包帯が巻かれた体で上半身だけ立ち上がり、頭を下げた

「いやいやいや！」

頭を上げてください士郎さん

そんな頭を下げてもらうような人間じゃないんですよ俺は」

俺は慌てて士郎さんに頭を上げさせて、そのままベッドに寝かせた

「いやしかし……君のおかげなのは事実だ

これで、私もゆっくり傷の治療が出来るよ」

「は？」

俺は一瞬自分の耳を疑った

なのはもう少し驚いているようだ

「ん？どうしたんだい？二人とも」

士郎さんは何食わぬ顔だ

この人は、恐らくぱつと口に出ただけなんだろうな

だが、その一言が俺には許せなかった

「高町……少し、部屋の外に出てくれるか？

士郎さんとお話がある」

「おはなし？」

なのは少し首を傾げたが、俺が「お願いだ」と言うと、「分かつ

たの」と言っ出てくれた

「どうしたんだい？連夜君」

士郎さんはそう言っ俺に聞いてきた

「士郎さん……今言っ言葉は本当ですか？」

「何がだい？」

士郎さんは再びゆっくり上半身を起こし、俺に聞いてきた

「たかが七歳の子供が失礼な言い方をするかもしれませんが先に謝っておきます

士郎さん……貴男は本当にあの子の事を大事に思ってるんですか？」

「どういう意味だい？」

士郎さんはまだ言葉は優しく言った

だが、体からはとても怪我人とは思えないほどの威圧感を放っていた

「士郎さん……確かに貴男が負った怪我は貴男が意図して付けた傷ではないでしょう

ボディーガード中のテロによって負った傷……だが貴男はその傷で生死の境をさまよっただ

貴男は自分の家族に、家族の一人が死ぬかもしれないと言う恐怖を味合わせたんだ……無論あの子にも！」

「君は……どうしてその事を！」

士郎さんは自身の本当の役職を俺が知っていたことに驚いていたようだった

「士郎さん、家族が死ぬつてのは、まるで自分の身を引き裂かれたような痛みがあるんだよ

貴方はあの子にもそんな思いを味あわせようとしたんだ！

士郎さん、あなた何か勘違いしてる……あの子に今必要なのは俺みたいな友達じゃない

家族だよ……家族が揃って、家族の愛を感じる

今のあの子には一番それが幸せな時間なんだよ！

それを奪ったのは誰でもない……士郎さん貴方だ！！」

「！！」

「貴方が大怪我をしたことで、翠屋の経営に桃子さんや恭也さん、美由希さんは大忙しだ

あの子も構ってほしいのを我慢している

俺が会ったとき、あの子が何処にいたか知っていますか？

一人公園のブランコで寂しそうに遊んでいたんですよ！？

士郎さん、あの子を、なのはを大切に思っているなら、死ぬ気で怪我を治してください！！

あの子のことを思うなら、それが一番……！！」

俺が最後まで言い切る前に、俺の耳に乾いた音が響いた

直後に頬に痛みを感じたことから、誰かに叩かれたんだと分かった

そして目の前には、俺を叩いたと思われる、瞳に涙を貯めてこちらを睨み付けているのが居た

士郎 said

私は、甘えていたのかもしれない

家族に、すべてに……甘えていたのかもしれない

「士郎さん、あの子を、なのはを大切に思っているなら、死ぬ気で怪我を治してください!!」

目の前の少年、連夜君にそれを言われて、初めてそれに気がついた私は甘えていたのだと

だが次の瞬間、突如私の前になのはが現れ、連夜君の頬を思いつき叩いたのだ

「なっ!」

「お父さんに酷いこと言わないで!

そんな事言う連夜君なんて、もう友達じゃない!!

部屋から出て行って!連夜君なんか……だいつ嫌い!!」

なのははそう言って、一番口にはいけないことを口に出してしまった

連夜君は驚いたような表情をしていたが、すぐに冷静な顔つきになった

「……わあったよ」

連夜君は沈んだ声でそう言った

「土郎さん……こんな子供が、分かったような口をきいてすいませんでした

でも、自分の言ったことは間違っていないと思います……それじゃ」

そう言っただけ彼は一度私に頭を下げると、そのまま一度も振り向かず、病室を出て行った

なのははずっと彼の後ろ姿を見ていた

s a i d o u t

第六話（前書き）

いつの間にかPVが4000を超え、ユニークも1000を超えていました

皆様ありがとうございます

これからも頑張ります

第六話

「嫌われちゃいましたね……………」

肩に乗るアテネがそう呟いた

「そうだな……………」

まだ少し叩かれた頬が痛む中、俺はそう返した

「良いんですか？」

「なにが？」

俺は小さく聞き返した

「彼女に嫌われて良かったんですか？
仲良くしたかったんじゃないんですか？」

アテネは俺にそう言ってきた

「変わらねえよ……………」

「え？」

俺の答えに、アテネは意味が分からないようだった

「アテネ………… お前俺をこの世界に転生させたのは、この世界で悲しい出来事が多かった。」

それを変えてやりたいから……だったよな？」

「……そうですよ？」

アテネはそう答えた

「だからよ、俺はお前のその願いを叶えるよ
高町に嫌われようがなかるうが関係ない……俺はこれから起こるす
べての事からあいつらを守り、この世界の決まった未来を破壊する
そう……世界の破壊者だよ……」

「それは、見る人から見れば偽善とも言えませんか？」

アテネは俺の前に浮遊しながら移動し、そう言った

「偽善……だろうな

更には自分勝手と来た……だがよ……俺はもう取りこぼしたくね
えんだよ

前の世界で生きてたときは、俺は取りこぼしちまった

だが、今は力がある……大事なもん守るだけの力がある

だから俺は迷い無く力を使う……このエターナルの力をな……例え不
完全だったとしても……」

俺はそう言ってズボンの後ろポケットから出したエターナルメモリ
を空に掲げた

「なら私もそれに同行します

あなたを見守るのが私の役目ですからね」

アテネはそう言って俺に笑いかけた

「おう……宜しくな」

その笑顔を俺は無性に可愛いと感じてしまった

「はい……とりあえず、今日の晩御飯のおかずでも買いに行きましようか」

「おう」

そう言っ、俺達はそのまま家の近くのスーパーまで食材を買いに行った

「ふん！せい！」

俺は今、アテネが用意してくれた家にあるトレーニングルームで汗を流していた

と言っても、ディラックの海で作られたこの空間は、無限の広さだった

「ふゝさて、今度は……こいつか」

俺は汗を拭いながら、エターナルメモリを手にとった

『E t e r n a l』

メモリが起動し、俺の腰にはロストドライバーが巻かれた

『ガシユン!』

メモリを指し、一気にメモリスロットを右に倒し、ドライバーを展開した

「変身!」

『E t e r n a l!』

俺の声と共に、機械音声流れ、白い粒子が体を包む

一秒と待たぬ内に、俺の体は仮面ライダーエターナルレッドフレアとなった

「あれから何度も変身しているが、相変わらず俺はこの姿のままか
……」

そう言っ俺はドライバーに刺さったメモリに手を置いた

「なあエターナル……いつになったらお前は俺を認めてくれんだ?」

大道克己とエターナルはお互い会った時に運命的な繋がりを感じた

お互いがお互いを認め合った

「なら俺はどうすりゃ良いんだよ……」

言ってて思わず苦笑いした

「連夜さん……ご飯出来てますよ」

そう言って部屋の扉を開け、大人アテネが顔を出した

「……あいよ」

そう言って俺は右に倒したメモリスロットを立たせ、メモリを抜いて変身を解除した

「今日なのはさん、アリサさんと喧嘩したみたいですよ？
最終的にすずかさんが止めたみたいですけど……
お友達フラグは立ちましたね」

食事をしている最中、アテネがそう言って報告してくれた

あれから数ヶ月

俺はなのはは愚か外部との接触を一切断ち、今自分が持っている力の確認と、力を向上させるためのトレーニングをずっと行っていた
外の情報は認識阻害を使ったアテネが時々出歩いて仕入れてくれる

なのはの情報も俺の耳に届いていた

あれからまたなのは暗い性格に戻ってしまったらしい

何回か俺が謝ってでも会いに行こうかと考えたのだが、今日の件を聞いて安心した

「アリサとすずかが……良かった」

俺は心の底から安堵した声を出した

これでなのはに関しては大丈夫だろう

もともと原作でもあの二人のおかげでなのはは元気な性格になった

俺は言わばイレギュラー

これで問題はないだろう

「士郎さんも貴男の一件から死に物狂いで怪我を治し、リハビリをして退院したようです」

「そうか……まあ良かったよ

これで原作開始まで事は穏便に進みそうだ」

俺はそう言って夕食を口に運んだ

「原作が開始したら、やはり彼女の前には姿を現すんですか？」

「一様エターナルの姿で出るさ……」

アースラが来たら、正体を明かそうかと思ってる」

「そうですか……………」

アテネは俺の答えにそう言つと、夕食を食べ終わり、食器を炊事場に運び始めた

「連夜さん……原作開始まで時間すっ飛ばしましょうか？」

「ぶっ！！」

はぁ！？んなことが出来んのかよ？」

アテネが不意に言つたことに思わず俺は飲み物を吹いてしまった

「出来ますよ？」

あのトレーニングルームは私の指示で時間の速度を調節出来ますので今からですと約1年半ですから、トレーニングルームで1日半入ればそのように時間が経つように調整します」

アテネは笑顔でそう言つたのだが、普通に考えればそんな事出来るわけがない

やはりこの女は俺よりチートだと改めて再確認にした

「じゃあそうしよう

お前も中に入るのか？」

「もちろんです

私だけ外で1年近く待ってないといけないなんて嫌ですから久しぶりに私も体を動かしたいですし」

俺が運んだ食器を受け取りながら、アテネはそう言った

「じゃ、今から1日半か」

俺は目の前に居るアテネを見ながらそう言った

既にトレーニングルームには入っており、体はエターナルレッドフレアに変身していた

「はい……そう言えばこうやって模擬戦とは言え連夜さんと戦うなんて初めてですね」

アテネが笑顔でそう言った

「そう言えばそうだな
まあ、1日半お互いしっかりやろっぜ」

そう言っただけはアテネに対して構えた

「分かりました
宜しく願いますね」

そう言っただけアテネの手に何処からか現れた剣が握られた

だが、その剣は普通の剣ではなかった

「おいアテネ……その剣はなんだ？」

「あ、これですか？確か聖王ファルシオスの剣ですよ？人間サイズに作った模造刀ですけど……」

「ああそうかってええ！！
聖王ファルシオスの剣！？」

あの白騎士物語で太陽王を斬ったとされる伝説の剣じゃねえかあああ！

「なんでお前がそんな物を！？」

だが、俺の問いにアテネは笑って答えた

「だって私これでも神ですから……
ああ安心してください
模造刀なんて威力は四分の一しか出ませんから」

そう言っアテネはニコリと笑ったが、いやニコリじゃねえよ！

どの場合の四分の一？

どっちにしても死ぬわ！！

「待アテネ…落ち着け……」

「行きますよ？聖剣解放！ファルシオスの……」

そう言っアテネが黄金のオーラを纏ったファルシオスの剣を振りかぶる

つて聖剣解放！？

死んじゃう死んじゃう！

「待て！待て！」

「剣ー！！」

俺の静止を聞かず、アテネはファルシオスの剣を振り下ろした

黄金の斬激が俺に向かって迫ってくる

「ギャアアアアア！」

そして俺は、一切の抵抗も虚しく体ごと黄金の光に包まれた

「まったく！殺す気が！！」

「ごめんなさい」

あれから俺はファルシオスの一撃で意識を失い、気がついたら既に1日半が過ぎており、アテネが心配そうに俺を見ていた

俺が意識を取り戻した事に喜んだアテネはそのまま俺に抱きついてきたが、全身ボロボロとなっていた俺にはそれが激痛で、アテネに怒りの鉄槌を食らわせた

それから傷を治してもらい、慌ててトレーニングルームから出て来たのだ

「にしても本当にこっちゃでは1年半経ったんだろうな？」

「それは大丈夫です
ちゃんと経ってますよ」

アテネが涙目でそう言った

殴られた頭が痛いのか、まだ頭を押さえていた

「本当かよ……これで経ってなかったら………」

そう言っただけの言葉は途切れた

俺の前には窓が合った

そして、その窓からはつきり見えたのだ

未だ暗い海鳴の空に、数多くの流星が降り注いでいた

「アテネ………」

「間違いありません……あれはジュエルシードです」

アテネの言葉が終わると共に、一つの流星が近くに落ちた

どうやら公園に落ちたようだった

「出掛けるぞアテネ」

「はい」

アテネは大人モードから手のひらサイズの人形モードになり、俺の肩に乗った

今やっと、リリカルなのはの世界は始まった

第六話（後書き）

というわけで、ようやく無印編が始まります

時間のすっ飛ばし方はまあ書けることもなかったのでもうしました

o r z

ではこれからも連夜の活躍にご期待ください

第七話

「ここら辺か……魔力を感じる…間違いはなさそうだな」

公園に着いた俺達は、本来なら感じるはずのない膨大な魔力反応に確信を持ちながら、周辺を調査していた

「間違いなくジュエルシードの一個はここに落ちています……！」

アテネがそう言った直後、公園の奥の茂みで光が溢れた

「がはっ！」

茂みから突如金髪の少年が吹っ飛んできた

手には杖のようなものが握られていた

「おい！しっかりしろ！おい！」

俺は慌ててその少年を抱き起こす

「うつうつ……」

その少年の顔を見たとき、初めてこの少年が誰かと言うのが分かった

ユーノ・スクライアその人だったのだ

「うつ……あなたは……」

ユーノが震えた声でそう言った

「つか本当に女みたいな顔だなあ

「説明は後だ……怪我してるじゃねえか
何があつたんだ？」

知ってるが敢えて聞いておこう

「う…此処に居たら危険です…早く…逃げて」

ユーノがそう言った瞬間、茂みの奥から狛犬のような怪物が現れた

『危険です！危険です！』

ユーノが持っていた杖の先端にある宝石が光り、言葉を発した

「早く……逃げてください……此処は僕が…ぐっ！」

ユーノは見て取れるほどに限界寸前だった

魔力もこの世界に来たときに大半を失ったのだろう

ユーノの魔力は殆ど残っていなかった

「グルルル」

狛犬の化け物は齒をギラつかせながらこちらを威嚇している

大方近くにも居た犬にジュエルシードが反応して発動したんだろう

「んなボロボロの体でなに言ってるんだよ！
此処は任せろ……」

そう言っただけ俺はユーノを座らせた

「なら、このレイジングハートを……」

そう言っただけユーノがレイジングハートを渡そうとしてきたが、俺はそれを拒否した

「アテネ……お前も戦うってのはできないのか？」

「すみません……貴方と戦ったりすることは可能なんですが、神が物語りの本質に関わってはいけないんです」

アテネはそう言っただけ申し訳なさそうにそう言った

「かまわんさ……周囲に結界を張って置いてくれ。
後、離れてるよ？」

「分かりました」

アテネはそう言っただけ俺から飛び降りると、この公園いったいに結界を張った

「結界が張られた？君はいつたい……」

後ろにいるユーノが驚いた声を出している

「悪いな…ちょっと普通じゃないんだよ……俺は特にな」

そう言って俺は、取り出したエターナルメモリを起動させた

『E t e r n a l』

「変身！」

『E t e r n a l！』

腰に巻かれたロストドライバーにメモリを挿し込み、俺は仮面ライダーエターナルレッドフレアに変身した

「さあ！地獄を……」

言いかけて俺は言葉を止めた

この言葉はブルーフレアになったエターナルだからこそその台詞だ
なら……

「さあ！地獄に叩き落してやる！」

そう言っつて俺は化け物を指差した

「ガアアアアア！」

化け物が雄たけびを上げて俺に突進してきた

「むん！」

俺はその突進を受け止めた

「ふん！でえいや！」

そのまま化け物の顔をいったん上に向け、よろめいた顔に蹴りをかましてやった

「ギヤアア！グルルル！」

化け物は一旦倒れたが、すぐに起き上がってこちらを威嚇した

「もとは犬なんだ……あまり痛い思いはさせたくないからな……即効で決めるぞ！」

俺はそう言っただけでエターナルメモリのメモリスロットから抜き、ベルトの右側につけられたもうひとつのメモリスロット、マキシマムスロットにメモリを挿し込んだ

『E t e r n a l！』

機械音声が鳴ると共にそのマキシマムスロットのボタンを押す

『E t e r n a l！M a x i m u m D r i v e！！』

すると、エターナルメモリのマキシマムドライブが発動し、俺の両手に真つ赤な炎が灯った

「食らえ！永久の終焉を告げる炎！！（エターナル・エンド・フレア）」

そう叫びながら、俺は燃え盛る左拳を化け物に叩きつけた

「ギヤアアアアアアア！」

もろに食らった化け物は、茂みの奥に吹き飛んでいった

殴りつけた俺の手には、青く輝く宝石が握られていた

「これが、ジュエルシード……美しいな」

そう言いながら俺はそのジュエルシードの握る力を強くした

その瞬間、ジュエルシードから光が消え、ただの宝石のような状態になった

「デバイスもなしでジュエルシードを封印するなんて……本当に君はいつたい何者なんだ？」

少し回復したのか、ユーノが立ち上がりながらそう言った

「言つたる？普通じゃないんだよ俺は……」

そう言ってマキシマムスロットからメモリを抜いた

すると、俺の変身は解除された

「普通じゃなさ過ぎるよ……君は……」

そう言ってユーノもレイジングハートを待機モードに戻した

杖だったレイジングハートは、宝石の珠のような形態になった

「あれ？ジュエルシードは？」

ユーノがそう言って初めて握っていたはずのジュエルシードが無い事に気づいた

「あれ？どこいつ…？」

そのとき、俺は身に覚えがないブレスレットを左腕にしているのに気がついた

そこには三つの金属の枠組みがあり、そのうちの一個にはすでに青い宝石がはめ込まれていた

「まさか、それって……」

ユーノも気がついたのかそれを指差そうとすると

「はい、ジュエルシードですよ」

俺の肩に乗ったアテネがそう答えた

「それは……生きているのかい？」

ユーノが驚いた様子でそう言った

「生きてますよ！こちらで本当の姿になると世界に悪影響があるから小さくなってるんです！」

アテネが頬を膨らませて怒ったようにそう言った

「ああ、ごめんなさい！」

ユーノはアテネの気迫に押されて、謝った

「むう…分かれれば良いんです」

そう言ったアテネは満足げな表情を浮かべていた

「とりあえず家に帰ろう、お前も来い

その怪我一人じゃ難しいだろ？俺のことも説明するから……」

「分かりました…」

ユーノも取り合えず俺の家に来ることになった

そして、ちゃんと結界を解除して家に帰った俺達は、ユーノに事情説明をしてもらった

「僕の名はユーノ・スクライア……遺跡発掘を生業とするスクライア一族の一人です

僕が発見したロストログア、ジュエルシードを移送中にミスでこの世界に散らばってしまったんです

だから、僕は責任を感じて一人でそれを回収しよう……」

そう言ってユーノの表情はどんどん沈んでいった

アテネは大人モードになってユーノの傷を回復魔法によって回復さ

せていた

「んで一人あの化け物に戦いを挑んで失敗し、拳句の果てにそんなボロボロの状態になっちまったってわけか……」

「はい……」

ユーノはそう言って下を向いてしまった

「しかし立派なことだと思いますよ？自分でその責任を取ろうとするなんて、なかなかできることじゃありませんよ？」

「だが同時に人それを無謀って言うんだよ……お前俺が気づかなかつたら死んでたぞ？今頃……」

アテネのフォローに表情を明るくしたユーノだが、俺の言葉にまた表情を暗くした

「まあしかし、なんでジュエルシールドはこんな風になったんだ？」

そう言っただけは左腕のアクセサリにはめ込まれている小さくなったジュエルシールドを見た

「僕もそれは気になってたんだ…君は何者なんだい？デバイスもないのにジュエルシールドは封印するし、見たことないバリアジャケットを身にまとうし……」

「ああ、あれはバリアジャケットじゃないぞ？このメモリの力を使って特殊な鎧が俺の体に装着されてるんだ」

ユーノの問いにそう答えた俺は、エターナルメモリを出し、ユーノに見せた

「へえ、見たことない物だね……」

そう言っただけユーノは物珍しそうにメモリを見ていた

「そうだ、俺の名前を言うのを忘れてな…俺の名は大道連夜だ」

「私はアテネと言います」

俺達はそう言っただけで忘れていた自分たちの自己紹介をした

「ジュエルシードの件は私が答えますね

取り合えずあのままにロストログアをしておくのは危険だと思いましたが、私のレアスキル、改造を使ってジュエルシードをアクセサリー状にしたんです

今後は連夜さんがジュエルシードを封印すれば、あと2つまで自動的にそのブレスレットの中に封印できます」

ユーノの治療を終えたアテネは、そう言っただけ俺の横に座った

「改造って、ロストログアを改造したんですか!？」

アテネがとんでもないことを言っただけだからユーノが興奮してそう言っただけ

「といっただけ改造したのは形だけですよ？」

実際のジュエルシードの能力自体はそのままですよ」

アテネがそう言うつと、ユーノは「それでも凄いですよ!」と言っていた

アテネもほめられてまんざらでもないような表情をしていた

「で? ユーノお前これからどうすんだ?」

俺がそろそろ本題を切り出そうとユーノにそう聞いた

「できれば君達にも協力してもらいたい……君の言ったとおり、僕だけではこの件は手に負えない状態になってしまった
だから、お願いできるかい?」

俺は即答しなかった

ここで俺が協力すると言えば、なのはが魔道士にならない

そこで俺はこんな案を出した

「俺はお前とは別の方法でジュエルシードを探す……できればお前の
ほうも手伝うが、無理な場合がある……
そこで、もう一人協力者を作るんだ」

だが、この案はユーノが反対した

「これ以上無関係な人間を巻き込むわけにはいかないよ! それに、
こんな事を引き受けてくれる人なんていないよ!」

「いるさ……丁度適役ば人物がな……」

俺はそう言ってなのはのことを話した

ユーノも渋っていたが、協力者はやはり必要だと言うことで折れてくれた

「早速明日から活動を始めろ。

今日はもう遅い…お前もゆっくり寝るといい…幸い部屋は余るほどあるからな」

「分かったよ…本当にありがとう…連夜」

そう言ってユーノはアテネにつれられて、部屋まで向かった

「俺が高町を魔法の世界に呼び込んだ張本人……か……すまん、高町」

誰も居なくなった部屋で、俺は一人そうつぶやいた

第八話

あれからまる１日経った

俺はあるビルの屋上で、これから起こる事を見守っていた

「やはり心配ですか？」

肩に乗るアテネがそう言っただけ俺に聞いてくる

「心配じゃないなんて嘘は吐けないさ

俺が巻き込んだんだ

この世界ではな……俺にはそれを見守る責任がある」

そう言った時、近くの場所で桃色の光が空に向かって伸びた

「始まったか」

その光の中心には、真の主を得たレイジングハートと、その真の主となった人物

まるで天使をイメージしたようなバリアジャケットを纏った女の子

高町なのはが居た

「生で見ると、改めて美しいと思いますね

あの年齢で凄い魔力量です」

魔法少女として自身の眠っていた力を解放したなのはを見て、アテ

ネはそんな感想を言った

「ああ……確かに美しい
ユーノもうまくやったようだな」

「ええ…後は彼女がジュエルシードを封印するのを見届けて、今日は終わりですね」

俺がアテネとそんな会話をしていると、なのはの前にガス状の体をした化け物が現れた

「さて、未来のエースオブエースの実力を拝見しようか……」

俺が手を組んでそう言った

なのは side

私の前に居るお化けのようもの

『なのは、そいつはジュエルシードによって作られた化け物だ
魔法で倒してジュエルシードを封印して!』

私にレイジングハートを渡してくれたフェロットのユーノ君からそんな指示が入りました

「分かったのユーノ君……
行くよ?レイジングハート」

『了解ですマスター!』

そう言って私がレイジングハートを握り締めた瞬間、怪物は私に襲いかかってきました

「きゃ！」

『p r o t e c t i o n』

攻撃が当たりそうになった瞬間、私の前に壁が現れて、私を護ってくれました

『大丈夫ですか？マスター』

レイジングハートがそう言って私を心配してくれました

「うん、ありがとうレイジングハート」

『おやすいご用です』

レイジングハートの言葉に、私は小さく笑いました

「ガアアアアア！」

そんな事していると、怪物はまた私に襲いかかってきました

「くっ！」

今度はギリギリでそれを回避した私

でも怪物からの攻撃は収まりません

『なのは！攻撃するんだ！
でないと奴を倒せないよ』

「そんな事言っても、どうやって攻撃すれば……きゃ！」

ユーノ君との会話中に来た攻撃に巻き込まれ、私の体は後ろに飛ばされてしまいました

『大丈夫ですか？マスター』

「にやはは…大丈夫だよレイジングハート
まだいける！」

レイジングハートにそう言って、私は怪物を見る

攻撃……なんかこうギュウンとやってズバーンみたいな攻撃を……

「ギャアアアアア！」

「くっ！」

怪物は考える隙を与えてくれません

『マスター……難しく考えず、マスターの思うようにやっては如何
ですか？』

私が助力します』

レイジングハートがそう言ってくれた

「うん！分かったの」

私はそう頷くと、怪物から一旦距離をとった

「ギヤアアアアアアアアア！」

怪物は私に向かって雄たけびを上げ、こちらに向かってくる

私はレイジングハートを怪物に向けて、その先端に力を集めるようなイメージをした

すると、いろいろな方向から光がレイジングハートの先端に集まってきた

「くっ！凄い力……なの」

正直言ってもう先端に力を集めるのが辛くなってきた

その先端には桃色の小さな球体ができ始めていた

「ギヤアアアアアアアアア！」

怪物が迫ってくる

「全力全開！行つけええええええええええ！」

私は叫びながら先端に集まった力を怪物に向かって放つイメージをした

すると、レイジングハートの先端に魔方陣が現れ、桃色の球体は、そのまま桃色の光線になって怪物に飛んで行った

「ガアアアアアアア！」

光線が直撃した怪物は悲鳴を上げた

「お願い……倒れて！」

私は願いも込めてレイジングハートを握った

正直光線の威力が強くて立っているのがやっとだからだ

「ガアアアアアアア！……ギャアア！」

怪物は倒れた……そう思ったのに……怪物は光線を打ち消してしま
った

「あ、ああ……」

私はその事に驚くしかありませんでした

それと同時に、全身の力が一気に抜けるような感覚に襲われました

『マスター！しっかりしてくださいマスター！』

地面にへたり込んでしまった私にレイジングハートは必死に呼びか
けてくれますが、私は立ち上がる力が出ません

『なのは！』

ユーノ君が私に向かって走ってきます

「ギヤアアアアアア！」

怪物が腕を振りかぶって私に向かって攻撃しようとしています

私はそのときに死ぬんだと思いました

「ごめんなさい……お父さん、お母さん、お姉ちゃん、お兄ちゃん……」

『……………!!』

レイジングハートやユーノ君が必死に何か言っていますがもう何も聞こえませんでした

私にはまだやらなきゃいけないことがあったのに……

私は救ってもらったのに……私は傷つけた

私の最初の友達

「ごめんね……連夜君」

そう言って私は目を閉じた

でも、一向に私は痛みを感じませんでした

「大丈夫か？白き魔道士よ……」

「ふえ？」

突然知らない男の人の声が聞こえてきたので、私は驚いて目を開けました

するとそこには、怪物の腕を片手で受け止めている、真っ白のバリアジャケットを纏った人がいました

side out

ビルでなのはの戦いを見ていた俺は、怪物に翻弄されているなのはに少しばかりの不安を覚えていた

そして、次の瞬間驚愕した

「おい！この魔力量……」

「ええ、不完全ですが、スターライトブレイカークラスの砲撃ですね」

俺の問いにアテネが答えた

「まだやつは魔法という存在を知ったばかりだぞ！？
そんなやつがなんであんな技を……」

ある意味それはなのはの天性の才能だったと言えるばそれまでだった
だが、少し様子が違ったのだ

「拙いですね……やはり魔力の収縮が上手くいっていません」

「ああ… あんなもん撃つたら、今のあいつじゃ魔力全部持っていけるぞ！」

だが俺達のそんな心配を他所に、なのはは不完全なスターライトブレイカーを撃つたのだ

確かにスターライトブレイカーは直撃した

だが、化け物はそれを己の力で打ち消したのだ

「なっ！いくら不完全とは言えスターライトブレイカーを打ち消したと！？」

直後、なのはは地面にへたり込んでしまった

化け物はゆっくり腕を振り上げ、それをなのはに振り下ろそうとしていた

「ちっ！あんの馬鹿野郎が！」

俺はそう言っでビルから飛び降りた

「連夜さん！？」

肩に乗っていたアテネは浮遊しながら俺の横に来た

「アテネ、俺を転移させろ！あいつの目の前にだ！」

そう言いながら、俺は取り出したエターナルメモリを起動させた

『E t e r n a l』

瞬時に腰に現れたロストドライバーにメモリを突き刺し、展開した

「変身！」

「転移します！」

『E t e r n a l』

アテネがそう言って転移を始めた瞬間に、俺の体は変身を開始していた

「ギヤアアアアアアア！」

転移が終わった瞬間、俺の真横に化け物の手が迫ってきていた

『ズン！』

俺は片手でそれを受け止めると、ゆっくり目の前で俯いていた少女に言った

「大丈夫か？白き魔道士よ」

「ふえ？」

そう言ってなのはは顔を上げた

『連夜！』

ユーノが秘匿回線で俺に念話をしてきた

『ユーノ、しばらくなのはに俺のことは黙っておいてくれ…頼むな』
そう言つて俺は一方的に念話を切つた

「あの、あなたは……」

「通り過ぎの正義の味方だ

アテネ、この子傷と魔力を回復させてやってくれ
あとデバイスも少し損傷しているそれもできれば直してやってくれ」

「了解です」

アテネがそう言つて浮遊しながらなのはの前に現れた

「ふええ！人形が喋つてる！」

「人形じゃありません！そのフェレット君のように、ちゃんと生きてますよ」

そんな会話をしている二人を置いて、俺は止めていた化け物の手を弾き飛ばした

「ガアアアアアア！」

化け物は新たに現れた俺という敵に対して威嚇を行つた

「悪いがそんなのは子犬の威嚇レベルだな……
本当の威嚇つてのは、こうするんだ」

そう言つて、俺は今までずっと抑えていた自分の魔力のすべてを解放した

「ガッ！」

化け物だけでなく、なのはやユーノも驚いた様子だった

「白い魔導師よ………よく見ておくと良い
収束系魔法とは、こうするものだ」

そう言つと俺は左手をゆっくりと上に掲げた

その瞬間、膨大な量の魔力が俺の掲げた手のひらに集まつてきた

「白い魔導師よ、君も大気から魔力を収束出来るレアスキルを持っている

君なら必ずものに出来るさ」

「は………はい」

なのははポカンとしながらそう言つた

圧倒的な力の差に唖然としているのだろうか？

「ギャ………ギャアアアアア！」

化け物はたじろぎながらも必死に威嚇する

もはや意味のないものと知りながら

「そろそろ良いか

消し飛ばせ……破壊と創世よ！」

そう言っただ俺は直径50cmくらいの球体になっていた魔力の塊を、
10cm程に圧縮し、握り締めた

「アポカリユプス………」

技の名前を言いながら、俺は空高く飛び上がり、化け物の眼下に収めた

「ブレイカー!!」

そう叫んだ俺は左手に圧縮した魔力の塊を化け物に向けて叩きつけた
直後、真っ白な魔力の奔流となったそれは、一瞬で化け物を呑み込んだ

「ギユアアアアアア！」

断末魔のような雄叫びを残して、化け物は消滅した

化け物が居た場所に残っていたのは、光を失ったジュエルシードと、
何か巨大な物によって抉られたような跡だった

「ふむ、いささかやりすぎたか………」

エターナルの力も乗せていたから余計か」

そう言っただ俺はジュエルシードを拾った

「ほらよ」

そのまま拾ったジュエルシードをなのはに向かって投げた

「わっ！ニヤニヤニヤ！」

そう言っただけなのははワタワタしながらジュエルシードをキャッチした

「治療の方は終わったのか？アテネ」

「はい、デバイスも修復出来ました
大丈夫ですよ」

そう言っただけアテネが俺の肩に乗った

「あの……あなたは……」

「そんな事よりそれを封印するんだろ？
早くしたまえ」

そう言っただけ俺はなのはの言葉を遮った

「あ、そっか…えっとユーノ君
確か自分の頭に浮かんだフリーズを言うんだよね？」

『そうだよ』

なのはとユーノがそう言っただけ会話していた

俺はアテネに念話で「転移してくれ」と伝えた

「リリカル・マジカル！

ジュエルシード、封印！」

背中越しに聞こえるなのは声を聞きながら、俺達は自分の家に転移した

こうして、無事魔法少女高町なのはは誕生したのであった

第九話

なのはが魔法少女として覚醒したあの夜から一夜明けた朝

テレビを点けると、どこのチャンネルも昨日の晩突然出来た謎の破壊跡を報道していた

爆弾テロ、外国からの威嚇、宇宙人の襲来等様々な憶測話で盛り上がっていた

「みんなその話で持ちきりですね」

アテネが朝食を食べながらそう言った

「だな」

俺はテレビを見ながらそう答えた

「まさか、あれをやったのがこんな子供なんて夢にも思わないでしょうね」

「……………だな」

アテネに痛いところをつかれた俺は、そう答えるしかなかった

「どうしたんですか連夜さん？」

いつもの貴男ならこんな事くらい笑って流す筈でしょう？」

アテネが不思議そうに言った

「まあな……昨日の一件で、お前の言ってた事を自分でも体験したからちよつとな……」

「私の言っていたこと？」

アテネはそう言って首を傾げた

「強い力を突然持ってしまった奴は、その力に溺れちまうってやつだよ

昨日の俺は、力に溺れた訳じゃないが……力の加減をミスっちゃまった下手すりゃ大災害だ」

「戦うのが恐くなりましたか？」

俺の言っただけに、アテネはそう問いかけた

「いや、恐くはねえよ

ただ、改めて自分の力つてのは考えて使わないといけないうち思っただけだよ」

「そうですか……なら大丈夫ですよ

貴男なら、一度やった失敗はしませんよ」

アテネは笑顔でそう言った

「ハハハ、お前俺の何を知ってんだよ」

そう言っただけ俺は笑いながら朝食を口に運んだ

「知ってますよ……ずっと見てたんですから……」

アテネが小さくそう言った言葉は、俺には聞こえなかった

「そう言えば、そろそろですね」

朝食の食器を洗いながら、アテネがそう言った

「そろそろってなにがだよ？」

俺はソファーに座りながらそう聞いた

「フェイトが海鳴に来るのですよ
下手したらもう来てるかも知れませんか？」

その言葉で俺は初めてその事を思い出した

「そついやそうか……すっかり忘れてたぜ」

そう言ったアテネと話している時だった

『ピンポン』

部屋全体にインターホンの音が鳴り響いた

「あれ？お客様ですかね？」

アテネが首を傾げてそう言った

「分からん……なんかを頼んだ覚えもないが、まあ出てくるよ」

そう言つて俺は玄関に向かい「はーい」と言いながら扉を開けた
すると其処にいたのは

「あの……今日隣に越してきました
フェイト・テストロッサです」

「あたしはアルフだ、よろしくな」

なんと、たった今さっき噂をしていた金髪の魔導師、フェイトが目の前に立っていたのだ

「あの……これつまらない物ですけど……」

そう言つてフェイトは包みに入つた何かを渡した
引越して来たからお隣さんへの挨拶つてわけね

「ありがとう」

それにしてもフェイトつて変わった名前だね？
外国の人？そつちのアルフつて人も」

「え？ああまあ、そんな所かな？
君お父さんかお母さん居ないかな？
出来れば挨拶がしたいんだけど……」

おずおずと答えながらも、フェイトはそう言つて俺の後ろを覗き込む

「ああ、悪いな、親は二人とも俺が小さいときに死んでしまった…
…此処に住んでるのは俺だけだ」

俺がそう言つと、フェイトやアルフの表情に影が差した

「ご、ごめんなさい！私なにも知らなくて……その……」

フェイトはそう言つて何回も頭を下げていた

困った俺はフェイトを落ち着かせようとフェイトの頭をなでた

「え？」

「気にするな、いろんな人にこれ言つてたから、慣れてるよ
そんな謝る必要ねえ……」

戸惑うフェイトに俺はそう言つた

「ごめんなさい……」

「だから謝んなつて」

俺は苦笑いしながらフェイトの頭を撫で続けていた

「うう……ごめんなさい」

「あのなあ」

俺は「ハハ」と苦笑いするしかできなかった

「いつまで頭撫でてんだい？」

「おっとこりゃ失礼」

アルフの指摘に俺は慌てて手を離れた

「あっ……」

フェイトは少し残念そうな顔をしていた

まさか……なあ？

「フェイトもフェイトだよ！すぐに相手に気を許しちゃだめだよ！」

「あう……ごめんアルフ……」

アルフの指摘にフェイトはたじたじになっていた

主人と使い魔と言う関係知らない者が見れば、まるで仲のよい姉妹に見えただろうな

「あんたもだよ！」

アルフがそう言って俺を指差した

「え？俺？」

一様念のために確認をしておく

「あんた以外に誰がいるってんだい！
あたしの目が黒いうちは、フェイトはそう簡単に嫁がせたりしないからね！」

「アッアルフ！」

アルフの言葉に、フェイトが顔を真っ赤にしながら抗議していた

「まあなんにせよお隣さんのよしみだ
困ったことがあったら何でも言ってくれ、相談でもなんでものるぜ？
これから宜しくな、テストロッサ、アルフ」

俺はそう言って二人に手を振った

「うっうん！あ、君名前は？」

フェイトに言われて初めて気がついた

俺名前言つの忘れる癖でもあるかねえ？

「悪い悪い、俺は大道連夜だ」

「連夜：変わった名前だね
よろしくね、連夜」

「フン！まあよろしくって言うといてあげるよ……連夜」

フェイトは笑顔で、アルフはそっぽを向きながらそう言った

そのまま二人は自分の部屋へ戻っていった

「まさかですねえ」

部屋に戻った俺に、アテネはそう言った

「まったくだよ…しかもお隣さんってどんなご都合主義だよ」

俺はそう軽くツツコミを入れておいた

「そうだ、この際ですしエンカウントを増やしておいたらどうですか？」

「どういう意味だ？」

アテネの言ったことが理解できなかった俺はそう聞き返した

「最後の闇の書の主、真なる夜天の書の主に会いに行つては？と言っているのです」

その言葉を聞いて、俺は初めてその意味が分かった

「はやてに会いにいけつてか！？」

「はい、この頃ならまだヴォルケンリッターは居ませんし、図書館にいるでしょう」

原作ならずかさんがお友達になってましたが、この際あなたも友達になっておいたほうが後々のことを考えると良いのでは？」

アテネの言葉にも確かに一理ある

後々はやてが闇の書の主となり、ヴォルケンリッターが出現することと確定事項だろう

彼女たちの行動に助力する意味でも、はやてを守るためにも、何かしらの関係になっておいて損はない

「よし、会いに行くか

アテネ、一緒に来い、高町に会いそうになった場合認識障害をかけて逃げるから」

「良いですよ。

ちようど洗い物も終わりましたし」

そう言った瞬間、アテネは人形モードになり、俺の肩に乗った

「じゃあ、行くか」

そう言って俺は家を出て、図書館まで向かった

「此処か…さてはてそう都合よく会えるかなって」

そう言いながら俺は図書館の中へと入って行った

幸いにもマンションから此処までの道中でなのはに会うことはなかった

「ん！もうちょい！ん〜！」

「そう都合よく会えたよ」

『ですね……』

念話でアテネも同意していた

今俺の前には、車椅子を支えに必死に本とろうとしている八神はやてがいたのだ

「おいおい、無茶だよ

取ってやるからどの本か言ってくれ」

そう言つて俺ははやてに近づいた

「大丈夫、もうチョイで取れるさかいに、大丈夫やから……わわ！」

だが、はやての支えにしていた車椅子がバランスを崩し、危うくはやてごと転倒しそうになった

「おっと！」

俺はとっさにはやてを抱き上げ、車椅子を足で支えた

とっさだったとは言え、なんでお姫様抱っこしたんだろう俺……

「うわぁ……私男の人にお姫様抱っこされとる……」

はやてはそう言いながらどんどん顔が赤くなってきた

「ほら、全然大丈夫じゃねえじゃねえか」

そう言って俺ははやてを立て直した車椅子に座らせた

「人の善意はありがたく受け取っとけ…で？どの本なんだ？」

「堪忍な…ほなお言葉に甘えるわ

アレとアレとアレやねんけど……」

はやては本当に申し訳なさそうにしながら指示を出した

「お安い御用だ」

そう言って俺は指定された本をパパッと取っていった

「ほれ、ついでに受け付けまで一緒に行くよ」

「そんなん悪いわ、本まで取ってもらたのに」

はやては遠慮からかそう言っただ断ろうとした

「お前な、俺と同年くらいだろ？」

そんな年齢のやつが遠慮なんてしてんじゃねえよ」

そう言っただ俺は車椅子を押して行った

「ほんま、堪忍な」

はやては車椅子を押す俺に申し訳なさそうに手を合わせた

「気にすんなよ

俺も暇なんぞな」

そう言つて俺達は受付で本を借りた

そして結局、はやての家まで送つていくことになったのだ

「何から何まで堪忍な

あ、そう言えば名前聞いてなかったわ
名前教えてえな

うちは八神はやてや」

またしても言われるまで気がつかなかった俺：

「俺は連夜、大道連夜だ
よろしくな八神」

「はやてでええよ
よろしくな、連夜君」

はやてはそう言つて俺に笑いかけた

「俺は女の人は嫁になる人意外名前で呼ばないって決めてんの
だから八神だ」

「そ、そうなんか……えらい変わった考えやな」

そう言いながら何故か顔を赤らめるはやて

ちょっと待て、今までの何処にフラグを立てる場所があった？

『連夜さんは女泣かせですねえ』

『うるせえやい!』

肩に乗るアテネが念話でそう言ってきたので俺はやけくそ気味に言い返した

「あ、ここや

ほんまありがとうな連夜君」

そう言っではやてに言われて初めてはやての家の外観を見た

ほんとにデカイ家だった

「おう、じゃあ俺帰るわ
また会おうぜ八神」

そう言っで俺が帰路に着こうとしたときだった

「……………何してる?」

俺はそう言っで後ろを振り返った

其処には、弱々しく俺の袖を引っ張るはやてが居たのだ

「あかん…こんなワガママあかんって分かってんのに……
ほんまは分かってんのに……」

行っでほしゅうない……連夜君に帰っでほしゅうないんよ」

はやて今にも泣きそうな声でそう言った

『良いんじゃないですか？今日くらい家に帰らなくても私は大丈夫ですよ』

アテネが念話でそう言った

『そうか……まあ、こいつはヴォルケンズが来るまでずっと1人だったもんな
まあ良いか』

「つたく、わあったよ

今日は八神ん家に世話になるよ」

俺がそう言つと、はやては顔を上げて途端に表情を明るくした

「ほんまに！？嘘やないん？」

「こんな状況でウソ言つてどうする」

俺がそう言つと、はやては満面の笑顔で「やった〜！」と言つていた

第十話

はやてside

「ほなまあ、何もない所やけどゆっくりしてってえな」

「はいよ」

そう言っつて連夜君は居間にゆっくりと座った

て言っつか何してんの私！

「ど、どないしょ

今日初めて会った人を家にいれてもうた

しかも男の人を……

いやでも、連夜君は優しい人やし、悪い人ではない言っつか……

寂しかったんは事実やけどなんか遠くに言っつてしまいそうやった言
うか…… ああもう何言っつてんのうち！」

自分でも訳が分からなかった

こんな気持ち初めてやし、なんやお姫様抱っこされたし……

結構カッコエエなあと思たし……

「どうした八神？大丈夫か？」

そう言っつてうちの顔を連夜君がのぞき込んできた

「い、いや、何でもあらへんよ!？
何も連夜君の事なんて考えてないで!」

て何言うてんにやうちいいいい!

「いや、そこまでは聞いてないが……なんか顔も赤いぞ？
熱でもあるのか？」

そう言つて連夜君がうちの額に自分の額を引っ付けてきた
冷たくて気持ちええわぁ……いやそうやのうて!!

顔!顔近い!!

「れ、連夜君……あの……」

「まあ熱自体はないみたいだな
顔の赤みは増してるが……
大丈夫か八神？」

そう言つて連夜君はうちを見てる

うちは一向に顔に行つた血が戻つて来おへんかった

胸もなんや苦しい

連夜君を真つ直ぐ見れへん

「んゝちよつち我慢しろよ?八神」

「へ？」

うちがは気付いた頃には、体が宙に浮いてて、またお姫様抱っこされとった

「れ、連夜君！？」

また顔が近い！！うちの息とか掛かってんのちゃうやろか？

「八神、お前寝室は？」

連夜君が突然そんなことを聞いてきた

「へ？寝室はあつたやけど？」

うちはおずおずと自分の寝室を指さす

連夜君は「そうか」って言うて私をお姫様抱っこしたまま寝室まで向かっていく

って、なんでうち寝室に連れて行かれてんの！？

はっ！まさか大人の関係にはベットの上で組んず解れつするって本で読んだことがある

まさか連夜君はうちとそれをする気なんか！？

あかんで連夜君！うちらまだ子供やで

そんなんするにはまだ早い

そりゃうちかて嫌やあらへんけど…まだ心の準備が……

「あ、あうあう…」

うちはこんだけ心だけは喋りまくってんのに、実際の口は全然動いてくれへんかった

「よつと…」

気付けばうちらは寢室に着いって、連夜君はうちをベットに寝かせてくれた

てことは今から始まるんか!?

あかんあかん!あかんて連夜君!

でも、うちが内心期待しとったような事は起きひんかった

「へ?」

連夜君は黙ってうちに布団を被せて、うちの横で腰を降ろしてるだけやった

「疲れが出てんのかも知れねえ
ずっと1人だったもんな…」

今は俺が側に居てやるから、ゆっくり寝てろ」

連夜君はうちの頭を撫でながら優しく笑ってくれた

「えっあ、その……うん
ありがとな…連夜君」

うちは少しだけ、少しだけがっかりしながらも、そんな連夜君を見て安心しながら、ゆっくりと眠ってもうた

side out

「おやすみ……八神」

俺の横ですやすやと眠るはやての寝顔は、思わず写真を撮りたくなるほどに可愛いものだった

『連夜さん、ユーノさんから念話が入っていますよ?』

アテネがそう報告した

なぜアテネが報告しているのかというと、この家をアテネの強力な結界で覆っているため、外部からの魔力伝達が一切入ってこないのだけれど、しかし内側からは魔力を感じたりも出来るので、感覚としてはマジックミラーのようなものだった

『繋いでくれ』

『はい』

はやてを起こさないようにお互い念話を使って会話した

直ぐにユーノの念話は繋がった

『連夜かい？今近くでジュエルシードの反応があったんだ
出来たら手伝って欲しいんだけど…』

ユーノの念話と同時に遠くの方角から魔力を感じた

左手のブレスレットに埋め込まれているジュエルシードも青々と輝
いていた

『反応していますね』

この魔力は間違いなくジュエルシードでしょう…』

『ああ、ユーノ、直ぐに向かう』

それまで高町を頼んだぞ？』

『分かった！』

俺はユーノからの念話を切ると、一度はやてを見た

『アテネ、しばらくはやてを頼む』

『……分かりました』

そのかわり、早めに帰ってきてくださいね』

『ああ、ついでに晩の食材を買ってくるよ』

『はい』

アテネは俺の肩から降り、俺の顔を見て頷いた

「悪いな八神、直ぐ戻る」

はやての頭を起きない程度に優しく撫で、俺はアテネの転移魔法で
ユーノの下へと向かった

ユノside

これは拙いな……

「やあああ！」

「たああああ！」

なのはと金髪の魔導師の少女が空中で戦いを繰り広げていた

僕は変わりにフェレットの姿だけどジュエルシードによって巨大化
した猫の化け物を止めようとしてるんだけど……

「おおりやあああ！」

「くっ！」

金髪の魔導師の少女と一緒に現れたもう1人の魔導師の女の人がそ
れを邪魔した

「邪魔をしないでください！」

「やだね！ジュエルシードはあたいらが頂くんだよ」

僕が左に避けると、次の瞬間先程までの場所には彼女の鉄拳が振り下ろされていた

「ジュエルシールドは渡さない！」

「じゃあ敵だね！」

再び彼女の拳が飛んでくる

今度は避けられない！

「わわっ！」

なのはも金髪の魔導師の攻撃が迫ってきている

拙い！

「もらったよ！」

僕が目をつぶった時だった

次に僕が感じたのは殴られた痛みの感覚ではなく、何かに体を引っ張られるような感覚だった

「？」

次に僕が目を開けた時、僕は誰かに抱えられていて、横にはなのはが抱えられていた

「ギリギリだったな」

僕は声の主から僕達を救ったのが誰だか分かった

白い体に真っ赤な炎のエンブレムの入った腕

腰に巻かれたベルト

連夜が僕達を助けてくれたのだ

s i d e o u t

『助かったよ、連夜』

ユーノが念話で礼を言ったので俺は気にするなと言っておいた

「あ、あの、また助けていただいて…ありがとうございます」

なのはも俺に抱えられながら礼を言ってきた

「気にするな…白き魔導師よ
こちらも気分的に助けただけだ」

俺はそれだけ言つと、なのは達を下ろし、フェイト達に向き直った

「な、なんだいあんたは！？
まさか管理局の魔導師かい！？」

「！！！」

アルフが驚いた様子でそう言った事で、フェイトもこちらの様子を

慎重に見ていた

「悪いが答える義理はない
管理局の魔導師ではないと言っておこうか？」

俺は戦闘準備を整え、一気に自分の中の魔力を解き放った

「！！！」

「なっ！なんてデタラメな魔力だい！！」

そりゃEXクラスですから……

「さあ、俺はさっさと帰りたいんでな…

雷の魔導師とその使い魔よ

悪いがジューエルシードは頂くぞ？」

拳を握り締めて構えをとる俺に、フェイト達も警戒しながら構える

「さあ……地獄に叩き落としてやる！」

2人を指差した俺は、そのまま突っ込んでいった

アテネ side

やれやれ、私に彼女を任せて行くなんて、最近私の扱いが酷くなってるような気がします！

それでも私神なんですよ!?

「まったく…」

ふと目の前で可愛く寝息をたてて眠っているはやてさんを見た

「あなたは良いですね

あの人にあんな風に優しくされて…

でも、まだ色々とは私は貴女に勝ってますから」

彼女は眠っているのでこの声が聞こえることはないだろう

でも言っておきたかった

やきもちと言う奴なのだろうこれが……

「ん……んん」

すると、はやてさんが目を覚ましそうになっていた

『拙い!拙い!ええと……』

そして慌てている間に……

「あれ?連夜君?」

彼女が目を覚ましてしまった

『あちゃ〜』

私は頭を横に振った

幸いまだ私には気付いていないようだが、連夜さんが居ないのは気付いたようですね

「まさか……今まで全部夢やったんか？」

彼女は今にも泣きそうですと言った表情だった

『はあゝ連夜さん……これは貸しですよ』

「夢なんかじゃありませんよ？
むしろ、今の状況が夢ですよ」

「え？」

聞き覚えのない声を聞き、驚きながら彼女は私の方を見た

「初めましてはやてさん
私は貴女の夢が作り出した夢の住人です」

私はぺこりとお辞儀をした

彼女は驚いた表情をしていた

『まあ当然ですね』

自分で自虐的に笑っていた

「人形が…喋つとる……ほんまに夢なんか？」

彼女は私に顔を近づけながらそう言った

「はい、私はアテネと言います」

私の言葉を聞きながら、彼女は自分の頬をつねった

『ヤバッ!』

私はとつさに彼女の痛覚を麻痺させた

「ほんまや……痛い
ほんまに夢なんか……」

彼女はそう言つてどこか安堵したような表情を浮かべた

「ほな……連夜君に会つたんは夢やないんやね」

「はい……今でも貴女を見つめていますよ？
ですからほら、早く夢から醒めるように……
目をつぶってください」

私は適当に考えた内容を繋ぎ合わせながらそう言った

「せやなあ……ありがとなアテネちゃん
また夢で会つたら今度はゆっくり遊ぼな」

彼女はそう言つて再びベッドに横になった

「その日が来るのを楽しみにしていますね」

はやてさん……」

私は優しく彼女の頭を撫でた

「うん……うちも楽しみに……してる……わ……」

彼女はゆっくりと眠りについて行った

『早く帰ってきてあげてくださいよ
連夜さん……』

彼女の頭を撫でながら、私は天井を見上げていた

s i d e o u t

「ハアハアハアハア……」

「っ！なんて奴だい……一発も当てられないなんて！」

肩で息をしているアルフとフェイト

至って余裕の俺

まあこの結果は大方目に見えていた事だがな

同時に相手をしていた猫の化け物もだいぶ弱っていた

「そろそろ止めといくか……」

俺はエターナルメモリを前のメモリスロットから抜き、横のマキシマムスロットにメモリを挿し、マキシマムドライブを発動させた

『E t e r n a l M a x i m u m D r i v e ! ! 』

機械音声が鳴り響き、俺の両腕が燃え上がる

「！！」

2人は驚きながらも防御魔法を張ろうとした

しかし、俺はその間を通り抜け、直接猫の化け物に拳を振り下ろした

「もとは普通の猫なんだ
ちょっと痛いけど我慢しろよ！」

「ニヤアアアアア！」

化け物が悲鳴を上げながら、みるみるその体を縮めていく

「しまった！」

「あいらを素通りした！？」

2人は慌てて俺の邪魔をしようと向かってくる

アルフは拳を振り上げ、フェイトはバルディッシュで切りかかろうとした

しかし

「ジュエルシード……封印!」

次の瞬間、俺の周囲から強烈な光が放たれた

「きゃ!」

「うわっ!」

俺の近くまで寄っていたフェイトとアルフはもろにその光で目をやられてしまった

「眩しい!」

『凄い光だ!』

離れて戦いを見ていたユーノとなのはもその光を見ていた

そして、光が治まると、俺の手にはもとの体に戻った猫が居た

「にゃうん……」

「心配するな……お前はなにも悪くない」

重力に引かれて地上に降りた俺は、ゆっくりと猫を解放した

「ジュエルシード!？」

「何処にやっただい!？」

フェイトとアルフがこちらに迫ってくる

「此処だ……こうなったら解放は俺にしか出来ない
悪いが今回のやつは諦めるんだな」

俺はフェイト達に左手のブレスレットを見せた

其処には、青い宝石が2つはめ込まれていた

「くっ！こいつ！」

襲いかかろうとしたアルフを、フェイトが制した

「アルフ…今は退こう
ジュエルシールドが無いなら、此処にいてもしょうがない」

フェイトは俺を見ながら、アルフの肩を掴んだ

「待つて！」

すると、フェイトの後ろからなのはが飛んできた

「もう私の前に現れないで
次は、手加減出来ないから」

そう言つてフェイトとアルフは転移魔法を使ってその場から離脱した

「なら、俺も行くか……
さらばだ…ユーノ

さらばだ…白き魔導士…」

『アテネ…』

『了解です』

念話でアテネに連絡をとると、俺の体を光が包み、転移が始まった

「待つて！まだあなたの名前を聞いてない

私は高町なのはだよ！」

転移を始めているというのに話しかけるとは、相変わらずだなあいつは…

「俺はエターナル

今はそれしか言えない

さらばだ……」

そう言い残し、俺は転移した

転移が終わった先は、再びひやての部屋の前だった

『遅いですよ！』

頬を膨らませ、アテネが怒ってた

『すまんすまん』

アテネの前で手を合わせた俺は、そのままはやての寝ているベツトに腰を下ろした

「ん……連夜……君？」

はやてが重い瞼をこすりなが目を覚ました

「おう……気持ちよさそうに寝てたな

おはやよう……八神」

優しく頭を撫でて、俺ははやてに挨拶した

第十話（後書き）

中途半端な所で終わってしまいました

戦闘フェイト達の扱いが雑だったような……

次回頑張ります

第十一話（前書き）

更新遅れてすみません

長々と続きます

第十一話

あれから数時間後、俺ははやてと一緒に晩飯を食べていた

「ごめんな連夜君、なんや夕食まで作ってもろて」

「気にすんな、俺も家に帰れば一人だからよ。」

それに、やっぱ晩飯ってのは何人かで食ったほうがうまいからな」

夕食を口に運びながら俺とはやてはそんな会話をしていた

え？俺が家事出来たのかって？

いちよう人並みには出来るんだよ？

ちゃんとアテネと交代で料理とかしてんだぞ？

『まあ連夜さんが料理できるってかなりのギャップですから』

『ほつとけ』

アテネに突っ込みを入れながら、俺は食事を口に運ぶ

「連夜君……変なこと聞いたらごめんな

連夜君、ご両親は？」

突然、はやてが箸を止め、真剣な面持ちでそう言った

「ん？どした？突然……」

俺もまた不意にそんなことを聞かれた為に、ちゃんと答えが返せなかった

「いやな…さつき連夜君家に帰ったら一人って言つたやん？
やから、ご両親はお仕事かなんかで帰ってきやはるんが遅いんかな
つて」

なるほどな…俺の発言が発端か

「いや、両親はいないんだよ
俺が5歳の頃に事故で死んじゃった」

「…！ごめんやで連夜君！うち何も知らんと聞いてもつて、ほんまに…ほんまにごめん！」

はやては俺の言葉を聞くなり顔を真っ青にして謝ってきた

「気にすんな…両親居ないのはお前も一緒だろ？
似たもの同士なんだよ俺達は…だから気にすんな
俺もこの説明いろんな人にしてるから慣れてるしよ」

ポンポンと頭を叩いてそう言つと、はやては瞳を潤ませて俺を見ていた

「ほんまに？怒ってへん？うちのこと、嫌いになつたらん？」

「友達を嫌いになるかよ…もっと信頼してくれていいんだぞ？俺のこと…」

頭を撫でながら、はやてを優しく抱き寄せた俺はそのまま……

『はふ…美味しいです』

アテネに飯を食わせていた

いや、正確にはアテネが食事しているのをはやてから隠している

「れ、連夜君？」

はやてが驚いて顔を動かそうとするのを、俺はさらに強引に抱き寄せてそれを阻止した

『まだか？』

『もうちょいです…』

念話越しに会話をしながら、アテネのほうを向くと、確かにもう少しで俺の夕食を食い終わろうとしていた

「れ、連夜君…ちょ、そんな激しく…」

はやてを見ると、顔が真っ赤になっていた

『まだか！…！』

『ご馳走様です！』

アテネは念話と共に俺の肩に乗った

『了解!』

念話を切り、俺ははやてを解放した

「ふわわわ……連夜君が…連夜君がぎゅって…」

はやては目をくるくるさせながら顔を赤くしていた

「はやて?」

「連夜君にぎゅって…連夜君にぎゅって…」

はやては俺の言葉が聞こえていないのか、ずっと同じ言葉をつぶやいていた

「……………」

ふと時計に目をやる

既に時間は晩の八時を回っている

『帰るに帰れませんね……………』

『そうだな……………』

俺は深いため息を吐きながらどうすべきかを考えていた

すると

『トン……………』

「ん？」

肩に重たい感触が乗ったので、ふとその正体を見た

すると……

「連夜……君……」

正体は眠ってしまって俺の肩に頭を預けたはやてだった

『アテネ…毛布持ってきてくれ』

『はいはい』

アテネがふわふわと浮きながら、はやての寝室から毛布を持ってきた

『おまえも来い……三人で寝るぞ？』

『もとよりそのつもりです』

アテネがはやてとは逆側の肩に乗って俺の頬に頭を傾けた

『おやすみ……』

『おやすみなさあ……い』

アテネのその念話を最後に、俺の意識は消えていった

はやてside

朝日がうちの視界を優しく照らしてくれる

「んみゅ……もうちょい寝たいわぁ」

やけど、お日様は私に起き！言っただけ寝かせて……

「まだ眠たいんよぉ……もうちょいだけ寝かせて……」

うちはそのまま抱き枕を強く抱き締めた

ほんま心地ええでこの抱き枕

ごつつ安心できる……

ん？抱き枕？

うちの頭ん中が急速に冴えていくんが分かった

うちん家に抱き枕は無かったはずや

そもそもうち昨日ベッドで寝たっけ？

うちは恐る恐るやけど目を開けてみることにした

「……！」

んで、うちはめちゃくちゃ驚いた

うちが抱き枕や思て抱き締めとったんは、連夜君の腕やった

んで、うちの目の前に、連夜君の顔があつた

『ちょ！なんでこんな事になっとるん！？

なんでうちが連夜君に寄り添うみたいな感じで……』

そう言うてる間に、うちの記憶がどんどん鮮明になってきた

そうや、昨日連夜君にムチャクチャ抱き締められて、んでホワーン
ってなつたうちはそのまま眠たなつて……

まさにあいたた々な展開やと自分でも思った

でもこれはある意味チャンスかもしれん

連夜君はまだ寝てるし……邪魔も入らん

うちは連夜君を起こさんようにゆっくり連夜君の唇に自分の唇を近
付けようとした

でも、神様はそんなうちに甘なかった

「んっ！んん」

連夜君が目を覚ましたんや

side out

俺が目を開けた瞬間、はやてが「ウヒヤア!」と言っていた
いったい何をしようとしたんだが……

『ナニをしようとしたのかも知れませんよ?』

『起きてたのかよ』

俺はアテネの発言はスルーし、起きていた事に驚いていた

『この時間帯にはいつも起きてますよ
それより、あることを思い出しました』

『なんだ?』

横に居るはやては顔が真っ赤でじっとしている

視線ははやてに固定し、アテネと念話に集中した

『今日はなのはさんとフェイトさんの温泉フラグです』

『マジで?』

『はい』

俺は至って普通の表情を保っている

保っているが、内心は「orz」状態だった

『どうします?』

『何かしら考える
とりあえずはやてに相談してみるよ』

『相談？何のそ…』

俺は強制的に念話を切り、はやてに話しかけた

「八神……今日良かったら温泉行かねえか？」

「へ？」

今はやての頭の中にはいっぱい「？」が浮かんでいるだろう

「いやな、実は懸賞で温泉旅行のタダ券が二枚あるんだよ
しかも一泊二食付き

でも前言ったみたいに俺一人暮らしでさ…

1人で行ってもアレだから行かないでおこうと思ったんだけど…
いやまあ、お前が嫌なら無理には…」

「行くで！！」

はやては俺の言葉を最後まで聞かず、目を輝かせてそう言った

つか即答って…

「もちろん行くで！
連夜君と二人旅やもん……
いつ行くん？」

はやては何やらかなりウキウキしていた

「今日だよ

準備が出来たら直ぐにでも……」

「分かった！」

はやては「ウキウキ」と口で良いながら動こうとした

あれ？でもはやてって足麻痺してるんじゃない？

俺のそんな心配は杞憂に終わった

はやては器用に体を動かし、スイスイと押し入れの前に来ていた

「連夜君も準備して来いな
うちちゃんと待ってるし！」

はやては笑顔で俺に言った

「分かった

じゃ準備できたらまた来るわ」

「はいはい」

俺ははやてが最後に手を振ったのを確認して、はやての家を出た

「いちよう超強力な結界でも張っとくか」

俺ははやてに後々起こることを考えて、おれ以外には到底破れない

であろう強力な結界を展開しておいた

「少なからずシャルルの結界よりはマシだろう」

俺はそう言って自分の家に帰って行った

「勝手にあんな事言っただけでどうするつもりですか？」

家に帰って即行大人モードになったアテネは頬を膨らませそう言った

どうやらかなりの無理難題にご立腹らしい

「すまんとは思ってる

だがよ、どちらにしてもあの状況ではやての家を出るにはこの方法が一番よかったじゃないか」

「問題はそこじゃありません！

チケットも移動するための用意も、どうやって準備するつもりですか？」

アテネの反論に俺は黙るしかなかった

勢いで言ったものの、つまりはそういう事なのだ

バイクや車は子供の俺には論外だし、かといってバスでの移動は時間がかかりすぎる

「はあ、なら使いますか？ジュエルシード」

そうだよな、使っしかないよなジュエルシード……ん？

「ジュエルシードを使う？」

聞き返した俺は何の間違いもしていないはずだ

「はい。連夜さんの腕につけたそのブレスレットはジュエルシードを三つまで封印できるアイテムであると共に、連夜さんの体に流れる魔力を封印したジュエルシードに吸収させる能力もあるんです」

と胸を張っていうアテネだがいや待て待て

「ジュエルシードは封印してるんだろ？」

なんでそれが使えるようになるんだ？」

「原作でもプレシアさんはジュエルシードを使っていたでしょう？つまり、ジュエルシードは封印したといってもデバイスなどに収納されるだけで、使うことはできるんですよ

ただ、なのはさんの場合は使う理由がない。フェイトさんの場合は母であるプレシアさんに献上する物なので使う理由がないんですよ」

アテネはやれやれと首を振ってそう答えた

「ちなみにジュエルシードは願いを叶えるロストログニアですから、その願いを叶える為にはジュエルシードに魔力を吸わせなければいけません

プレシアさんは自身のSクラスもある魔力を吸わせましただから次元震が起こるほどの力が生まれたんですよ」

「つまり俺の場合は魔力量EXだから、その魔力を吸ったジュエルシールドは……」

アテネの判り易い解説のおかげで、俺は簡単に結論にいたることができた

そう、つまりそういう事なのだ

「お考えの通り、かなり物理法則を無視した願いでも叶えられますよ？」

ド○○○○ールのように死者蘇生とまではいきませんが……」

「心配するな……んな事はわかってる

エターナルが完全なものになればそれは解決できる」

アテネはそれを聞くと「そうですか」と言って部屋の奥に行った

「なあアテネ、ジュエルシールド一個につき叶えられる能力は一個なのか？」

「そうですよ」

部屋の奥からそんな声が聞こえてきた

「さて、ならどうやって願いを使うか……」

俺は自身の左腕に付けているブレスレット、それにまるで宝石のようにはめ込まれている二つのジュエルシールドを見た

叶える願いは二つ……一つはまず問題のチケットで……もう一つは移動

手段…

「アテネ…お前確か外では大人モードにはなれないんだよね？」

奥まで聞こえるようにと叫んだのだが、アテネは「はいはい」と言いながらこちらに戻ってきたのだ

リュックを持って

「行く気なんかい…まあいいや
で？どうなんだ？」

「まあ、この家のように魔力がかなり満ちてるような場所なら問題ないんですが…この世界は思ったより空気中の魔力量が少ないので…少しの間しか耐えられません」

アテネは申し訳なさそうに手を顔の前で合わせた

「いや、分かった
ならこれで叶える願いは決まったし」

「へ？」

アテネがキョトンとした表情をしているのを見ながら、俺はジュエルシードに願いを伝えた

「ジュエルシードよ…我が願いを叶えよ…」

その瞬間、二つのジュエルシードが青々と輝きだし、部屋全体に膨大な量の魔力が溢れた

「まずひとつ、高町なのは達が今日行くはずの温泉旅館の無料チケットを二枚出せ……で二つ目だが、二つ目はこの温泉旅館からこの家に帰ってくるまでの間、アテネに俺の魔力を供給させろ」

「なっ!？」

アテネは驚いた表情を見せるよりも早く、二つのジュエルシードは願いを叶えるべく部屋全体を包み込むほど強力な光を発した

「うまく行ったか？」

光が、収まり、部屋を見渡した俺はゆっくりとあたりを見渡した

すると、ヒラヒラと天井から二枚に紙が降ってきた

「これは、チケットか」

その二枚の紙にはしっかりと目的の旅館の無料宿泊券という名目が書いてあった

「発行元も書いてある……まあオールマイティパスと思えば良いか」

一人内容を見ながら呟いていたが、アテネの姿が見当たらない

「あれ？アテネ？」

「どこです……」

ふと頭の上からアテネの声が聞こえた

なにやら上に乗っている感覚もある

俺は頭を下ろした

すると、人形モードのアテネが落ちてきた

「何やってんだ？」

俺が呆れながらそう言つと、「あなたが私に魔力を供給するからです！」といわれた

「どゆこと？」

「つまり、今の私とあなたは使い魔と主の関係になつたんです！あの大人モードはここであるには力が強すぎるのでこの姿になったんです！」

心配しなくても外ではなれますよ…大人モードに」

なにはともあれ、アテネの方も無事にできたようだ

俺のブレスレットを見ると、ジュエルシードは輝きを失い、封印した当初のように只の石のようになってしまっていた

「よし、じゃあアテネ、お前が俺とはやてを連れて行く移動係だよろしく頼むぞ」

「そんなことだと思いまいたよ……分かりました
その代わり、帰ったら抱き枕になってくださいよ？」

アテネがなかなかの要求をしてきたが、目的の為にもやむなしと、俺がそれを了承した

こうして、俺ははやくと共に温泉旅館に行くことになるのだった

第十二話（前書き）

遅くなりました

温泉編です

物語がなかなか進みません（泣）

頑張ります

第十二話

「うはゝおっきいとこやなあ」

眼前に広がる旅館を見上げ、はやてが驚きの声を出した

俺はそんなはやての表情を見て、連れてきて良かったと思えた

「はやて様、こちらに……お荷物を御降ろし致しますので……」

はやてが「おおきに」と言っただのを確認しながら車椅子を押しては
やてを移動させた大人アテネ

きつちりとしたスーツ姿はどこか凜とした印象を与えた

アテネはそのまま車のトランクに積んでいた荷物を降ろしていく

はやてはまだ旅館の外観を見て楽しんでいる

「そんなに嬉しそうな顔をされると連れて来たかいがあるよ」

「ほんまありがとうな連夜君、感謝してるで」

はやては俺の方向を見ながら暖かい笑みを見せてくれた

「それとえつと、あの人の名前はなんて言っん？」

「ああ、あの人はアテ……」

そこで俺は言葉を止めた

いや、少し遅かった

アテまで出てしまったのだ

「あて？」

案の定はやては俺に聞き返してきた

ふと本人であるアテネもこちらを見ている

『アテネはやめて下さい！』

『わかってる！』

念話でそんな会話がされているとも知らず、はやては可愛い顔で俺を見ている

こうなったら自分のネーミングセンスを頼るしかないと思い、俺はとっさに出た名前を口に出していた

「あ、宛無^{アテナシ}さんだ」

思わずアテネがずっこけるのが見えた

はやても目を丸くしている

やはり宛無なんて名前は不自然すぎたか……

「へえゝ宛無さん言うんですか…変わった名前ですねえ」

今度は俺がずっこけた

はやては「どないしたん？」ときよんとした顔で言っていたが、いやはやはやての天然に助けられたと今は思っておこう

「そ、そうなんですよゝ、いろんなお客様から言われます。変わった名前ですねえゝって」

そう言つてアテネが一瞬こちらを睨んだ

「なんなんですか宛無って!?!」

「……すまん」

はやてはくすくすとアテネが言っていたことに笑っていたが、俺たちは「ハハハ」と渴いた笑いしかできなかった

あれからすぐに中に入った俺たちは、外観とまた違う内装の美しさに驚いた

なるほど、これならばあれほど外観を立派にしてもつりあうと言うものである

受付でチケットを渡す際に少しばかりヒヤッとしたが、そこはやはり魔力で作ри出した物、あっさりと二つの部屋を用意してくれた

ひとつは俺とはやての部屋、もうひとつは宛無の部屋と言う名目で取られた部屋なのだが、本人であるアテネが『認識阻害かけて一緒に寝ます!』と言ったので、実質この部屋はただの空室になりそうだがアテネには俺達の運搬係としての役と、もうひとつ役職を与えていたそれがはやての補助係である

はやてはどこに移動する際にも車椅子だ

トイレや少々の移動なら問題ないだろうが、温泉などに入るとなると話は違ってくる

せっかく温泉旅館に来たのだから温泉にはやても入りたいはずだから俺はアテネにそれを頼んだ

そうすることで、はやての注意を一時的に俺から外す事ができる今回の一件も本来はなのはとフェイトの邪魔をするためだ

少しでも自由に動けたほうが色々都合がいい

二人が既にここに来ているのはこの旅館内に漂う魔力の気配で探知できる

ユーノにも連絡を取ったので、来ていることは間違いなのだ

「でもほんま夢のようやで
うち絶対こんな綺麗な旅館で温泉入れるなんて思てんかったもん

ほんまありがとな連夜君、宛無さん」

部屋に行くまでの道中、はやては目を輝かせながらそう言っていた
やはり連れて来て良かったと思う反面、自分の目的の為に同行させた
ような気がして少し罪悪感にも駆られた

『まあ、八神が喜んでいいるなら良いか』

そう自分に言い聞かせることで、少しばかり自分の罪悪感が軽くなる
ような気がした

「そんなに喜んでくれちゃちよつと照れるな

俺も行く相手がいなかったんだ、礼を言うのはこっちだよ、八神」

そう言うてなるべくの笑顔で笑いかけたらはやての顔が赤くなった

あれ？またフラグ立てた？俺……

決して俺は無自覚ではない……だが、惚れられるようなことを何もして
ない為に、俺はちんぷんかんぷんだ

『人それを見無自覚って言うんですよ？』

『マジでか！？』

アテネに突っ込まれて思わずガチツツコミを入れてしまった

『まあ、しかし、一時は倒産寸前までなっていたのに……こうして店の
売り上げで家族を温泉旅館にまで連れて行けるようになったとは

…』

『アリサさんやすずかさんは自腹らしいですよ?』

『とうぜんだろ? 奴等あくまで付いて来たみたいなノリだしな』

『なるほど』

そうだ、あいつら二人には金は捨てるほどある

だが、なのは達の家計は一時は間違いなく火の車だった

だが今は……そう思えば、あいつに嫌われてでも土郎さんに唸ったのは間違いじゃなかったな

ある意味自分の中での逃げのような気もするが、まあそれで良いだろう

今なのはは少なからず幸せだ……

「ほなまた後でな連夜君」

「こちらはお任せください」

宛無……アテネはぺこりと頭を下げると、はやての乗る車椅子を押して温泉浴場まで向かっていった

「やてと……」

俺の片手には風呂の用意が一式入っている

俺も今から温泉に向かうわけなのだが……

「さあ、行こうよユーノ君」

「キューキューキュー！」

やはりここで待つてれば来ると思った

俺は物陰に隠れ、その声が近づくのを待った

「ちよつとなのは！あんた歩くの早いつて！」

「そんなに急がなくても、温泉は逃げませんよなのはちゃん」

「むうゝだつてユーノ君が逃げようとするんだもんゝ」

そんな事を言いながら俺の前を横切る三人組みが居た

三人は俺の事など意に介さないように素通りしていった

と言つても、俺は隠れているので意に介す介さないは無いのだが……

やはり、ユーノが女湯に連れて行かれようとしていた

此処はやはり奴を助けておこう

久しぶりにゆっくり会話もしたいしな

『ユーノ、俺の声が聞こえるな?』

『連夜!?今どこに居るの?お願い助けてよ!』

『落ち着け、とりあえず無理やりにもその場から逃げ出してすぐの角を曲がれ』

『分かった!』

直後、遠くから「キューキュキュー!」と小動物の音が聞こえてきた

そして、それから数秒後くらいにイタチのような小動物が俺の前に現れた

『急いで、なのは達が来る!』

ドタドタと音が此方に近づいてくる

今下手にあいつらと鉢合わせは不味いし……

ふと前を見るとほぼ目と鼻の先が男湯だ

だったら……

「ユーノ……あれ?」

彼女達が来たときは既にその場に俺の姿は無かった

いや、正確にはまさに男子風呂の暖簾を潜ろうとしている俺の後姿

を見たつてところだろう

「あの！」

と、声を掛けられたのは予想外だった

顔を見せたくないのに、少しだけあいつらに顔を向ける

「ここら辺で……へ？」

なのはの様子がおかしかった

少しばかり驚いた顔をしていた

まさか気づかれたか！？

『ガララララ』

「あっ！」

俺はなのはの言葉を聞かず、そのまま男湯の入り口に入って行った

『危なかったね……』

『いろいろとな……』

風呂の用意の中に隠れていたユーノがひょっこりと顔を出した

お互い疲れた顔だった

ともかくこのままイタチ…フェレットを温泉に入れるのは如何な物かと思つた俺は、とりあえずそのままトイレの個室に向かつた

『どうしたんだい？連夜』

「とりあえず、お前の姿を一時的だが元に戻す
ちよつと待つてろよ」

俺はユーノを片手に、もう片方の手を上に掲げた

「吸魔の印……」

白騎士物語の魔法吸魔の印を使った

その瞬間、俺の掲げた手には多くの魔力が集まつて行つた

『凄い魔力量だ！それに、見たこと無い魔法だ…』

ユーノは純粹に今起きている事に驚いていた

「吸魔の印…魔力を吸い取つて自分か他者の魔力を回復させる印さ
…ほら、これくらいあれば少しは人間態になれるだろ？」

俺は印の解説をしながら、大気から吸収した魔力をユーノに与えた
瞬間、ユーノの体が光り輝き、その体が人の体形をとつた

「凄い…まさかこつちの世界で戻れるなんて…本当に君は凄いな連
夜」

「いやなに、良いって事よ…ちなみに言つとくと、お前自分のその正体高町に教えてないだろ？だから女湯に連れて行かれるんだぞ？」

俺は言うだけ言って返答を待たず外に出た

子供とは言えトイレの個室に二人つきりはまずい

「え？でも確か…ああ！」

直後、後ろにはやってしまったと言った顔をしたユーノが居た

「ふいゝ極楽極楽」

「はは、なんだかおじさんみたいだよ連夜」

そんな事を言いながら俺達二人は温泉に入っていた

しかも今は露天風呂

景色も美しく、気温、湯加減共に最高だった

「いやゝやっぱ風呂は気持ち良いな」

「本当だね、僕は最近はずっとフェレットの姿だったから、人の姿になるのも久しぶりだよ」

まあ実質ユーノの人型を見たのも、俺と始めて会ったあの日以来だったしな…やっぱ女みたいな顔してるな

「連夜今失礼なこと考えたでしょう？」

ユーノが暗い目で俺を見ていた

なんでこの世界の奴らは読唇術に優れているのやら……

「気のせいだろ？んな事思ってたねえよ」

本当はバリバリ思いましたけどね

「まあ良いけど……たぶんこの僕の顔の事だと思うし……」

中々するどいと賞賛するよユーノ

なんやかんや言いながら俺達は露天風呂を楽しんでいた

そんな時だった

「父さん、やっぱり綺麗な景色ですよ」

「気温もそれほど寒くない…確かにいい露天風呂だな」

高町家族の唯一の男組

高町士郎さんと恭也さんが露天風呂に入ってきたのだ

「君は！」

「！――」

そして、俺が何の行動を起こすよりも早く、俺は土郎さんと恭也さんに発見されてしまった

「……お久しぶりですね…土郎さん、恭也さん」

俺はまあこの二人には会っても構わないと思ったために、下手なことはせずにその場に残ることにした

はたしてこれが吉と出るか凶と出るか……

「確か……」

「大道連夜です…土郎さん

横に居るこいつは俺の友人のスクライアです」

「え？あ…スクライアです…はじめまして」

ユーノが遠慮気味に頭を下げる

と言ってもユーノに関しては初対面ではないのだから、なんともおかしい状況だとは思うのだが……

土郎さんも恭也さんも、俺との突然の再会に少し戸惑っているようだった

今まで何をしていたのか？そんなことを聞かれるのかと思っていたが……

「君には、我々はいくら謝っても許してもらえないだろう

それだけの事を我々は君にしてしまった」

「本当にすまない……我が家の間違いも、なのはの事も、君が救ってくれたのに……俺たちは君に何もしてやれなかった……」

心痛な面持ちでそう言った士郎さんと恭也さん

はつきり言って俺は言われている言葉の意味を分かっていたいなかった
だからこそ言葉が返せなかった

「……高町の事を言っているなら、別にお二人が謝ることじゃありませんよ

士郎さんも恭也さんも、何も悪いことをしていたわけではありませんせんから……

時々あいつの姿を見かけますが、新しい友人も出来たみたいで、幸せそうじゃないですか……

俺はあくまでイレギュラーな存在だったんです
ですから、別にお二人が気に病む必要はありません」

そう、この言葉は自分にも言い聞かせているような言葉だった

俺の存在はイレギュラーな存在なのだ

あいつには今友達が居る……俺は必要ない

「それは違うぞ連夜君……あの子は……なのはは君にしてしまったことを心から悔やんでいる

確かに今のあの子は幸せそうな表情を浮かべている
だが、時々見せるのだよ……とても悲痛で辛そうな表情を……」

「以前母さんがなのはにその理由を聞いたんだ
すると、はつきりと口にはしなかったが、あの子に会い、あの子に
助けられたのに、自分がしたのはあの子を傷つける事だった
自分は謝らなければいけない……許してくれなくても、罵られても、
自分をあの子に謝らなければいけないと……
なのはは君の事を決して忘れてなどいない……俺達が君に偉そうに
何かを言えた義理じゃないのは百も承知だ
だが、なのはが君の事を思っている……それだけは忘れないでくれ……
……」

恭也さんも、士郎さんも、小さくだが俺に頭を下げた

俺はすぐに答えを出すことが出来なかった

なんとかしてようやくだした答えが「自分の気持ちの整理がついたら、俺からまた高町に会いに行きます
だから、それまではこの場で俺に会った事は、内緒にしてください」

二人はそれを了承してくれた

俺はその場に居ずらくなったので、ユーノを連れて風呂から出た

第十二話（後書き）

次回はようやく戦いです（泣）

第十三話（前書き）

ひじょうに遅くなってしまいました

本当にすいません

温泉編中盤です

第十三話

温泉からあがった俺とユーノ……しかし、そんな二人の間に少しばかりの気まずさがあった

「君だったんだね？なのはが言っていた傷つけた人って言うのは……」

「ユーノ……すまん

今は何も言わないでくれ……」

俺は目の前の出来事から目を背けようとしていた

なのはがそんなことを思っていたなんて、考えたこともなかった

アリサとすずかの存在で安心していたのもあるだろうが……どこかでなのはに後ろめたい気持ちを持っていたのかもしれないな

それに気づいたところで俺は何も実行しない

やっと面と向かって会うのはあの日だと心に決めてある……なんて適当な理由をつけて俺は逃げてるだけなんだよな……きっと

「うん……わかったよ

でも、その気になったらいつでも僕に言ってよ
いつでも僕は連夜に協力するから……友達だろ？」

そのユーノの笑顔が何よりも眩しかった

無駄に輝いて見えた

「ありがとな…ユーノ」

言葉と共に二人の拳を『コツン』と付き合わせる

お互いには何も言わず、その場を去っていった

ユーノは出た瞬間フェレットの姿に戻っていた

「さて……」

気を締めなおそう…どだい奴にはすぐに会うことになる

今の格好は旅館が用意してくれた青い浴衣を着ている

エターナルメモリを懐に入れ、俺は旅館の庭に向かった

フエイトside

「ふう…」

アルフと分かれた私は、旅館の庭にあった大きな木に腰掛けて空を見上げていた

綺麗な月だった

まるで穢れをしないような、それでいてどこか神秘的な感覚を感じ

させる……そんな時だった

「おやおや……今日は月が綺麗だと思って外に出たら……かぐや姫もびっくりの美人さんに会えるとはな……」

後ろからそんな声が聞こえた

私はあわてて振り返ると、そこに居たつい最近知り合ったばかりの男の子が居た

「連夜？」

なぜここに居るのか？と言う問いよりも先にそんな言葉が出たしまった

「お、名前覚えてくれてたんだ……嬉しいぞ……テストロッサ」

彼は笑顔でそう言っていた

なぜかその笑顔に胸が締め付けられる

顔も熱くなるし、どうしちゃったんだろ私……

「こんなところで会ったぁ奇遇だな……テストロッサは家族で来たのか？」

一人考え事をしていたら連夜がそんなことを言ってきた

「へ？あ、ああそうだよ……連夜は？」

「俺は最近仲良くなった友達とだよ
俺に両親は居ないからさ……」

「ご、ごめんなさい！私また……」

またやってしまった

彼の両親は居ないと分かっていたのに、また彼を傷つけるような事を言ってしまった

でも、彼は怒ってなかった

それどころか、笑って私の頭を撫でてくれた

「気にすんなって言ったろ？俺は気にしてないから、大丈夫だよ」

彼の手はとても暖かく、そして優しくかった

もう少しこのままで……なんて事を思っている間に、彼の手は私から離れてしまった

「話は変わるが、ここに来る前に変な石を見つけたぞ？」

「えっ！」

自分で言っただけで慌ててその口を手で押さえ込む

「？」

なんだ？お前の大事なもんだっただけか？

変に青色に光ってたからよ……不気味に思ってたままにしてたん

だが……」

幸い彼は気づいていないみたいだった

「そ、そうなんだ……ここに来る前に落としちゃって……どこにあったの？」

彼が「アッチ」といって場所を指差す

私は「ありがとう」と言ってその場を後にした

彼が見つけたのは、間違いなくジュエルシードだ……

side out

「やれやれ……少しあからさま過ぎたか……」

フェイトが行った先を見ながら、一人そんなことを言っていた

しかしなあフェイト……あの驚き方は嘘ついてるって丸分かりだった……

んな事を気にする余裕もなかったかい？

まあなんにしてもだ

これで三つ目のジュエルシードが揃う

俺の腕に輝く二つのジュエルシードも仲間を欲しているかのように光っている

近くで強大な魔力反応を感じた

其処に小さな魔力反応が四つ

間違いなくフェイトやなのは、アルフとユーノだと判断した

『アテネ……聞こえるか?』

と言うか聞こえてくれなければ色々と困るのだが…

『はいはい』

どうしましたか? 連夜さん』

どうやら心配は無用だったらしい

『今からジュエルシードを回収しに行く

ードンパチあるだろうから結界とはやての護衛を頼んだぞ?』

『はいはい、了解です

あと30分程で晩御飯ですから、それまでには帰ってきてください
ね』

お前はお母さんか!?!と思わず突っ込みを入れたくなったがそこは
我慢我慢

『了解した…』

それだけ言って念話を強制的に切った

自分で通信しておきながら…と内心想っていたが、気にしたら負け
と思い考えるのをやめた

「さあ…行くか……」

浴衣の懷から『E』の刻印の入ったメモリを取り出す

『E t e r n a l』

機動スイッチは夜の闇夜に静かに響き、腰にはロストドライバーが
巻かれた

「変身！」

『E t e r n a l！』

勢い良くメモリをスロットに突き刺し、展開する

純白の粒子が体を包み、体を変えていく

次の瞬間、俺の変身は完了していた

「さあ…行くか」

勢い良く地面を蹴り、俺は戦いの場へ赴くのだった……

C o s i d e

『なのは！』

「デイベインシューター……」

彼女の声に導かれるように、その周囲に四つの桃色の球体が現れるそれは彼女の周囲を周り、次の指示を待っているようだった

「余所見してる余裕があるのかい？」

聞き慣れない女性の声と共に、僕は小さな体で横に飛んだ

「ちっ！」

僕が先程まで居た場所は彼女が振り下ろした拳の威力で小さなクレイターが出来ていた

思わず背筋に悪寒が走る

「シュート！」

なのはの声に待ってましたと言わんばかりに球体達は金髪の魔導師に向かっていく

しかし、まだ単調な動きしか出来ないそれは、彼女には止まって見えるようで、まるで当然のことようにそれを回避した

「っ！」

まだ追尾性能を持たせていないため、シューターはそのまま彼女を通り過ぎ、爆発した

「やあああああ！」

敵はなのはに休息を与えなかった

先程まで杖のようになっていた彼女のデバイスは鎌のような姿になつており、なのはに切りかかった

「くっ！」

『プロテクション』

なのはが前に手を置き、そこを中心に彼女を守る魔法の障壁が生まれる

敵はそんな事はお構いなしと言わんばかりにデバイスを振り下ろした

『バチイイイ！』

なのはの張った盾と、敵の鎌が衝突し、火花を散らす

「余裕じゃないか！」

「なっ！」

戦いを見ていた僕に、もうひとりの敵（彼女は使い魔って言うわけ）が僕に拳を振り下ろした

『くっ！チェーンバインド！』

「なっ！しまった！」

僕の手から伸びた鎖が彼女を拘束する

なのはと戦っている敵の方にも出来れば使いたかったけど、そこまでの余裕が僕にはなかった

『悪いけど…じつとしていて!』

「きいいい! イタチのクセに偉そうに!」

『なっ! この姿はフェレットだよ!』

自分で言ってるそんな事を言ってる場合じゃないと想った

なのはの方は、敵と一旦距離をとり、大きな魔法陣を前に展開させていた

『なのは…あれを使うんだね』

僕と必死になって練習した新しい技を…

「きいいい! 邪魔くさいね!」

そんな思いに敵は浸らせてくれないらしい…

チェーンバインド自身に罅が入り始めていた

気を抜くと本当に壊される

「お願い当たって……ディバインバスター!」

魔法陣から一筋の太い桃色の光線が放たれる

それはあの金髪の魔導師に向かって一直線に飛んできた

だがダメだ…スピードが遅かった

「っ！当たるわけにはいかない！」

敵は上に上がって光の光線を回避した

なのも驚いていた

いや違った

彼女は不敵に笑っていた

このときを待っていたかのように

「今だ！レイジングハート！」

『オーライマスター！』

彼女の言葉と共に、レイジングハートの姿が変わる

『あの姿は！』

「しまった！バルディッシュ！」

『了解マスター！』

敵の彼女もなのはやろうとしていることに気付いたのか、自身の
デバイスを再び変形させる

そして、二人が次の行動を起こすのはほぼ同時だった

「リリカルマジカル…」

「ジュエルシード…」

「封印！」

二人の声が一つに重なり、お互いのデバイスから一筋の光が放たれる

光の速度はややなのはの方が早い

『やった！』

僕はなのはがジュエルシードを手に出れると確信した

だが…

「ところがギッチョン！」

夜空にそんな声を響かせながら、ジュエルシードに向かっていた二
つの光を何者かが打ち消した

その人物は僕の良く知る人物で…僕のもう1人の協力者だった

side out

『バチン！』

片手でジュエルシードに向かってきた二筋の光を打ち消した

なのはもフェイトも驚いた表情をしている

いや、フェイトはやや安堵しているようだ

当然か…俺が来なければ今頃なのはに奪われてただろうからな

「あ、あんたは…！」

驚いている二人に変わり、ユーノのチェーンバインドに拘束されたアルフがそう言った

「悪いがこのジュエルシードは俺が頂く」

ご丁寧に自分の目的を言っただけ

途端に空気は臨戦態勢の状態になる

あれほどの實力を見せつけられてはまだフェイトもなのはも俺と戦おうとしているらしい

馬鹿を通り越して滑稽だった

思わず笑ってしまう

「ジュエルシードは渡さない！」

フォトンランサー！」

フェイトが切り込み隊長だった

雷の矢が俺に向かって飛んでくる

「マナシールド…」

俺に被弾しそうになった雷の矢は、突如俺の前に現れた障壁にかき消されてしまった

マナシールド…白騎士物語に登場する神聖魔法の一つ

本来の能力は魔法攻撃を緩和させる魔法だが、俺の魔力で張られたこれは、そこそこの魔法攻撃なら完全に防いでしまう代物になっていた

「！」

フェイトは自身の攻撃が防がれた事に驚いた様子だった

上には上がいるっての…

「俺は無駄な戦いはしたくない…

この俺を今見逃せば…もう俺はジュエルシードを集める必要がなくなるんだぞ？

「

俺の言った言葉の意味はどうやら上手く伝わらなかったようだ

「意味が分からんか？」

俺のジュエルシードを封印しているこれは、ジュエルシードを三つまでしか封印出来ない」

俺の腕に装着されたブレスレットを指差し、それを見せた

「今封じられているジュエルシードは全部で二つ

つまりこのジュエルシードを封印すれば、俺はジュエルシードを封印するすべを失い、このジュエルシード争奪戦からリタイアすると言っことになるわけだ」

「「!!」」

ようやく二人は俺がどれほどの事を言っているか理解出来たらしい

「どうだ？君達にとって得しかないだろ？」

私の力を君達は充分理解しているはずだ

私と言う存在がいなければ、あとの敵はそこにいる君達自身だ
どうだ？見逃した方が得だろう？」

最後に「まあ邪魔はするかもしれないが」と付け加えて、俺はジュエルシードに手を伸ばす

視線はなのは達の方に固定

手だけをジュエルシードに伸ばした

「まっ……」

フェイトが一瞬こちらに向かってこようとした……が、既に俺の手

はジュエルシードのコアを掴んでいた

「一歩遅かったな……ジュエルシード……封印!」

瞬間、俺も含めて、あたり一面が眩い光に包まれた

「わわっ!」

「うわっ!」

二人の魔導師…正確には三人の魔導師と使い魔一匹が光に呑み込まれる際そんな声を出していた

一瞬目の前が真っ白になるかのような眩い光は徐々に終息していき、次第に視界が回復してきた

俺は手元のブレスレットを見る

其処には、三つに光り輝いた青色の宝石があつた

「封印…完了」

自分で自分の顔は分らないが、恐らく俺は嫌な笑みを浮かべているだろう

「ああ……」

フェイトが心底落胆したような声を漏らしていた

「礼を言おう…これで私はジュエルシードの争奪戦からは脱退する

私と言う脅威は消えたわけだ
完全ではないがな……」

さて…と付け加えて俺は辺りを見渡す

幸いアテネが張ってくれた結界のおかげで実際の世界に支障はなさ
そうだった

むしろいくら暴れても問題は無かろう

フェイトもなのはも構えは解いている

これから俺が出す提案にどのように応じるのやら…

「俺と言う脅威が薄れた今…残った脅威は其処にいるお互いだけだ
さて、そこで俺は今日ここでそのもう1人も脱退させる方法を揭示
してやるう」

二人が途端に表情を変える

いったい何を言い出す気なのか興味津々と言った所的那样だ

ユーノは……何か気付いているのかじつとこちらを見ている

アルフはいつの間にかチェーンバインドから抜け出し、フェイトに
「そんな奴の言うことに耳を貸しちゃダメだ」と訴えかけている

まあ実質俺の提案を受け入れても結果は変わらないのだが、少しは
物語に沿わせないと……

「ここで互いに持っているジュエルシードを一個ずつ賭けて勝負をすればいい」

少なからず勝てばどちらかにジュエルシードが手に入る

それに、圧倒的な実力の差を見せられれば、負けた相手はこんな戦いから身を退くかもしれない

どうだ？お互いに悪い話ではないと思うが？」

俺の長々しい説明に、いの一番で返答したのはフェイトだった

アルフが驚いている

「でも此处で勝てば、あの子には諦めてもらえるかもしれない」

それがフェイトの言い分だった

なのはも遅れて参加の意を示した

ユーノは止めない

ただなのはを激励し、俺を見つめていた

恐らく、ここでなのはが勝てば後顧の憂いも絶えると言うものだ

だが、本心は恐らく、俺が何故なのはを危険な目に合わせるのかという真理を確かめているのだろう

「ではお互いに同意と言うことだな？」

最後通告にも二人は黙って頷くのみだ

「フェイトが負けるはずないよ！」

アルフが彼女の後ろからそんな声援を送っていた

『なのは…頑張って』

フェレットの姿の為にその表情は分からないが、恐らく彼はなのはに笑いかけているのだらうと思う

「では……始め！」

言うが早いか動いたのはフェイトだ

バルディッシュをザンバーフォームに変形させ、一気になのはに切りかかる

なのはもまたそれをレイジングハートで受け止める

直後、フェイトの背後に桃色の魔法陣が二個展開される

「シュート！」

ディバインシューターが背後からフェイトを狙う

なのは自体はレイジングハートでバルディッシュを上にはじき、後方に距離をとっていた

体勢を崩されたフェイトはそのままシューターの餌食かと思われたが、いまだ制御が曖昧なシューターが当たるはずもなく、直線的な軌道故に避けられてしまった

「っ！」

なのはがバインドに捕まっていた

恐らく回避したフェイトがやった物だろう

両手足を拘束されて空中で金縛りにあったような状態にされていた

「フォトンランサー！」

数本の雷の矢がなのはに飛ぶ

『プロテクション』

レイジングハートが直ぐに障壁を張った

が、一本ならまだしも、数本一気に降り注いだ雷の矢を防ぐ強度を、この障壁はまだ持ち合わせていなかった

「キャアアア！」

障壁が破壊され、バインドも解けて地上に落下するなのは

彼女が立ち上がろうとした時には、その喉元にバルディッシュの切っ先が向けられていた

俺の予想していたとおり、なのはの完敗だった

『リリース……』

直後、レイジングハートから一つのジュエルシードが排出された

「レイジングハート！？」

相棒の思わぬ行動になのはは驚いた

「きつと、主人思いのいい子なんだよ」

フェイトはバルディツシュにそのジュエルシードを回収させながら、そんな事を言っていた

「これに懲りたらもう私達に関わらないで……」

冷たく、悲しそうにフェイトはそう呟く

その表情には間違いなく謝罪の念が込められていた

「諦めない……私、諦めないよ！
まだちゃんとお話してないもん！
だから私諦めない！」

なのはは気丈にそう言う

「私の名前は高町なのは！
あなたの名前は？」

ゆっくりと離れていくフェイトに、なのはは名を告げる

「フェイト…フェイト・テストロッサ……」

顔を向けることなく、彼女もまた名を告げた

その顔はなぜか俺に向いていた

「次は……あなたのジュエルシールドを貰います！」

バルディッシュを再びザンバーフォームにし、フェイトは俺を睨み付けた

「おいおい…君は馬鹿か？」

思わず本音を口にした

俺の実力を決して知らないわけではないだろうに……なぜこの気に及んで俺に向かってこようとするのか？

「私が君と戦ったのはジュエルシードを得るためだ
そうでなければ君のような者と戦う気はない」

「それなら、私には貴男と戦う理由があります！」

バルディッシュを構えるフェイト

どうやら本気らしい

アルフもなぜかこう言うときはフェイトの意見を尊重する

主に逆らえない使い魔の定めか…なんというか

それが間違った判断だといつ気づくのか…

考えるだけで頭が痛くなりそうだった

「なら……今一度分かせてあげよう
お前と俺の圧倒的な差を……」

「ハア!!」

俺が構えをとると共にフェイトは突っ込んできた

単調な攻撃だ

よくこれで勝てると思ったものだ

上から振り下ろされたバルディッシュを右手で去なし、左手でフェイトの首を掴んだ

「ぐう!あぐつ!」

苦しみの顔を上げながら、フェイトは足をばたつかせ、片手で俺の手から逃れようとしていた

が、そんな事をさせる俺ではなかった

「ソウルゲイン……」

俺は白騎士物語に登場する精霊魔法ソウルゲインを使った

「あああああああ!」

直後、フェイトの体に電撃が走る

そして、フェイトの体から白い球体が次々と現れ、俺の中に入っていた

そう…俺はフェイトの体力を吸っているのだ

「あああああああああああああああ！」

苦痛に悲鳴を上げるフェイト

アルフが駆け寄ろうと走り出す

「ファイヤーボール…」

俺は余っている右手をアルフに向け、彼女の足下に炎の球を打ち出した

「あ……ああ………」

フェイトは遂にバルディッシュを落とし、両手をだらんと下げた

体力の吸引もそこで終わった

まだ息はしている

何も死ぬまで体力を吸ったわけではないからだ

しかし、フェイトは既にムシの息も同然だった

「ほらよ」

そのままフェイトをアルフに投げる

「フェイト！……………お前……………よくも……………」

怒りに震えるアルフが今にもこちらに襲い掛かってきそうな状態だった

「貴様よく考えて行動しろよ？」

貴様が俺に戦いを挑むのは勝手だが、結果は見えてる
貴様の主と同じ結末を辿るだけだ

もし貴様がそうなった場合、貴様はどうやって主を介抱するつもりだ？」

俺の指摘にアルフは表情を歪める

正論だからこそ反論出来ない

また、アルフはこんな状態のフェイトをほって戦うほど愚かでないのも分かっていた

「くそ！くそ！くそ！」

アルフは悔しそうにそう言いながら、その場から転移していった

「どうして……」

なのはが俯きながらそんな事を言った

「貴様もやる気か？
白き魔導師……」

「どうしてあんな酷いことが出来るの！？
どうしてあんな……」

「言いたいことはそれだけか……」

俺は彼女の前に手をかざし、魔力をその手に集めた

「スリープ……」

水色の霧のような魔力が俺の手から放たれ、彼女の顔を包んだ

「あっ……うう」

そのまま彼女は崩れ落ち、眠ってしまった

支える物が何も無かった為、俺が支える羽目になったが……

「ユーノ……高町を頼む」

『……分かったよ
連夜………』

なのはをそこら辺にあった気にもたれさせ、俺はユーノに後を託した

「忘れられちゃったな……」

俺はフェイトが落とし、忘れていったバルディッシュを拾った

『何をされても…私はあなたに降ることはない』

「心配するな……何もせずにテストロッサに返してやるよ」

俺はメモリを抜き、変身を解除しながらバルディッシュに言った

『あなたは……Mr・連夜』

バルディッシュはエターナルの正体が俺だった事に驚いているようだった

「俺は約束を守る

必ずテストロッサの下に返してやる

その代わり、時が来るまでは、俺のことはテストロッサには内緒にしておいてくれ」

『了解…』

バルディッシュは冷たくそう告げて自分から待機モードに戻った

そうして俺は、ようやくはやての待つ部屋に帰るのだった

第十三話（後書き）

いやはや、バルディッシュをどうやって返そうか……

次回は少しばかりバルディッシュとはやてとお話して、温泉編を終わらせます

第十四話（前書き）

旅館編終了です

今回は超短いですが、お楽しみください

第十四話

「悪い……遅くなっちゃった」

部屋に入って一番最初にまずそう言った

「遅いで連夜君！こちらで先食べようか思たわ」

はやてが悪戯な笑みを浮かべながら俺を見ていた

その表情に少しばかり安堵しながら、俺はゆっくりと夕食が置いてあるテーブルの前に座った

目の前ではぐつぐつと音を立てている鍋と、皿に盛られた肉と野菜があった

どうやら、今日の夕食はすき焼きらしい

「そうだ、八神

アテ……宛無さんは優しいか？」

まあ会話のネタが無く思わず言ってしまった事だが……もう少しなにかネタを考えるべきだったと思った

「うん！めっちゃ優しいしてもらたで」

はやては笑顔でそう言った

その笑顔が見ただけでも、俺はアテネに感謝しても足りないくらいだった

『礼を言っぞ…アテネ…』

『いえいえ』

念話でそう言い、アテネは笑顔を俺に向けた

「ほな食べよ！

せっかくのすき焼きやねんさかい

はよ食べな罰当たるで」

はやてがまず野菜を鍋に入れ、その後に肉を入れる

すぐに部屋を、食欲をそそる匂いが満たした

すぐにも箸を持って食べたい衝動に駆られたが、そこは我慢

はやてがせっせと準備をしてくれている

アテネもそこにいろいろ手伝いをしていた

なんだか仲の良い姉妹のように見えてしまう俺を誰れも責めることはできない筈だ

そんなこんなで夕食のすき焼きはとても美味しいものとなった

十分すぎるほど空腹を満たせたので、はやても俺もアテネもご満悦と言った様子だった

そして時間と言つやつはあつという間に過ぎていくもので、気づけばよい子はもう寝る時間となっていた

二人分の布団のはずが、なぜか一人分しか敷かれていないこの状況

「一緒に寝よ？」と涙目＋上目使いで言われたら断れるはずがない
むしろ男として断つてはだめだ

いつの間にかアテネも人形モードになっていたし、まあ逃げられない状況ってやつで……

ともかくはやてを布団に運び、やさしく寝かす

その横に俺が寝転び、アテネがその俺の横に入る

板ばさみのような状態になりながら、俺達は就寝となった

しかし、はつきり言おう

全然寝れる気がしない

はやてはめちゃくちやがつしり俺の手掴んでるし、アテネは本来の定位置である俺の肩付近で寝てやがる

幸い片手は動かせたので、もぞもぞと懷から物を取り出す

そう、待機モードになっていたバルディッシュだ

とりあえず認識障害をかけて、はやてには俺が普通に寝てるように見せておく、これで間違っても起きる事はない

まあ、話し声も聞こえないようにはしといたし大丈夫だろう

「よお、起きてるか？」

話しかけてみたが反応がない

ただの屍のようだ……

『起きてますよ失礼な……』

どうやら起きていたらしい

しかしまあ知ってはいたがあまり感情の感じられない声だな

『私はデバイスですから……』

「いちいち人の心を読むな……」

顔に出てしまったか？と思いながらも、俺は別に気にしなかった

『なぜですか？』

「ん？」

唐突にバルディッシュがそんなことを言い出した

なぜ？Why？何のことだ？

『あなたはなぜマスターにあんな事を……マスターは酷く体力を消耗していました』

あなたもそれは判っていたはずですが、
なのになぜマスターにあんな事を……』

あんな事……と言うのは恐らくソウルゲインのことだろうな

「戦いを終わらせるにはああするしかなかった」

『あなたがあの場に現れなければもっと簡単に決着はついていました』

俺はこの瞬間、バルディッシュの今の状況を把握した

彼は怒っていたのだ

自分の主人を痛めつけたこの俺に人と同じように怒りを感じていたのだ

「確かにそうかも知れん……だがな、高町とテストロッサが放ったあの光がもしジュエルシールドに当たっていた場合、どうなったか分かっているのか？」

『……………』

無言は肯定ととるべきか無視ととるべきか……面倒な奴だ

「あのまま光を当てていれば、ジュエルシールドが暴走し、巨大な魔力が暴走していただろう……そうになっていた場合、被害を受けたの

は誰でもないお前たちデバイスだ」

『!!--』

驚いた…と言った様子だった

と言うことはあの無言は否定…または肯定ととるべきか……

「まあ特に被害が出ていたのはお前だろうなバルディッシュ……コアまではいかないものの、確実に外装は深刻なダメージを追っていただろうさ

そうなれば、テストロッサは自分を責めるだろうな…自責の念に駆られ、自分を責め続ける

俺はそれから救ってやったんだぞ？」

『しかしそれはあくまでIFの事柄であって結果論ではない…あなたがマスターにしたことをそれで許せと言うのですか?』

バルディッシュの怒りはもつともなことだ

無論俺も許してもらおうとは思っていない

だから答えは「NOだ」と言っておいた

「明日無事に家に帰ったら、テストロッサにちゃんと返してやるただし、俺のことはまだ秘密だ……近いうちに正体を晒すとは思うがな…」

『私があなたの約束を守っているんですか?』

「思ってるよ……なんせお前はあいつの秘密も誰にも言っていないだろ？」

アリシアの事もな……」

『あなたがなぜそれを――！』

「いずれ時の庭園にも行くさ……テストロッサもアリシアも、もちろんプレシアも……助けてやらんとな」

『……あなたはいつたい何者なのですか？

マスターの事といい、私にデータベース状にはあなたが使うような魔法もバリアジャケットも存在しません

あなたはいつたい……』

「俺は大道連夜だよ……そして世界を破壊する力……エターナルを持つものだ」

俺はバルディッシュにむかって得意げに笑って見せた

ああそうさ……かならず俺が全部救ってやる

もう取りこぼさない……俺の手の届く範囲……俺の大切な人達だけは……俺の手で必ず守る

『M r・連夜……』

「お、連夜って呼んだな？」

『あなたを信用しておきます……今は……』

「結構だ……さて、寝るか」

俺はバルディツシュを懷に入れなおし、認識障害も解除した

「ん」

はやてがぎゅっと俺の手を掴む

「お前も俺の大事な人だ……絶対に守ってやるからな」

頭を撫でながらそんなことを言った

アテネも俺の髪にしがみついている

俺もまたゆっくりと目を閉じながら、次第に広がっていく闇に意識を落としていった…

第十五話（前書き）

少し話をすつ飛ばした感があるかもしれませんが、第十五話です

お楽しみください

第十五話

時間は……恐らく朝だろう

理由は多々あるが、一番の理由は暖かな日差しだ

目をつぶっているから確実ではないが、本来は目の前が真っ暗な筈なのに今は真っ白だ

眩しいと言う表現が一番あっているだろう

容易に窓から日差しが部屋を照らす様を想像することが出来る

まあそんな事を考えているなら早く目を開けるとしよう

「……………」

目を開けるとそこにはまだ寝息をたてているはやてがいた

「スー、スー、スー」

規則正しい寝息をたてているはやてだが

ふと時計に目をやると朝の八時だ

じきに朝飯の時間だろう

アテネを見ると、その姿は既になかった

「ふう、良い湯でした」

襖を開けてタオルで頭を拭きながら、浴衣姿のアテネが入ってきた

「朝風呂か？」

布団から起き、少しまだ重いまぶたを擦りながら、アテネを見る

「あら、起きてたんですか？」

「なんとも魅力的な姿ですよ？連夜さん」

少し妖艶な笑みを見せるアテネ

半分寝ているために理性も半々な状態なので少し危なかったが、なんとか抑制する事に成功した

「連れないですねえ、連夜さん」

いい加減キャラを確立しろとツツコミたくなつたが、はやてを起こさないといけないと言う事を忘れていたため、はやてを起こすことにした

「おい、起きろ八神」

「ん」

はやてを揺すって起こそうとしたが、はやては起きなかった

「八神」

「あと五分」

はやては眠たそうな、つらそうな複雑な表情をしていた

「八神……………起きねえと……………もう抱っこしねえぞ？」

「起きる！」

瞬間、今まで寝ていた事が嘘のようにはやては布団から飛び起きた

そんなに嫌か？抱っこされないのが……………

「ありがとうな、連夜君

温泉連れてつてもろて……………」

家に着いたはやてはぺこりと頭を下げた

「気にすんなよ八神、俺もお前と行けて楽しかったよ
またどっか行こうな、約束だ」

「うん！約束」

俺とはやては小指同士を絡みあわせ、指切りをした

このまま分かれるのも少しばかり惜しまれたが、いろいろと用も残
つてるので帰ることにした

「じゃあな！八神」

手を振る俺の姿が見えなくなるまで、はやては俺に向かって手を振っていた

まあいちようはやての家の周りには強力な結界が張ってあるから誰も手出しできないし、はやてに触ろうとしたやつが少しでも邪な心があったら俺に反応が来るようにしてあるから大丈夫だろう……

『さて、転移転移』

家まで一気に空間転移し、俺は久しぶりの我が家に帰ってきたのだ
った

「お帰りなさい」

普段着の白いドレスのような服に着替えたアテネが俺を出迎えた

「魔力は無事切れたか？」

ジュエルシードの力を使って一時的にアテネと俺は魔力を繋げていたのでそれが切れているか確認した

自分ではこれがわからないのだ、困ったことに……

「ええ、切れてますよ大丈夫です」

「そうか、お前にも負担を掛けたな」

アテネの頭を撫でながら俺は彼女を労った

何やかんやで一番働いてくれたのは彼女だからだ

「まあ、あなたの頼みですから……私にできたことでしたしね」

アテネは少し頬を赤らめながらもそう言った

なんだか可愛いなあおい

「っと、大事な事を忘れてた

テストロッサにこいつを返さねえとな」

そう言っただけから待機モードのバルディッシュを取り出す

「あら、フェイトちゃんならさつき出かけましたよ？

空間転移だったんでちよつとおかしいなとは思ってたんですけど……」

そう言いながら徐々にアテネの表情が深刻なものへと変わっていく

俺も彼女の言葉を聞いて徐々に血の気が引いてきた

「まさか……違うよな？」

「解析できました………間違いなく、庭園に向かったかと……」

できれば間違っていてほしいと思った予想が外れていた

というよりもこのイベントはもっと先だと思っていただけに、突然すぎて驚いた

庭園………てことは、プレシアのDVを食らいに行ったわけかよ………

まだまだ色々足りねえが……行くしかないか

「アテネ、準備だ…時の庭園に行くぞ……」

「了解です」

アテネも俺の真剣な様子を感じ取ったのか、いつものようなフワフワした様子ではなく、きびきびとした様子で準備をした

「いつでもどうぞ」

そう言うアテネを前に、俺は自室から出て着替えてきた

黒いカーゴパンツにベルトを巻き、腰にはダガーナイフが鞘にはまった状態で装備されている

上には背中と左胸の部分に、林檎を突き刺さした剣、それを取り囲む四匹の蛇のエンブレムが描かれた黒いライダージャケットを羽織った

中には白いＴシャツを一枚着ているだけだった

その姿はまさにNEVERの衣装そのものの

迫力こそまだ俺が小さな子供の為にあまり無いが、形は本物だった

「さて、行くか…アテネ

バルディッシュ…すぐに主人のところに届けてやる」

「では……行きます!」

アテネの手を握り、バルディッシュを首からら下げた俺は、途端にアテネとともに光に包まれた

光が晴れたときには、俺は時の庭園、その入り口に立っていた

辺りを見渡すが、ほんとうに何もない所だと思ったのが第一印象だった

「座標ポイント、876C44193312D6993583D1460779F3125…間違いありません」

ふとアテネの姿を見ると、彼女の姿は大人モードのままだった

なぜか聞いてみると「ここは空気中の魔力量が多いので、この姿でも大丈夫なんです

海鳴では魔力量が少なすぎてこの姿を普通にやると私が酸欠のような状態になってしまつて…」とのことだ

前には住居がある

豪華な家だと思えるが、中で行われている事を考えるとそこまでの住居だとも思えない

なんにしても……フェイトを助けに行かねばな…

「アテネ、お前は此処に居てくれ…後でテストロッサ達をこつちによこす

そしたら海鳴の彼女の自宅に転移してやつてくれ」

アテネは「了解です」と笑顔で言ってくれた

俺はその笑顔に少し緊張をほぐしながら、時の庭園の中を歩いていった

そしてすぐに、膝を抱えてうずくまっているアルフを見つけた

体は小刻みに震え、少し涙も見えていた

「やっぱり此処に居たか……」

俺の言葉にアルフは非常に驚いた顔をして俺をみた

「あ、あんた……あんたがどうして此処に……」

だが、そう言った直後に、アルフはまた顔を埋めて震えていた

その後ろには、大きな扉が見えた

この中にフェイトが居る

だが、その前に……

「なっ！」

俺はアルフを抱きしめた

ほって置けなかったのもあるし、いくら使い魔と言えど人の姿をしている以上、それは立派な人だ

だからほっとけなかった

抱きしめたのは気分的にだ

「隠していたが、俺は実は魔道士でな…お前達の正体もすぐに気がついた

今日はほら、こいつを届けに来たんだ」

俺は首に掛かっているバルディッシュを見せる

「そ、そいつは、バルディッシュ！」

驚くアルフを見ながら、俺は話を進めた

「この奥にテストロッサが居るんだな？」

「っ！頼む…お願いだ…フェイトを…フェイトを救ってやってくれよ！」

アルフは俺にしがみついて嘆願してきた

俺はまたそつとアルフを抱きしめて耳元で言った

「心配するな…お前もテストロッサも、俺が守ってやる」

なぜかアルフの顔が真っ赤になっていたが今はそんな時じゃない

俺は扉の前に手をかざし、魔力を集中させた

「貫け炎弓……フレイムランス！」

直後、俺の手から炎を纏った弓矢が扉に向かって飛んでいった

矢は扉び直撃し、その扉を強引に開けた

「!」

驚きの声を出してこちらを睨み付ける女が居た

プレシア・テストロッサ…フェイトの母だった

その娘であるフェイトが、彼女の横で傷だらけになりながら倒れていた

プレシアの手には魔力で生成されたと思われる鞭、明らかな虐待行為の現場だった

「フェイト!」

悲鳴のような声を上げて彼女のもとまで飛び出し、抱きかかえたのはアルフだった

プレシアはずっと俺を睨み付けている

「うつ…ア…ル…フ」

弱弱しい、今にも折れてしまうのではないかと思えるような細い腕で、アルフを撫でるフェイト

そして、その虚ろな瞳はゆっくりと俺の姿を捉えた

「あ……連……夜……どう……して」

「お前の忘れ物を届けに来たんだよ……ほら」

俺は首から提げていたバルディッシュをフェイトの首に掛けてやった

「バルディッシュ……」

震える指で待機モードのバルディッシュをなぞるフェイト

それを見ながら、俺は沸々と怒りを滾らせていた

「邪魔しないでくれる？ 今お説教中なの……」

プレシアはイライラした様子で後ろに立った

「アルフ……テストロッサを連れてこの場所を出ろ

この建物を出て直ぐの所に一人の女性が立ってる筈だ……

その女性に海鳴まで転移させてもらえ……俺の仲間だ」

「何を勝手に話を進めてるの？ 邪魔しないでもらえるかしら！」

プレシアは怒りに燃える目で俺達に鞭を振り下ろした

「マナシールド」

俺は振り下ろされた鞭に向かって手をかざす

鞭は俺の手から展開された障壁に阻まれ、俺達に当たらなかった

「あなた…いつたい何者？」

怪訝な表情を見せながら、戦闘態勢をとるプレシア

「俺か？俺の名は大道連夜…こいつのお隣さんだよ…
そして……」

俺は一気に自分の魔力を解放する

さすがもとS級魔道士のプレシアでも、EXランクの俺の力には驚いたようだった

そして、その魔力を感じてフェイトやアルフは俺の正体に気がつき始めたようだった

「この世界のすべてを破壊するもの……エターナルの力を持つものだ！」

『E t e r n a l』

懐から取り出したメモリを起動させ、現れたドライバーにメモリを差し込む

「変身！」

『E t e r n a l！』

変身音と共に、俺の姿はエターナルレッドフレアへと変身した

「連夜！あんたが……」

「早く行け！ぐずぐずするな！」

いつまでもその場に居るアルフに渴を飛ばした

アルフは何度もこちらを振り向いていたが、フェイトを抱えながらアテネのもとへ向かっていった

「待ちなさい！！」

プレシアが魔力を紫色の雷に変え、アルフ達に向かってそれを放った

「マナシールド！」

俺は障壁を展開してそれを阻んだ

しかし、やはりもとS級魔導士の攻撃は凄まじいもので、あれほど堅固な障壁だったマナシールドが、攻撃を受け止めきれなくなっていた

「くっぬううう！」

両手にしてもそれ変わらない

むしろプレシアは雷の威力を上げていた

だが負けるわけにはいかない

奴の雷を防げなければ、アルフ達に攻撃が当たる

それだけは阻止しなければならなかった

「この……このヤロオオオオオオ！」

突如、俺の腕に描かれた真つ赤な炎のエンブレムが燃え上がりだした

その炎は徐々に勢いを増していき、次第に展開しているマナシールドにまで燃え移りだした

「こっこれは！」

驚いたのは俺だった

こんな現象は初めてだったからだ

「なに？あなたのその炎？」

驚いているのは俺も同じなのだが……

だがその炎はマナシールドを強化しているようにも見えた

炎はマナシールドを包み、遂にはプレシアが放っていた雷を弾き返したのだ

「なっ！」

プレシアはその一撃をもろにくらい、後ろへ飛ばされた

「ぐふっ！」

呻き声をあげるプレシア

俺はまるで力が吸い取られたかのような虚脱感に襲われていた

「くっ！んな病弱な体で無理してんじゃねえプレシア！」

息も絶え絶えになりながら、毒づいて見せた

「ゴホッ！どうして……この体のことを……」

フラフラと杖を支えに立ち上がるプレシア

口からは少々の吐血が見られた

「私の邪魔はさせない……絶対に！」

再びプレシアは紫の雷を放った

「んの！」

再びマナシールドを展開して雷を防ぐ

今度は最初から腕の炎がシールドに纏われていた

『だが……このままじゃ埒が開かねえ

あいつを説得するためにも……なんかしねえと』

と言いながらも、プレシアは更に雷の力を上げたのか、炎纏っていてもやっとの状態だった

シールドの強度にも限界が来る

自分のフルパワーを使うことが出来ない枷が、ここで現れた

魔力を解放は出来ても使えない

宝の持ち腐れとはこのことだと思った

そんなとき……

『誰か……誰か聞こえる?』

俺の頭に響く声があった

フェイトによく似た声だったけどどこか違う

だがフェイトは既にアテネによって転移されている

と言うことは、残った答えは一つだった

「アリシアか!」

一つの名案が浮かんだ俺は、とにかく力任せに雷を振り払い、プレシアの後ろにある扉の前まで飛んだ

「なっ!」

「ファイヤーボール」

プレシアが驚いて反撃に出る前に、彼女の足下に炎の球を打ち出した
それがめくらましになっている間に、その扉を開け、奥へと進んで
いった

「なっ！待ちなさい！！」

待てと言われて待つ奴が何処にいるのやら……

俺はそのまま奥へ奥へと進んでいった

道中数多くの扉を開け、おそらく二桁目であろう扉を開けた

「……………ここは」

そこは一つの実験室のような所で、色々な機材や薬品のような物が
置かれていた

そして、その最奥部分となる所に、巨大な試験管のような物体が置
かれていた

その中は半透明な液体で満たしてあり、そして、1人の少女が中で
浮いていた

その少女は、まるでフェイトそっくりだった

いや、正確にはフェイトがそっくりなのか……

「この子が……アリシア……テストロッサ……」

直後、勢いよく開け放たれた扉の音を響かせて、プレシアが入って
きた

第十五話（後書き）

次回は連夜が説教モードになります

そして、彼の歴史も少しばかり語る予定です

次回お楽しみください

第十六話（前書き）

説教回です

色んなところから言葉を拝借させてもらってます

少し会話の繋ぎ方が下手です

どうぞお楽しみください

第十六話

プレシアは肩で息をしながらこちらを睨みつけていた

間違いなく殺意のこもった目

それが俺に向けられていた

「ハア…ハア…ハア…見たわね…」

殺意と狂気の入り混ざった目

俺の表情は仮面で隠れているため相手には分からないだろうが、自分でもどんな表情をしているのか分からなかった

「確か…プレシア・テストロッサには一人娘が居た名をアリシア・テストロッサ…」

プレシアはその名前が出た瞬間ピクリと眉を動かした

「だが、彼女はお前の実験ミスによって死亡したとされている…そしてその後、お前は行方をくらまし、学会からも追放となった…」

「ずいぶん調べたものね…」

見たところまだ一桁の年齢の子供に思えたのに…」

プレシアは怪訝な表情を隠すこともなく俺にそう言ってきた

まあ体は九歳だが、中身は十九……もう二十歳超えてるからな……

知識のほうもアニメであらかた得た知識だし、間違っちゃいないからな

「知らないことはない……」

その後、アリシアが亡くなってからお前に第二子が生まれたと言う情報は無い

なのに、アリシアそっくりで尚且つテストロッサを名乗っている女の子が居るって事は……あの子は……」

「そう……あの子は……フェイトは人じゃないわ……
私がアリシアそっくりに造り、生み出した……」

「人造魔導士……」

プレシアの言葉を奪ってその単語を言った俺に、プレシアはまた目を丸くした

「使い魔を超える人造生命の作成と死者蘇生の研究……プロジェクトF・A・T・E……通称F計画
フェイトって名前はそのプロジェクトの開発コードだろ？」

プレシアの言うはずだった全てを言ってやったので、プレシアは本当に驚いた様子だった

「どうしてそこまで知っているの？
あなた、本当に何者なの？」

俺に対して少しばかり不気味な感情も出てきたのだろう

先程までのプレシアとは少し気迫が弱まっていた

いや、正確には病に体を侵されているために、体力が単純に衰えていると言っ事かも知れないが……

なんにしても、ここでならプレシアも大火力の魔法は使うことができなはずだ

話をする為にもここでやるか……

「お前があの子にジュエルシードを集めさせているのは……このアリシアを蘇らせるため……か
だが、娘ならあの子も居るだろう……なぜ今になってアリシアの蘇生なんて」

「娘？笑わせないで！

あの子は……フェイトは只の失敗作よ……要らない子なの……私のアリシアの為の人形なのよ！」

まあそう来るだろうと答えは分かってたんだが……直に聞くとつらいねやつぱり

「人形……人形ねえ

ならなんでまだあの子に感情を残してる？

なんであの子に衣服を着せている？

人形なんだろう？あの子は……

人形に感情なんて要らなだろう？

無論衣服だって着せる必要はない……

所詮は自分を満たすための愛玩人形だ

使えなくなったら捨てればいい

お前なら、幾らでも新しいフェイトは作り出せるだろう?。」

自分でも、言つて吐き気がするほどのことを言っていると思う

外道、屑野郎の言い分だ

プレシアも俺がこんなことを言うとは思わなかったのか少し目を丸くしていた

「あ、あなたに何が分かるの!?。」

冷静さを欠いたプレシアはそう反論するしかなかった

だがなプレシア……あんたの感情は痛いほど理解できんだよ……これがな

「分かるさプレシア……あんたの気持ちはよく分かる
だがあんたはまだ恵まれている…アリシアが死んだのはお前の実験ミスが原因でもあるんだ
だからまだ自分を恨むこともできる」

プレシアの表情が少しばかり変わる

本来ならここで彼女は「何が分かるというの!?。」とでも言つつも
りだったのだろうが、俺の言葉にそれが言えずにいた

「俺の家族は、親父と御袋、そして一つ下の妹と俺の四人で生活していた…」

ある日、俺達は旅行に行った

むろん道中は車で移動していたさ……その時だ
前日酒を飲んで酔っていた車の運転手が操縦を誤り、俺達の乗る車
と正面衝突した」

「！！」

「次に気がついたときには、前に座ってた親父も、御袋も、妹も、
みんな動かなくなっていた……
俺の体には三人の血がべつとりついていたよ……そして、後に三人
の死亡が確認され、病院の一室で当たった運転手が泣いて俺に謝っ
てきたが……俺は上の空だった」

プレシアは俺の過去の話に驚き、沈痛な面持ちで話を聞いていた

「俺はその男を心底恨んだ
だが、世界は俺からそれさえも奪った！
分かるか？その運転手はそれから二日後に被害者及び遺族の皆様
に謝罪しますと言つ遺書を書いて自殺しやがったんだ！」

プレシアは目を見開いていた

それと同時に、怒りや狂気に染まっていたその瞳から同情のような
色が見えた

「世界は俺から恨む相手すら奪いやがった！
だけどな……俺はそれでも世界で生きていくことを選んだ……なぜ
か分かるか？」

プレシアは黙って首を横に振る

つまり答えは「No」と言う事だった

まあ、その理由が分かっていたらこんなことはしないだろうしな

「俺は三人が残してくれた命だからだ！

幸か不幸か俺は三人の屍の上で今生きている……三人の分まで、死んでいった者の分まで生き残ったやつは生きなきゃいけない！

親父が、御袋が、生み、残してくれた命を俺は精一杯使わなきゃいけない！

俺より小さかった妹、あいつが生きてればできたであろう可能性の分まで、俺は生きなきゃいけないんだ！」

言っておくがこれは実話だ

もちろん生前の俺が体験した事だ

今の俺が体験したことじゃない……だが、それでも時々夢にみる

プレシアは足を震わせ下を向いていた

少しばかりは俺の話も効果ありか？

「プレシア！お前は生きているんだろう！

例え病魔に侵されていようと、お前はまだ生きているんだろう！」

「私は…私は…生きて……」

プレシアの声は涙で震えていた

「失った過去はもう戻ってこない……」

過去が戻ってこないなら、俺はせめて明日がほしい！

だから足掻き続けてるんだよ……なあ！

まだ十年も生きてない餓鬼がこんなに必死に明日を求めてるって言うのに、その何倍も生きてきたお前がいつまでも明日を見ずに過去に縛られてるってのは……いったいどう言う事だ！！」

俺がその言葉を言った瞬間、プレシアは膝から崩れ落ちた

その目からは大量の涙があふれていた

「私は…私のやってきたことは間違いだったの？

でも……アリシアの居ない未来なんて、私には考えられない！」

声を震わせながら、プレシアは顔を振る

彼女の中にある悲しみなどの負の感情が、ゆっくりと顔を出していた

「その為にあの子が居るんじゃないか……」

「無理よ…あの子はアリシアじゃない…違うもの……」

肩に手を置いた俺にそう答えたプレシア

俺は彼女の肩を両手で持ち、その顔を上げさせた

「当然だプレシア、彼女はアリシア・テストロッサじゃない！フェイト・テストロッサなんだ！

お前の娘なんだよ！」

プレシアは涙に濡れる瞳で俺を見ている

「ダメよ……ダメなのよ……フェイトの事を考えると、頭が怒りで埋め尽くされていく……あの子を愛することができないのよ!」

「ならばもう一度聞くんが、なぜ彼女の感情を消さない?なぜいまだに衣服を与えている?答えは簡単だ……お前の中に、しっかりあるんだよ……あの子を、フェイト・テストロッサを愛しいと思う気持ち……」

俺の言葉にプレシアは「ハッ」と何かに気づいたような表情になった

「でも……」

それでもまだ、プレシアの中ではうまく整理ができないようだった

「なあプレシア……親子の絆ってなんだと思う?」

「え?」

突然の問いに、プレシアは答えではなく問いで返した

俺は浅く息を吐くと、プレシアの目を見て話した

「DNAが親子の絆だって言うなら、俺の知り合いにDNA上、血はつながってなくても、実の親子以上の関係で結ばれている家庭もある

ならば、産まれた時に母と子を繋いでいるへその緒がそれか?だが自然の中では、それを産まれて来た子の養分とする為に食べさせる動物も居るらしい

だがその動物はへその緒がなくてもしっかりと子を守り、独り立ち

するまで育て上げる……

ならばいったい親子の絆とはなんなんだ？」

再び俺はプレシアの問いかけた

今度はプレシアも考えていたようだが、その答えが見つからないでいた

「ありきたりな答えになるかも知れないが、それは愛だ
まったく目に見えない、本当にあるのかどうかと言う不確定な物だが、確かに存在するもの……それが愛だ」

「あい……」

プレシアは俺のほうを見ながら、ぽつりとつぶやいた

「お前は確かにアリシアを愛していたのだろう……それは事実だ
そしてまたあの子の事も、お前は愛しているはずだ……」

「なぜ……そう言い切れるの？」

プレシアも徐々に反論の色が薄くなってきた

つまり、自分の中でのテストロッサへの愛を認めてきていると言う証拠なのだ

「ずいぶん昔になるか……アリシアがまだ生きていたころ
彼女はお前にこんなお願いをしたはずだ……妹が欲しいとな」

「……」

プレシアの中の、長い間忘却のかなたへ消えていた記憶が蘇ってきていた

「俺はその時のお前にその記憶があつたかは分からないが、お前がフェイト・テストロッサをアリシアそっくりに産み出したのは、アリシアのクローンとして産み出そうとしただけじゃない

お前の頭の隅に残っていたそのアリシアとの約束が、彼女を産み出す引き金になったのかもしれない…つまり、彼女はアリシアが欲していた妹そのものだ……

プレシア…お前は今のまま行けば、アリシアの最後の願いすら自分で壊してしまうことになるんだぞ？」

俺の言葉の途中から、プレシアはわなわなと震えだし、最後にはまた大粒の涙を流していた

「フェイト…フェイト……ごめんなさい……ごめんなさい」

泣きながら、プレシアは何度も何度もフェイトに謝っていた

「いまさら母親面なんて……むしが良すぎるわよね私…きっとあの子は私を憎んでる
いくら謝っても……」

プレシアは今度は後悔の念に襲われていた

しかしまあ、これがこの人の実態なんだ

もっとはやく素直になっていれば……

そんなことを思っていたときだ

『連夜さん？聞こえますか？アテネです』

アテネから念話が入った

『どうした？アテネ』

『なんでも、フェイトさんがどうしてもプレシアさんに渡したものがあらしいです』

いまからそちらに物を転送するので、渡してもらえませんか？』

それがどう言った物か、俺は分からなかったが、とにかくアテネに『Go』サインを出した

瞬く間にそれは送られてきた

送られてきたのは長方形の箱だった

封を破らないように中身を覗いた俺は……

「ほう」

と声を漏らし、その箱をプレシアに見せた

「その箱は……なに？」

「あの子がどうしてもお前に渡したいと言っていた物だ……今転送されてきた
中身を見てみる」

フェイトからの物だと聞いて少しびくびくしながらも、その箱を開けたプレシア

その箱の中には……

「これは……」

きれいに並べられた三つのケーキが並んでいた

「二つがテストロッサとアルフの分……あと一個余るよな？
それは誰の分だと思う？」

プレシアはゆっくりと震える手で自分を指差した

「わ、私の？」

「御明察だ」

俺が笑いながら答えてやると、プレシアは再び涙を流した

しかし、その表情には今までの涙では無かった、喜びの表情が現れていた

「さてと、じゃあ俺は帰るぞ？」

ベルトからメモリを取り、もとの少年大道連夜の姿へと戻った俺は、そのままゆっくり転移をしようとした

「まっ……連夜」

少し照れくさそうに俺の名を呼んだプレシア

その手には、二つ折にされた紙が握られていた

「なんだ？プレシア……」

「これを……フェイトに渡して欲しいの……」

俺はその紙を受け取り、ジャケットの内側のポケットにその紙を入れた

「中身を……確認しないの？」

「前のお前なら確認していたが、今のお前にはそれは必要ないじゃあなプレシア……また会おう」

プレシアは「また」と言って手を振った

俺が徐々に転移の光に包まれているときだった

『ありがとう……ママを救ってくれて』

後ろで眠っているはずのアリシアの声が聞こえた

『おやすいごようだよアリシア……お前も必ず救ってやる……もう少しだけ待ってろよ』

『えっ？』

そのアリシアの声が聞こえると同時に、俺の体は転移した

次の瞬間には、俺は自分の部屋に立っていた

第十六話（後書き）

次はフェイト回ですね

お家に上がり込む予定です

次回楽しみに

第十七話（前書き）

遅くなりまして申し訳ありません

第十七話です

お楽しみください

第十七話

「おかえりなさい、連夜さん」

服を着替え、部屋からでた俺を笑顔のアテネが出迎えた

「ただいまアテネ……テストロッサはどうだった？」

「大丈夫です」

そこまで深い傷は無かったので、跡は残らないでしょう
今はゆっくり眠ってますよ

アフルさんが側についています」

そう言われてほっと一安心だった

まだ小さな体にあれほどの事をやったからな……一生傷なんかな
ったらそれこそ大変だったろうしな

「ありがとうアテネ」

さて、じゃあアルフをつれてショッピングに行ってくるよ」

「はい……つてええ!!」

アテネはわかり易いくらいに驚いた

「テストロッサは完璧に栄養失調だ

まあそれにはアルフも責任がある……大方飯の作り方も食材の選び
方もわからねえだろうから俺が教えてやるんだよ

アテネには悪いがテストロッサ達の部屋の掃除を頼む

たぶんろくにしてない筈だからな」

アテネは少し渋い顔をしていたが、俺の説明を聞き、まあそういうことならと納得してくれた

「アテネ、俺はちゃんと覚えてるぞ……」

アテネがその言葉に困った顔をする

何が覚えているのかわからない様子だった

「約束だよ……一週間お前の抱き枕になるって約束…忘れてねえかな」

自分でも少し顔が赤くなりながらそう言ったが、アテネのほうはその約束を思い出して色々考えたのか、トマトのように顔が真っ赤になっていた

「なんであたいが……」

俺と一緒に街中を歩きながら、アルフが愚痴をもらしていた

なかなかこねたもんだから、説得するのにかなり時間をつかつちまった

テストロッサはまだ寝ていたのでそのままにしてやることにした

何も無理に呼ぶ必要はないからな

プレシアに頼まれていた紙もまだ渡していない

「まだなのかい？そのスーパーってのは……」

「ごたごた言わずに付いて来い……」

テストロッサの為に食材を買いに行ってるんだろっが……」

ブーブーと文句を言うアルフ、彼女の言い分は認識阻害かけて空を飛べば良いだろうにと言う考えなのだ

やれやれこれだから魔法使うやつは……

「なんか言ったかい？」

「何にも……ったく、黙ってりやそこそこ美人なのによ」

アルフが噛み付いてきそうだったのでそう言ってやると、途端に様子がおかしくなった

「べ、別にあんたに言われたって……そんな…嬉しくないね！」

などと頬を赤らめながら言うアルフ

「ほお、今流行のツンデレか？」

「ツ……ツンデレ？ってなんだい？」

なぜか興味深げなアルフ

おいおい、どこに興味を持ってた？

とツツコミたくなる衝動を抑えて、ここは丁寧に説明してやった

「ツンデレってのは、好きな人に対してみんなの前ではツンケンして冷たい態度をとるくせに、二人つきりになったりすると途端にでれでれするキャラや性格の事だ」

「すっ！ベベ、別にあんたのことなんて……すす好きでも何でもなさ！」

顔が真っ赤なアルフ

あれ？俺まさかこいつにまでフラグ立てた？

いつ？どこで？俺なにやらかしてんだ？

と、考えている間に、俺達は目的のスーパーに到着した

「へえ、人が大勢居るじゃないか」

その様子を見ながらアルフは素直に驚いていた

「ここには食品だけじゃなくて日用品なんかも売ってるからな
ちよつどいい、そこんとも回っていくか」

俺はアルフの手を掴み、そのままスーパーの中へ入っていくのだった

「え〜つと、これとこれとこれ…それと…」

食品売り場に着いた俺達は、早速色々な食材を、手に持っている力ゴに入れていった

「あんだ、いっぱい入れてるけど……どれが何だか見てやってるのかい？」

時々俺が食材を物色していた様子を見ていたアルフは、それが気になったのかそんな事を言ってきた

まあ見てるっちゃ見てるんだが……

今後の事も考えていちよう教えておくか

「アルフ、これとこれ持ってみるよ」

そう言つて彼女に渡したのは同じ値段、同じ形をした二つのキャベツだ

アルフは渡された物を見て、首を傾げていた

「なんだいこれ？」

「キャベツだ」

俺が当たり前のように言つと、「そんな事は分かってるよ！」と言われてしまった

「あたいが聞いているのはなんでこの二つを渡したのかって事だよ！」

なんだそんな事が……

名前を聞くのはおかしいかと思ったがまあアルフだから知らないかな？と思って聞いてみたのだが……

「あんた、さりげにいま失礼な事考えたね」

「いや、気のせいだ……」

さてアルフ、そのキャベツ何だが……持ってみて何か気付かないか？」

俺はそう言って彼女が両手で持っているキャベツを指差す

彼女は「ん？」とした表情をして考えた

「ん……………おっ？」

何かに気がついたのか、アルフは目を開けて二つのキャベツをじつと見つめた

「分かった！こっちのキャベツの方がちよつと重いよ！」

そう言って左手に乗っているキャベツを上げるアルフ

所要時間は約五分か……初めてにしては上出来か

いちよう俺も調べたが、アルフの言った答えと一緒にだったので大丈夫だと判断した

「でもそれが何の意味があるんだい？」

アルフはやや困った顔でそう言った

まあそう言えばそうか

「同じ形なのにどちらかの方が重いって事は、そっちのほうが中身が詰まってるって事だ

一緒に値段で買うなら絶対そっちのほうが得だろう？」

貧乏くさいかもしれないが、ちよつとでも安い値段で量と美味しい物を買う

それが庶民の知恵なんだよ」

俺が自信ありげに力説すると、アルフは「へえ」と言っただけで少し感心した様子だった

「さて……テストロッサは起きているか？」

あれから食材、日用品を買った俺達は、ゆっくり自宅に帰ってきたと言っただけ、テストロッサの家に帰ってきたのだが……

「あらお帰りなさい

フェイトさんならまだ寝てますよ」

帰ってきた俺達をアテネが迎えてくれた

買い物に行っている間かなりの掃除をしてくれたのか、まるで新築

のように綺麗になっていた

「ゴミも大方纏めましたし、後は出せば良いだけですよ」

そう言つて「ふう」と息をついて額を拭うアテネ

いやはやこいつにはかなり世話になりっぱなしだな

「ありがとうアテネ

今から晩飯を作る

ちよつと休んでおいてくれ

おいアルフ、作り方教えるから来い」

「あいよ」

俺達はそのまま調理場まで向かった

幸い調理器具は揃っていた

と言つより揃つていなかったら大変なことになっていた……

「で、なにを作るんだい？」

目の前に買つてきた材料を置いたアルフがそう聞いた

因みに置いてある食材は、卵とお米、醤油、塩こしょうだけである

「まあとりあえずお前達は単純な栄養失調だから、今日はたらふく炭水化物を食べる

だから作るのは焼き飯だ」

コンロの上に買ってきた少し大きめの普通のフライパンを置く
焼き飯用ではないのは、単純に使い回し出来るように考えてだ
少々作りにくいかもしれないが、慣れれば簡単だ

「さて、手順を教えながらやってくからちゃんと覚えろよ？
テストロッサの為だろ？」

「わ、わかったよ」

そうして俺はコンロに火を入れ、実際に焼き飯を作っていた

フエイトside

此処は……どこだろう

確か、お母さんにジュエルシードの報告をしに行ったら……怒られ
て…

そしたらアルフと連夜が助けてくれて……

連夜が………そうだ……

連夜があの人だったんだ

『俺の名は………エターナルだ………』

エターナル……何度も私と戦って……でもあの時は……

あの時は私を助けてくれた…

その後私どうしたんだろう……

アルフに抱えられながら意識が遠くなっていって……

「んん……」

ゆっくり体を動かしてみようっと思ったらちょっと痛かった

あたりを見渡すと此処が自分の部屋だと言っのが分かった

体には綺麗に包帯が巻かれている

「……！」

………「！」

「………！」

扉の向こうから誰かが騒いでる

それに、なんだか少し良い匂いがする

『ガラ』と扉を開ける

するとそこには、並んで料理を作っている

連夜とアルフが居た……

「あとはこれを皿に盛るだけだよ」

「へえゝ案外簡単なんだねえ」

そんな二人の姿を見ると、何故か胸が苦しくなっている自分が居た……

s i d e o u t

「さて、後はテストロッサをと………」

皿に焼き飯を盛りながらフェイトが寝ている部屋を見る

しかし、その視線の先には頬を膨らませてこっちを見ているフェイトが居た

寝ていると言っていたから姿も見えていなかったが、体に巻かれた包帯が少し痛々しかった

どうやら匂いに釣られて起きてしまったようだった

まあ起こす手間が省けて良かったがな

「ど、どうしたんだいフェイトゝなんか怒ってないかい？」

フェイトの表情におろおろしてるアルフ

それを遠目から見ている俺とアテネ

そんな立ち位置がなぜかとても不思議に思えて、そしてとても面白いことに思えた

「な、なに笑ってんだい連夜！

あんたからも何とか言っておくれよ！」

「連夜って呼んでる……」

さらに「じと」つとした目でアルフを見るフェイト

さすがに可哀相になってきたので助け舟を出すことにした

「テストロッサ……よく寝たな

アルフとちよつと晩飯を作ってたんだ

準備はもうできてるから食おうぜ」

「え？あ……うん

食べるよ……」

フェイトはゆっくり頷くと、そのままテーブルに向かっていった

「おいし」

「ほんとおいしいよ連夜！あんた凄いねえ」

焼き飯を頬張りながらとても嬉しそうな表情を見せるアルフとフェイト

そんなに笑顔で言ってもらえると、作ったこちらとしてもなかなか嬉しいものだ

「これから一週間、朝昼晩とご飯の作り方を教えてやる
今日のそれはアルフに教えておいたし、それにメモも作っておいたから、テストロツサもちゃんと覚えるんだぞ？」

「むぐ……わかったよ連夜」

焼き飯を頬張りながらそう言ったフェイト

食べるの必死といった様子だ

買い物中に聞いた話では、最近の食事と呼べる食事は殆どしておらず、軽く栄養失調気味になっていたらしい

アルフは使い魔の為、食事は形式的なもので、主人から送られる魔力をエネルギーにしているから必要ないのだが、主人であるフェイトは健全な人間の為に、食事をとらないと危険なのだ

実質彼女の腕は初めて会った当初よりも、痩せ細っており、少し頬もやつれているような気がした

急に多量な食事を食べさせてもよくないのだが、ともかく彼女は食事を軽んじている傾向があるのでその考えを改めさせることから始めたのだ

食事を楽しいものだと感じれば、彼女も食事を積極的に行いたいと思うようになるかもしれない

その為にも、こう言う食事と会話というのは貴重なのだ

「そうだ、テストロッサ……お前に渡しておかなきゃいけない物がある」

食事を終え、食器などをアテネとアルフが洗っているときに、俺はプレシアから預かっていた物の事を思い出し、それを今フェイトに渡すことにした

俺は胸ポケットから綺麗に折りたたまれた紙を取り出し、それをフェイトに手渡した

「これは？」

戸惑った様子で俺に聞いてきたフェイト

俺は素直に「お前の母さんから渡すように頼まれた」と伝えた

すると、テストロッサはとても驚いた表情を見せ、アルフが俺に詰め寄ってきた

「連夜！あんた……その中身みたのかい？」

「見てない……」

「なんで！」と言おうとしたアルフの口をふさぐ

「以前のプレシアが渡してきた物なら中身は拝見したが、今のあいっなら大丈夫だよ……俺がしっかりO H A N A S H Iしたか

らな……

テストロッサ……中身見てみる

大丈夫……お前の母さんはもうお前に酷い事なんかしないからさ」

俺が笑顔でそう言つてやると、アルフもゆっくり俺から離れ、フェイトを見守つた

フェイトは恐る恐る綺麗に折り畳まれた紙を開けていく

そしてすべてを広げ終わり、その中身を見た瞬間、フェイトの瞳から涙が溢れた

「ど、どうしたんだいフェイト!!」

やっぱり何か嫌なことでも書かれていたのかい!？」

慌てて駆け寄るアルフ、フェイトはゆっくりとその紙を見せた

俺も横からその紙を見る

するとそこには、二行だけ文が書かれていた

『フェイト……ケーキありがとう

美味しかったわ……』

それは、他人から見れば簡潔に書かれた手紙かもしれない

だが、このフェイトと言う少女には、やっともらった母からの形ある愛なのだ

決して褒められたことのない彼女が初めて褒められた

「ぐす……フェイトお……」

使い魔としてフェイトと精神的にリンクしているアルフも、フェイトから伝わる感情に、涙をながしていた

「うう……うう……」

泣き崩れるフェイトを見つめる俺は、その嬉しそうな彼女の表情を見て少しやってよかったと思うのだった

外野 side

あれからフェイトの家を後にし、自分の部屋に戻った連夜達

今はアテネとの約束を実行しており、連夜はアテネの抱き枕となっていた

「良かったですね……フェイトさん、嬉しそうでしたよ」

まだ9歳の体である連夜をぎゅっと抱きしめるアテネ

連夜もそんなアテネの背中に手を回していた

「そうだな……でも、俺は褒められるようなことはしてないよ……」

アテネの胸に顔をうずめながら、連夜はそう洩らした

「褒められる……とは、どういうことですか？」

連夜を見つめて、アテネは不思議そうな表情をした

なぜそんなことをいうのかが少し理解できなかったが、第一に連夜がそんなことをいったのが驚いていた

「俺がやったのは確かに良い事なのかも知れない……でもな、俺がやったのは歴史を捻じ曲げるってことだ

この世界にあったはずの歴史の流れを壊してしまった……自分がこんな歴史は嫌だって言って勝手に世界を作り変えようとしている」

アテネはその言葉を聞いて、「ならばもう世界の介入は止めますか？」と聞こうとした

しかし、連夜はアテネの目を見てしっかりと口調で言った

「でもな……俺は後悔はしない……」

それに、この行動を止めようとは思わない

俺は一度守りたい人達を守れなかった……でも今は守れる力があるだから……俺はこの行動を止めない……自分勝手だと言われようと、俺はこの世界の決められた運命を破壊する……必ずだ……必ず……」

「ふふ……分かりましたよ

なら、私もあなたを支えます……あなたがたとえ孤独になったとしても、私だけは……あなたの側にいますから……」

抱きしめる力を少し強めたアテネ

連夜はどうやら眠ってしまったようだ

「スー、スー、スー、スー」

いつもの彼では決して見せないような、そんな安らかな表情だった

「大丈夫……あなたが周りの人達みんなを守るなら、私はあなたを守ります……ずっと側にいるよ………」

……お兄ちゃん」

その声は連夜には聞こえていない

彼女は最後にうつすらと瞳から涙をこぼし、連夜にやさしく微笑んで、眠りについた

side
out

第十七話（後書き）

はい…

えゝ…意外な事実発覚っていう

次回は遂に、ハラオンさんが登場します

お楽しみください

第十八話（前書き）

皆様お久しぶりの黒のカリスマです

遂にあの人達が登場です

そして、連夜の正体が……

どうぞお楽しみください

第十八話

あれから数日の時間が流れた

フェイトやアルフに料理を教えたりする日々の中、実ははやてに勉強を教えたりもしている

はやての件に関してはつい最近のことで、週に二、三回勉強を教えている

フェイトやアルフ、はやても飲み込みが早く、教えたことはすぐに吸収していった

フェイト達も既に和食から洋食、中華など様々な料理のバリエーションを持っており、はやても同じ学年の勉強レベルは完璧にマスターしていた

ジュエルシードの件に関しても、なのはやフェイトは互いに激突しつつも、互いを高めあい、かなりの数が集まっていた

むろん、俺も戦闘に介入している

フェイトは俺の正体を知っていながら、敢えて俺の名を呼ばないでいてくれた

「今まで隠してたってことは、他にも知られると困る人がいるんじゃないよ？」と気を利かせてくれていているらしい

だが、物語もそろそろ終盤だ

なのは原作通りにアリサと喧嘩したらしい

アテネにそう教えてもらった

そして、今日はついにあの日を迎えたわけだ……

「ついに来た……と言ったところですかね？」

「ああ……そうだな」

遠くのほうで強力な魔力の反応が感じられた

そして直後に起きた魔力の奔流

原作通り、ジュエルシードは暴走し、巨大な木の化け物となったらしい

そしてやつが現れたと言う事は……

「そろそろ、管理局の奴等が現れる……か」

遠くで光る桃色の魔力と金色の魔力

その光を見ながら、俺はこれから起こるであろうことを考えた

なのはに正体を明かす

今までずっと逃げてきたこの事から、俺は向き合わなければならな
いところまで来ていたのだ

「連夜さん……大丈夫ですか？」

心配そうに人形型になったアテネが俺の顔を覗き込む

俺は「大丈夫だ」と言っ て頭をなでた

いつまでも逃げるわけにはいかない

それに、俺はもう決めたんだ……自分の大事な人達は自分で守ると

……

「変身……」

エターナルメモリを起動させ、現れたロストドライバーに挿し込み、
メモリスロットを右に倒す

『E t e r n a l ! ! 』

直後、白く輝く粒子が俺の体を包み、変身を完了させる

が、その姿は未だにレッドフレアのままだった

俺は再び彼女達が戦っている場所に目を向ける

右手に着けているブレスレットのジュエルシードが青々と光っている

今回ばかりは、その光がどこか不気味に見えた

「アテネ……転移だ。行くぞ！」

「了解です！連夜さん」

転移魔法なんかは距離がどれほど離れていようとすぐに転移は終了する

次に俺の前に現れたのは、こちらに迫る一本の蔓の鞭だった

「チッ！」

舌打ちをしてその場を飛びのく

『バチン』と音を立てて地面を陥没させた鞭は、しなって再び俺に向かってきた

「フレイムランス……」

俺はその鞭に向かって手を翳し、炎の矢を発射する

矢はまっすぐに鞭に直撃し、そのまま焼き切った

『ギヤアアア！』

木の化け物は苦痛の叫びを上げ、その顔らしきものをこちらに向けた
そのことでどうやらなのは達も俺の存在に気づいたらしい

二箇所から「「あなたは！！」」と言う声が聞こえた

フェイトは俺と顔を見合わせて小さく頷いて見せるだけだったが、

なのはこんな時にも質問をしてこようとした

「白い魔導士よ……話は後にしよう
今は目の前のこいつを……」

と、最後まで俺が言う前に、俺の体に化け物の鞭が直撃した

「ぐぁ！」

地面を削りながら止まった俺の体

ダメージ的な問題は皆無……不意を衝かれたとはいえちゃんとガードはしていたようだった

「やってくれるじゃないか……化け物！」

俺は軽く大地を蹴って化け物に近づき、足下の根っこの部分に手を向けた

「ウインドカッター！」

瞬間、三日月状の風で生成された刃が化け物の根っこの一本を切り裂く

『ギヤアアアアアアア！』

化け物は再び悲鳴を上げ、こちらに鞭を放ってくる

「同じ手を二度も食らうか！ロックハンマー！」

拳を握り締め、その周りに岩や土などを集めて凝縮し、ハンマーを作り出した

「フン！」

そのまま向かってくる鞭にハンマーを振り下ろす

ハンマーは衝撃で砕け散ったが、それと同時に鞭も千切れていた

「二人とも……止めを刺すなら今だぞ？」

「了解！」

「わ、分かったなの！」

俺の指示に二人は自分の前に魔法陣を展開し、魔力を収縮させていく

「デイベイン……バスター……！」

「サンダーレイジー……！」

なのはは桃色の光線を、フェイトは雷の光線を放ち、木の化け物は木っ端微塵に弾け飛んだ

何も此処まで高威力の攻撃をしるとは言っていないのだが……

まあ良しでしょう

さて、俺の前には暴走の収まったジュエルシードがある

そのジュエルシードを挟むようにして互いに睨み合うのはとフェイト

もはや恒例となったこの光景

俺はジュエルシードを掴み、二人の間に立つ

たとえこの次に待っている事を分かっているとも……

「さあ、このジュエルシードを賭けて戦え……よい」

二人が臨戦態勢をとって身を屈める

近くには互いに睨み合うアルフとユーノもいる

「始め!!」

俺が戦いの開始を宣言すると同時に、なのはとフェイトは飛び上がり、お互いのデバイスを振りかぶる

まさに激突が始まろうとした時だった

「ストップだ！此処での戦闘は危険すぎる！
時空管理局 執務官のクロノ・ハラオンだ!!」

やはりと言うか何というか、原作通り、二人のデバイスを握り、戦いを止めたクロノが現れた

「!!」

驚く二人にクロノは淡々と告げる

「とりあえず戦いを止めるんだ
話は後で……」

「その必要はない!!」

クロノの背後に周りこんだ俺は、そう言って彼に殺気を放った

「なっ!!」

クロノの注意が一瞬こちらに向く

その隙に、フェイトはバルディッシュをクロノから奪還した

「しまっ……」

「お前の相手はこっちだ!!」

フェイトに向かった意識を再び俺が前に出ること此方に向けさせる

「どけ!! ステインガーレイ!!」

クロノが高速な光の弾丸を発射した

「ぐっ!!」

直撃を受けた俺はそのまま地上に墜落した

「……!! れっ……」

「早く行け！ぐずぐずするな！」

危つく俺の名前を言ってしまいそうになるフェイトに叫ぶ

「フェイト！早く！」

アルフがフェイトを抱えて転移した

俺はそれを確認し、ゆつくりと構えを解いた

「何のつもりだ？」

目を細め、俺を怪しむように見るクロノ

さっきまで戦う意欲を見せていただけに、俺のこの行動は明らかに
不審なものだった

「先程までの無礼を許してくれ……こちらとしてはもう戦う気はな
い……」

両手を挙げて降伏の意を見せる俺

「ふざけるな！いったい何が目的だ！？」

まあクロノの言葉はもつともなことだが……

『連夜さん…フェイトさん達、無事に転移完了しましたよ』

アテネから念話の秘匿回線が入った

『了解した……お前もこちらに戻ってきてくれ』

『了解です』

改めて肩の荷が降りた俺は、再びクロノに視線を向ける

「俺は自分の友人を守ろうとしたただけだ……

先にこちらに仕掛けてきたのはそちらだし、こちらには十分正当防衛の権利があるはずだ

友人はもう無事に転移したみたいだし、俺としてはもう戦闘の必要はないと判断した……そちらがまだ戦闘を続けるならがそれも構わんが……」

俺はゆっくりと自分の魔力を解放する

とたんに周囲にEXランクの魔力が溢れ出す

クロノも驚愕の表情を浮かべていた

「なっなんてでたらめな魔力だ!」

「俺はあんたよりも遥かに強いぞ?

それでもやるなら……かかってこいよ?」

最後に手招きをして挑発をする俺

さすがにこれにはクロノも頭にきたのか、デバイスを構えてこちらに向かってこようとした

だが……

「やめなさい……」

突如空中にモニターが映し出され、そのモニターに美しい緑髪の女性が映っていた

「やめなさいクロノ執務官……あなたが戦っても勝てる見込みはゼロよ」

クロノに向かってそう言った女性

厳しい目でそう言ったその女性に、クロノは少し顔を歪めたが、渋々承諾した

「了解です……母さ……艦長」

すこし沈んだ表情でそう言ったクロノは、ゆっくりと地上に降り立った

その直後、俺達の頭上に巨大な戦艦が出現した

「ごめんなさいね……この子も悪気はないのだけれども……」

現れた戦艦とこの女性……戦艦はアースラ、女性の名前はリンディ艦長だというのは直ぐに理解できた

「おやおや、こんな素敵な女性に頼まれたなら、喜んで戦闘を中止するよ」

「あら、口が上手なのね」

冗談っぽくそう言った艦長に、俺はほおと漏らして言葉を続けた

「口を褒められたのは初めてだな……なんせ自堕落な性格なもんでな……」

仮面を付けているため相手には見えないだろうが、俺は皮肉った笑みを浮かべていた

「そちらが良ければこの艦に乗艦してくれると嬉しいのだけでも……貴方達の話も少し聞きたいわ」

リンディ艦長はにこやかな笑みを浮かべてそう言った

俺はゆっくりとなのはに向かって指を指した

「え？」

パチクリと目を丸くするのは

「この白い魔道士が乗艦するならば、俺も一緒に乗艦しよう」

「ふええええ！？」

直後になのはものすごく驚いた声がその場に響く

「なら、あなたに聞くわね……乗艦してくれるかしら？」

モニターがなのはの方向に向き、リンディ艦長がニコリと微笑みか

ける

「ふえ？えっと……その……」

突然のことに戸惑うなのは、ユーノが助け舟を出した

『なのは、この人達は管理局の人達だし、大丈夫だよ』

やさしく念話でそう伝えたユーノのに安心してか、なのはは「ユーノ君がそう言うなら」と言って乗艦する意向を見せた

すると、リンディ艦長が映るモニターがまた俺の方向を向いた

「さて、あの子は乗艦すると言ってくれたわ……あなたも乗艦すると言う事で良いのかしら？」

その微笑みは崩れることなくこちらに向けられている

だが、俺は知っている

あんたがその笑顔の裏で幾重の策を張り巡らせているのか……だからこそ俺ははつきり言った

「それで構わない……」と

クロノがまだ何か言おうとしたが、リンディ艦長がそれを黙らせた

「じゃあ、貴方達を疑っている訳では無いんだけども、そのバリアジャケットを解除してもらえるかしら？」

乗艦の仕方はクロノが教えてくれるわ

気を悪くしないでね……いちよう規則でそうなってるから……」

遂に来たか……内心そんな事を思う

遂に、あいつに正体を晒すことになる

横目でなのはを見ると、彼女は既にバリアジャケットを解除し、普段の姿に戻っていた

後は俺だけだ……リンディ艦長、クロノ、なのは、ユーノの視線が一点にこちらに集まる

「ふう……」と息をついて空を見上げる

「了解した……」

それだけ言つて、俺は右に倒していたメモリスロットを元に戻し、メモリを抜いた

『キュウウウウウン……』

メモリが抜かれた音が響くとともに、まるで風に吹かれた落ち葉のように、俺の体を包んでいた白い鎧が粒子のようになって消えていく

身長も元に戻り、俺の変身は解除された

前のモニターのリンディ艦長も、クロノもみな驚いた声を出した

だが……

「……へ？」

誰よりも驚いた声を出した少女がいた

なのはである

「うそ…そんな…なんで…」

目の前の光景が信じられないと言った表情で俺を見ているなのは……

俺は見上げていた空からゆっくりと視線をなのはに移し、静かにこ
う言った

「よお……一年半ぶりだな……元気そうだなによりだぜ……高町」

「連夜……君」

これが、俺となのはの一年半ぶりの再会だった……

第十八話（後書き）

此処までが長かった……

今回はジュエルシードを最後まで集める所まで書きたいです

御期待ください

第十九話（前書き）

遅くなりました第十九話です

お楽しみください

第十九話

クロノSide

アースラに乗艦した僕は、まずフェレットの姿でいた子に、元の姿に戻るように伝えた

「あ、分かりました」

彼はそう言っただけで直ぐに元の姿に戻る

彼が先ほどまで肩に乗っていた少女は少し驚いた様子を見せたが、心ここにあらずと言った様子で、直ぐに別のところへ視線を向けた

「そう言えば、なのはにはこの姿は初めて見せたっけな……」

そう言っただけで彼は少し頭を掻いた

初めて見たのなら、もう少し大きなアクションをしてもいいものでは？と僕は思う

先程彼女達とはあったばかりだが、少なからず彼女に関してはこの子を人としては見ていなかったはずだ

それが突然人の姿になったなら尚のこと、もっと驚くはずなのだが……彼女の視線はずっと同じ方向に向けられていた

この三人の集団から一線引いた場所で僕達を見ている少年、と言っても僕も少年だが……

彼女はずっとあの少年を見つめている

あの白い仮面の戦士の正体があの少年だった

体格や声はまるっきり別人だ

だが、その体から溢れている魔力は間違いなく破格の量だろう

最低でもSクラスの魔力は常時流れ出している

確か、この船に名前を言っていたか……大道……連夜……

あの少女、なのはとはいったいどう言う関係なのか……

『クロノ君、艦長の準備ができたから、皆さんをこっちに案内して』

『了解だ、エイミー』

オペレーターのエイミーから念話でそんな連絡が入った為、僕は指示通り全員をその場所に案内しようとした

が……一人既にその場所に向かって歩き出そうとしていた人物がいた

大道連夜だ

「待て、いったいどこに行く気だ!？」

彼を呼び止めてそう言った

なのはやフェレットの少年は何事かと驚いているようだ

「エイミィから念話が入ったんだろ？場所の用意が出来たって……だからそこに向かおうとしてるだけさ」

彼は驚くべきことを言っていると理解しているのだろうか？

僕とエイミィの念話を傍受していたのか？個人回線で話していたはずなのに……

「なぜ……」と言う前に向こうから答えが返ってきた

「俺は秘匿回線以外は全部拾えるようになってんだよ……聞かれていいなら構わないが、聞かれてまずいことは全部秘匿で話すんだな……」

まあ、その気になれば秘匿でも傍受できるようにはなるけどな……」

そう言っただけは前に歩いていった

「ええと……その……」

「あちゃ〜」

なのはという少女は困った顔をしており、フェレットの少年は頭を抱えていた

「くっ！……行こう。ついて来てくれ」

早足で歩いて彼を追い抜き、そのまま前を歩いていく

「……………」

表情を一切変えず、彼は黙ってついて来ていた

Side Out

連夜Side

扉が開き、落ち着いた和室が広がる

盆栽や獅子おどしなどが置かれ、綺麗に畳が引かれた部屋に、なんとも不似合いなティーカップを持って座っている緑髪の女性……リンディ・ハラオウンがいた

「よく来てくれました……私はこのアースラの艦長、リンディ・ハラオンです。どうぞよろしく」

そう言つて笑顔を見せながら軽く会釈をするリンディ艦長

「こ、こちらこそ、はじめまして、高町なのはです」

「ユ、ユーノ・スクライアです」

慌てて自己紹介を始めるのはとユーノ

ただただ黙って見ていた俺に、リンディ艦長が優しく微笑んだ

その目には、俺にも自己紹介をしろと訴えかけているように見えた

気乗りはしないがしょうがない……

「えゝ、大道連夜です……以上」

頭も下げず、傍から見れば明らかに不遜な態度で俺は名乗った

クロノがすごい形相で睨んでいるが気にしない

直後にエイミイが部屋に入ってきた

「エイミイ・リミエッタでゝす。このアースラの管制官をしてまゝす」

「よろしくゝ」と言って頭を下げたエイミイ……この人は相変わらずテンション高いな……

「さて、じゃあ一通りの自己紹介も済んだし、事のあらましを教えちゃいけないかしら？」

見たところなのはさんは管理局に登録されている魔導師じゃなさそうだし、そんな子がどうして魔法を使っているのかってことをじっくりね？」

そう言っただけでリンディ艦長は事件の説明を求めた

ここは原作どおりにユーノが説明した

自身が遺跡の発掘を生業とするスクライアー族の出身で、自らが発掘した「ジュエルシード」が事故によって散らばってしまったこと

それに責任を感じ、独自にその回収を行っていたこと

こちらの世界でジュエルシードの封印に失敗して重傷を負ったところを俺と出会い、一命を取り留めたこと

その後の俺から紹介されてなのはと出会い、彼女に協力を申し出、「レイジングハート」を託したことなど、すべてを話した

「立派な考えだわ」

話を聞き終わったりリンディ艦長はそう言ってユーノを褒めた

「だが、同時に危険な行為でもある…もし彼がいなければ君は危険な状態になったんだからな…」

クロノはそう言ってユーノを咎めた

まあ、この場合は両者の言い分が正解と言えた

「じゃあ……私をユーノ君に教えたのは…連夜君だったの？」

話を聞き終えたなのはが恐る恐る俺に聞いてきた

先程からなのははなりやらビクビクしている

俺に対してかどうかは知らないが、様子がおかしかった

「そうだ……俺がユーノに高町を推薦した」

俺は淡々とそう告げた

「その理由は何かしら？」

リンディ艦長がこちらを見ながらそう質問してくる

「答える必要がない……」

俺はそう言っ て問いを却下した

「大道……おまえ……！」

クロノが我慢できないとばかりにこちらに向かおうとしてきたが、リンディ艦長が「やめなさい」とクロノを制した

「これ以降は管理局がこの任を引き継ぎます……ユーノ君はともかく、一般のなのはちゃんや大道君はもうこの件には関わらなくていいわよ」

優しい口調でそう言ったリンディ艦長

なのはは「え？」と驚いた表情をしていた

「一般人である君達を、これ以上危険な目に合わすわけにはいいかない……」

もとの普通の生活に戻るんだ……悪い話じゃない」

クロノが俺達を納得させようとそう言った

なのははうつたえているが、俺はまだ何も言わない

次の言葉……リンディ艦長の次の言葉を待っていた

「まあ、突然こんなことを言われても気持ちの整理がつかないと思うから、もう一度集会の場を設けましょう……そこで改めて貴方達には……」

俺はこの言葉を待っていた

彼女が最後まで言い切る前に、俺は口を挟んだ

「断る……」

直後、部屋の中に冷たい空気が流れた

「あの……」

リンディ艦長が何かを言おうとしたが、俺はそれを許さない

一気に捲し立てるように言葉を並べた

「俺達をもう無関係な人間にしたいと言うのなら、巻き込みたくないというのならなぜ再度の会合が必要になる？」

この場で関係ないと切り捨ててしまえばいいだけの話だ……それを
敢えてなぜだ？」

「ッ……」

リンディ艦長は痛い所を付かれたと言った顔をした

「答えられないなら俺から言ってやろうか？」

大人しく言ったらどうなんだ？この件に関しては戦力が必要なので
俺達にも協力してくださいってな！」

言い切った……言い切ってやった

「誰がそんなことを…」とクロノが噛み付きそうになる

「なら俺の思い過ごしか？リンディ艦長……あんたの言い方は俺にはそう聞こえたがな……間違っていたなら謝るが？」

全員の視線がリンディ艦長に集まる

艦長は今まで能面のように張り付いていた笑顔が消えていた

今までの計画すべてを見透かされたような驚愕の表情を浮かべていた

ここで俺の言葉を違うと言えば、艦長の体面は保たれるだろう……
だが、それはリンディ・ハラオンの人としてのプライドが許さなかった

「そう……ね

あなたの言つとおりよ……」

敗北を悟ったような表情でそう告げたリンディ艦長

それにクロノなどのメンバーは驚いていた

「母さん!？」

思わず言葉に出てしまったその言葉、だが、今のリンディ艦長にはそれを咎める気力もなかった

「ごめんなさい……私の立場上、こう言う事は言っではいけないのよ……」

だから、再度の集会を開くことで貴方達に自分から協力を言い出し
てもらおうと思っていたのよ……」

詫びながらもそう続けたリンディ艦長

「あ、あの……私、協力します！」

そんなこと、頼まれなくても喜んで協力します！」

なのははそう言ってリンディ艦長に頭を下げた

「なのはちゃん……」

艦長は「本当にありがとう」と告げて彼女に頭を下げた

「高町……お前、自分の言っていることを理解しているのか？」

俺はゆっくりとなのはに近づいた

「え？」

とこちらに顔を向けた瞬間、彼女の眼前に手を翳し、ファイヤーボ
ールを生成した

直後に、部屋の空気が緊迫したものに変わる

「大道！」

「動くな……！」

デバイスを持って俺に飛び掛ろうとしていたクロノ達を一喝する

「れ……連夜……君？」

なのはは目の前で生成されたファイヤーボールに驚きながらも、俺と視線を外さない

「高町……お前が今片足突っ込んでる魔法の世界はこう言う世界だこれが本当の戦いになれば、お前達がやっている非殺傷設定なんてのは生易しいもんだ

犯罪者などと戦うことになれば、そんな生易しい設定をしてくるやつなんていない……お前を殺す気で来るぞ

お前にできるのか？人を殺さずに戦いを終わらせることが……

お前に持てるのか？人を殺さずに倒す心構えてやつを……

それにな、非殺傷設定と言っても絶対に死なないわけじゃない……心臓部分に直接攻撃を当てりゃ死ぬ可能性だってあるんだぞ？」

「なあ？」とリンディ艦長達のほうに顔を向けると、艦長は悔しい表情をしながらも首を立てに振った

なのははそれに驚いていた

人を殺す心配がないとずっと思っていたのに人を殺してしまう可能性があると知ってしまったのだ

「お前はなにか勘違いをしているんじゃないか？

魔法を友達作りのための物だと思ってるのなら、魔導士なんて止めて普通の女の子に戻れ……俺が巻き込んだんだ……だからこれが最後通告だぞ？」

ファイヤーボールを消して、なのはを見つめる俺

言いたいことは言った

これで、なのはの考えが変わらないなら……そのときは俺が全力で彼女を守ろう……

S i d e O u t

なのはS i d e

どうして? どうしてなの?

どうして貴方は私にそんなことを言うの?

せっかく会えて嬉しかったのに……やっと謝れると思ったのに……どうして?

「どうして?」

「ん?」

気づいてたら声に出ていたみたいでした

でも関係ない……一度出てしまったら、止めようとしても止まりません

もう、止められません

「どうして連夜君はそんなこと言うの!?

せつかく会えたのに、なんでそんなこと言うの!?

連夜君はわかってない! 私のことなんて何も分かってないんだよ!!
連夜君なんて……連夜君なんて……」

そこから先が出てこなかった

ううん、出せなかった

私の前は涙でゆがんで見えた

でも、確かに見えた

連夜君が、またあのときの顔をしていた

一年半前、私が言った言葉を聞いたときの顔と、今の連夜君の表情
はまったく同じだった

悲しそうな、辛そうな、それを全部押し殺して笑っている

そんな表情だった

そして気づいちゃった

ああ、また私は傷つけてしまったんだと……

でも、連夜君が次に言った言葉は、そんな私には信じられないような
言葉でした

「友達……だからだよ……」

連夜君が私に言った言葉を、私は最初理解できませんでした……

「え？」

だから聞き返しちゃった

そしたら、連夜君は一度間を置いて、またはっきり言ってくれました

「友達だからだよ……」

お前が俺をどう思ってるかわからないが、俺は、高町と会ったあの日からずっとお前の友達だ……」

連夜君はまっすぐ私の目を見てそう言ってくれました……

私は、なんて言ったら良いのか分からない感情に襲われました

「それに、俺は約束したろ？」

お前の側を離れないって、お前をずっと守るってな……

前者のほうは無理になったが、それでも、俺はお前を守りたかった……だから仮面で素顔を隠し、お前の前に現れた……」

連夜君はさらに、「ふう」と息を吐いてからまた話し始めました

「まあ確かに、俺がこの世界に巻き込んだんだから、そもそも俺が高町にどうこう言える立場じゃなかったな……」

最後に苦笑いをして、連夜君は私に背を向けて、リンディさんのほうを向いていました

「艦長……俺は高町が貴方達に協力している間、貴方達に協力します……ただ、俺は管理局とは馴れ合うつもりはないので……あくまで民間の協力者ということにしておいてください」

連夜君はそれだけ言うと、まっすぐ出口の方向に向かって行きました

「待て！このアースラからの出方が分かるのか？」

クロノ君がそう言って連夜君を呼び止めます

でも、連夜君は「相棒が既に方法を調べ上げた」と言って聞きませんでした

その直後、連夜君の肩にお人形さんが現れた……あれは、初めて会ったときに連夜君の肩に乗ってたお人形だと思いました

「解析完了です。いつでも帰れますよ？」

笑顔でそう言う人形さんを見て、みんなが驚いてる

「に、人形が喋った……」

エイミイさんが目を輝かせながらそう言っていました

「ムウ！私は人形じゃありません！トオ！」

人形さんはむすつと脹れると、連夜君の肩から飛び降りました

すると、人形さんの体が光り輝いて、その輪郭が徐々に大きくなってきた、光が晴れたときには、人形さんは大人の女の人になってま

した

「ふう……私の名はアテネです

あの姿は魔力を消費しないようにするためにしているだけですから……間違つても人形なんかじゃありません！」

最後に「いゝ」と言つてアテネさんと連夜君は出口の扉を開けた

「あ……」

連夜君が行つちゃう……

私は手を伸ばします

でも、連夜君はどんどん遠ざかつて行きます

声も出したいのに、その声も出ません

そして、連夜君は扉の向こうに消えていきました

「……………ぐす」

駄目だと思つていても、もう止まりませんでした

「連夜君……………」

名前を呼んでも、今はその声は届きません

届かなくても呼んでしまいます

『名前を呼べ……そしたらもう俺達は友達だ』

あの時の笑顔の連夜君が頭に浮かび上がります

もう、私にあの笑顔は見せてくれないのかな？

そう思うと涙は止まりません

涙はただただ流れて、止まる気配はありません

「ごめんなさい……」

ポツリとつぶやいた言葉

その瞬間、連夜君のあの哀しそうな、辛そうな笑顔が浮かんできます

胸が締め付けられて、苦しい

「ごめんなさい……ごめんなさい……連夜君……ごめんなさい」

何度謝っても、あの人はもう目の前にいません

私はまた傷つけてしまったんです

私はただただ、その場で泣き崩れるしか出来ませんでした

side out

「……………くっ！」

突然、クロノが連夜の後を追って部屋を出た

エイミィがそれを追いかけようとしたが、リンディがそれを止めた

部屋を出て少し行ったところで、連夜とアテネは歩いていた

だが、突如その足を止めた

後ろから自分達を追ってくる人物に気づいたからだ

「ハア、ハア、ハア、ハア……………」

息を切らして立ち止まったクロノ

その姿を見ずに、連夜は口を開いた

「なんお用ですか？クロノ・ハラオン執務官……………」

一切感情の籠っていない声で連夜はそう言った

クロノはまだ肩で息をしていたが、一度咳払いして呼吸を整えて、
連夜に口を開いた

「クロノで良い…口調もため口で構わない…」

「ではクロノ…………俺になんのようだ？」

振り向かずにそう言った連夜にクロノは少し怯んだ

とても先程の高町なのはと同年の少年には思えなかったからだ…

だが、それでもクロノは口を動かした

「君は……彼女とは友達なんだろう？ならなぜあんな言い方をする！？」

連夜は振り向かない……だが、その返答は返した

「リンディ艦長に最初会ったときに言った筈だ…口は褒めれたことがないとな…」

こんな性格でね、思ったことははっきり言わないと気がすまないタイプなんだよ」

後ろ姿のためにその表情を確認することは出来ない

だが、クロノは内心連夜は自虐的に笑っているのでは？と思った

「だが、もっと言い方というものがあるだろう！？」

連夜は振り向かない

それがかえって不気味だった

「ほかの言い方？それをしたところで伝わる意味は一緒だろう……なら、ありのまま伝えたほうが分かり易くて良い…」

というより、そんなことを言うために俺を追いかけてきたのか？」

連夜は呆れたようにそう言った

クロノは怒りの声を出しそうになったが、それを飲み込んで連夜に問いかけた

「君は、彼女をあのスクリアの少年…ユーノと言ったか？
その子に紹介したといったな？なぜだ？なぜ彼女を巻き込む必要があった？」

その質問をしたとき、連夜の肩がわずかに動いた

アテネはそんな二人を黙って交互に見ている

どちらにも加勢する気はなさそうなので、クロノはアテネは放っておくことにした

「未来が……見えたんだよ」

「なに？」

クロノは思わず聞き返した

「完璧なものじゃない……断片的に、まるで映画の予告編のような感じで断片的にだが俺は未来を見ることが出来る…」

最初はそうだと気づいていなかった…夢の中で白い魔道士の少女が出てきてな…それが何回も同じ夢だったんだ

そして出会った、一年半前、その夢に出てきた少女そっくりの女の子とな……」

「それが、あのなのはだったと？」

クロノの問いに連夜はそうだと返した

「俺はそのころから魔法については知ってた
そして、俺はこの子と会ったのは偶然じゃないと思った
んで気づいてしまったのさ……この子は魔法なんかとはまったく関係ない少女だったのに、ある事件に巻き込まれて魔道士の世界に無理やり関わってしまったんだと……」

連夜はゆっくりと語りだした

クロノには背を向けたままだったが、クロノは連夜と面と向かって話しているような感覚になっていた

「俺はそこから必死になって彼女が魔道士にならないように工作してきた

だが、俺が見る夢は決して変わらなかった……そして理解した……これは変えようがない運命なんだってな
それに気づいた頃、高町に大嫌いて言われちまってな、あいつの側に居れなくなっただけ」

悲しい声で彼は自分の手を見ている

僕はその光景を見て思った

彼は、この年齢でいったいどれだけ戦ってきたのだろうか

どれほどの災厄、どれほどの敵から影ながら彼女を守ってきたのだろうか？

すると突然、彼はこちらを振り返った

そして、決意に満ちた目で己の拳を僕に向けた

「俺は一度取りこぼした……守りたかったものも何もかも……だが今の俺には力がある！守る力が、大事なものを守れる力がある！俺の大事なものがちよつとでも危険な目に遭うってんだったら、俺は迷わずこの力を使う……！」

クロノ……あんたにもあるはずだ……己の命賭けてでも守りたいもんが……」

その言葉に、僕の頭には二人の人物の顔が浮かんだ

一人は母さん、そしてもう一人は……エイミィ……

「その守りたいものを護る為なら、力を使うことも躊躇うな！俺は躊躇わない！」

たとえ世界の全部が敵になっても、俺は必ず自分の守りたいものは護る！」

最後に「偉そうに言っただけだったな……じゃ」とだけ言って、彼は再び背を向け、僕達を見守っていたアテネという女性と共に、転移ポイントまで歩いていった

『守りたいものを護る為なら、力を使うことも躊躇うな！』

彼の言葉が頭の中に響く

「守りたいものを、護るために……か」

自分の手を見て、次にデバイスを見る

それは言わば僕が持っている力だ

それを使うことを躊躇わない……

「面白い考えだ…… 大道連夜……」

既に視界からも消えた人物の名を呟いて、僕は母さん達のもとへと引き返した

S i d e o u t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5068x/>

リリカルなのはThe origin 永遠の名を使う者

2011年12月5日11時50分発行